
恋愛完全マスター

Toki.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛完全マスター

【Nコード】

N5438E

【作者名】

Toki.

【あらすじ】

有名な進学校に通っている、紺野大将。しかし高校2年生になった彼に待っていたものは、親との無常な勝負だった。『学年末の成績順位を去年より20位あげる。出来なかったら、アメリカの学校で医師の勉強をしてもらう』どうしても医師になりたくない、ここから離れたくない、だけど、この学校で正当な方法を使い20位以上成績をあげるなんて無理だと思っている、彼がとった行動とは…？初、シリアス的内容に挑戦。…読者様に質問です。彼、大将の名前を貴方は間違えずに読めますか？『たいしょう』と読んだ貴方は

不正解です。

#00 プロローグ（前書き）

1話以降のタイトルは、その話で重要ではないのか？ って思う文章をもってきています。
プロローグは別です。

今回、初シリアスな話に挑戦します。

『的な』と書いているのは、シリアスという意味をあまり理解していないからです…。

そんなこんなで書いていますが、よろしければどうぞ最終話までお付き合いください。

『最後まで書き上げる、そして読者様に楽しんでもらう』というのをモットーにして書いていきたいと思っています。

では、『恋愛完全マスター』を堪能してくださいませ〜！

#00 プロローグ

「分かったよ…」

夜、親父の部屋で説教くさい話を聞き終えると、俺は小さい声で返事をした。

俺たち子供は、生まれたときから親という縄に縛られて生きている。もちろん、そうでない子もいるかもしれない。

しかし、いつの時代も結局は経済的に支えてくれる人が居なくては、生きていけない。

だから、親に縛られることが、悪いことではないことは分かっている。

生きていくためには、従わなくてはいけない。

俺も例外ではないのだ。

数秒前、某有名病院で働いている親父に、説教という名の命令を、親父自身の地位を守るため、俺に下した。

「学年末の成績順位を去年より20位あげる。出来なかったら、アメリカの学校で医師の勉強をしてもらう」

去年の俺の成績は29位だった。つまり、上から数えて9位以内に入れということ。

アメリカの学校なんて行きたくない。やっと、親友と言えるような友達も出来たんだ。

それに、医師にもなりたくない。俺にだってしたいことがある。絶対、親に反対されるだろうから、親友以外には言っていないが。

ちなみに俺が、こういう命令を下されたのは、今回が初めてというわけではない。今の高校に居るのも、中学校のときに親父との賭けに負けたせい。

本当は、もっと普通の学校に行きたかったのに。

一言告げた後、俺は親父の部屋の入り口にある、大きな扉を両手で押し開けた。

30mはあると思われる廊下を一直線に進み、突き当り近くにある階段を上ったあと、右に曲がり、10mほど歩くとやっと着く、俺の部屋に足を進ませた。

広い家なんてものは、お金がかかるだけで意味がない。

移動が面倒だし、いい事といえば、小さいころ隠れん坊が出来たことぐらいだ。

それも、小学校低学年ほどで飽きたし、高学年からは親に勉強ばかりさせられたからな。

面倒だったけど、あのころの俺は何でも言うことを聞きたい子だった。

…何でも言うことを聞くのは、今も変わらないが。

自分の部屋へと着くと、俺はベッドへと直進して体を預けた。

「明日は始業式か…」

そうつぶやいた後、俺の意識は遠のいていった。

「お…ゃん。お坊ちゃん、起きてください」

ベッドの横で、俺の体を軽くゆすりながら、起こしてくる人物はキヨ爺。小さいときから、俺をずっと見守ってくれている人物であり、俺がこの家で唯一、心を許せる人物でもある。

「お坊ちゃん、起きてくださらないと、キヨ爺は仕事に就けなくてお父様に怒られてしまいます」

悲しそうな声をあげるキヨ爺のおかげで、俺は朝の誘惑に打ち勝てた。

「ありがとう、キヨ爺」

「はえ？ 何がでしょうか？」

「いや、気にしないでくれ。キヨ爺、おはよう」

「お早うございます」

優しい微笑を俺に向けて、キヨ爺は俺の部屋から出て行った。

俺は再び、朝の誘惑と戦うのを恐れ、速やかにベッドから降り、自分の部屋に設置してある、洗面所へと向かい、冷たい水で顔を洗った。

頭がすっきりしたのか、昨日親に言われたあの言葉を思い出していた。

俺だって、反抗しようと思ったことはある。だけど、そんなことをしては、生きていけない。

結局は、経済的に親を頼らなければならないのだ。

だから俺は、なんとかこの屈強を乗り越え、自分の道を切り開くことを決心した。

つまり、学年末の成績順位を9位以内にするということ。

9位以内なら、頑張ればいける。そう思う人もいるだろうが、俺の通っている学校は、世間にも結構名が通っている有名学校。

つまり、頭がいい奴ばかりなのだ。

その中で、50位以内に入っていることさえ、誇れると思うことなのに、あの親は俺に無理難題を押し付けてくるのだ。

どうしても、医者になりたいらしい。

よし、頑張るぞ！

そう心に誓い、俺は天にこぶしを突き上げ、俺はご飯を食べにリビングへと向かった。

「あ、キヨ爺、学校の用意を準備しておいてくれないか？」

リビングに着いた俺は、いつものように俺がご飯を食べる席の隣で、いつも立っているキヨ爺に声をかけた。

「わかりました」

そういうキヨ爺は、いつもどおり笑顔だった。いつもニコニコしているのに、疲れはしないのだろうか？

そんなことを思いながら、ご飯を食べ終えて、洗面所へと向かう。

歯を洗い終わると、次はヘアーチェック。ワックスをつけ、いまどきのカツコイイと評されている若者の髪型・・・にするわけではない。

俺は、むしろその逆だ。

わざと寝起きのような髪型へと変え、ボサボサにする。

…ボサボサにするところは、今の若者とさほど変わらない気がするが。

とにかく、カツコイイという表現から遠ざける努力をする。

その髪型プラス、どっかのオタクがかけてそうな、度の無い黒縁メ

ガネをかけ、制服も優等生にあわせて、乱れた服装をせずに、きちんと着る。

どうしてこんなことをするかって？

…言いたくは無いが、俺は顔には結構の自信がある。

中学校時代の俺は、街を素の姿で歩いていると、2日に1回は『モデルしない？』と聞かれるほど…。

女共には、無駄にモテた。ファンクラブなんてものも出来ていたらしい。ストーカーされることなんて、日常茶飯事だ。

さすがに、刺してくるとかは無かったが。

とにかく、そんな生活が嫌で、俺はその日常から抜け出し、今の姿となった。

奇遇なことに、今通っている高校には、中学校の知り合いがいない。

今の俺と前の俺を合点させるのは、名前と住所だけ。

去年、1年間学校に居たが、ばれそうになったことは一度も無かった。

高校の奴らで、俺の素の姿を知っている友人といえば、高校で出来た親友ただ一人だけ。

「よし、出来た」

俺は目の前にある、壮大な鏡を見て一言呟いた。

キヨ爺が準備してくれているであろう、学校の準備を取りに今一度リビングへと戻る。

そこには親父と、母親がご飯を食べていた。

親は、俺のこの姿を見ても何も言わない。

俺なんかの事に、関心がないのだろう。

無言で鞆に手をかけて、玄関へと向かった。

「大将」

「何？」

俺は親父に呼ばれて、鞆を片手に振り向いた。

「勉強、頑張れよ」

「うるせえよ」

そう言いたかったが、口には出せずに俺は無言で玄関のドアを開いた。

#00 プロローグ（後書き）

…メインヒロインが出てくる気配もないですね。
申し訳ございません。

推敲がもつぱら苦手な盗鬼ですので、もし変な箇所があればドンド
ンメールでもなんでもしてあげてください。

一応、

メールアドレス net|touki|net@yahoo.co.
jp

感想をたくさんいただけると、作者の励みになります。

あと、一話一話のあとがきをここに書くのは好きじゃないので、自
分のブログにその話の裏話等書く予定です。
よろしければ、訪問してみてください。

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/

#01 日曜日：暇？

春。

そよ風に乗せられ、この時期がやってきた。

今年も、ただ平凡に過ぎていく季節だと思っていたのに。

昨晚、ちよつとした強風は、俺に襲い掛かってきたのだ。親との勝負に負けるわけにはいかない。何度も言うが、ここから俺は離れないのだ。

「一席、青木 夕菜さん」

教壇に立っている俺たち2年A組の担任である女の先生が、窓側の一番前の席に座っている女の子の名前を呼んだ。

呼ばれた女の子は、聞こえるか聞こえないか、小さな声で返事をする。

これから一年間を、一緒に教室で勉強をする仲間達がいるこの教室で、俺は静かに座っていた。

学校全体の人数は他に比べたら多い。だから、一年間この学校にいたからと言っても、このクラス内でも初めて見る顔ばかりだ。

その中に、俺の親友と呼べる男が入っていたのが幸いな事だろう。

「13席 小泉 龍之介君」

「はい」

ちなみに、さつき返事したのが俺の親友と呼べる友である。

「14席 紺野…」

先生が、名前を呼ぶのを途中で止めた。

「紺野 た、たいしょう君？」

「…だいすけです」

「あ、ごめんね！ 紺野 大将君」

俺は控えめな声で返事をした。

俺の名前は紺野^{こんの}大将^{だいすけ}。大将と書いてダイスケと読む。大抵の人は、俺のことを最初『たいしょう』と呼ぶのだ。慣れたから、間違えられたからと言って、どうって事ないが。

そんなことを考えているうちに、あの先生はこのクラスに居る全生徒の名前を呼び終えたようだ。

「私は、諸戸 未来って言います。『みらい』と書いて『みく』と読むの。間違えられやすいぶん、私の名前は覚えられやすいのよ」
そんなことを、汚れのなさそうな笑顔で言う。

「これから、みんなに色々お世話になるけど、よろしくね！」

数人の生徒が「よろしく」と返しているところを見ると、この一年間なんとかこのクラスはなんとかやっていけそうな気がした。

まあ、この先生だからってこともあるのだろうけど。

「ちなみに、私の担当科目は現代文だから、分からないところがあったら、いつでも聞きに来てくださいね！」

先生が元気よくそういうと、クラスの半分ぐらいの人が「はい」と返事をした。

…いや、もっと簡単に言うとかラスの男子共だ。

進学校と言っても、中身は男。あんな若くて、可愛い先生がいるのに、興味を持たないわけがない。

かという俺も、先生に興味を持った一人である。

それは、男の性とか、そういうのではなく、担当科目に興味を持ったのだ。

俺が、成績不順の理由の大半は、現代文の点数が平均並みなのだ。

どうしても、得意になれないあの科目。

あの科目を克服しない限り、親と約束した成績には届かないだろう。

どうも、この進学校というやつは、一つの科目でも平均的な点数があったら、上位に食い込めないようになっていっているらしい。

だからと言って、現代文だけを勉強しては、他の科目で点数を落としてしまう。

なんとか…楽に現代文の点数を取れる方法はないものか。

そんな事を考えながら、1ヶ月と半分ぐらいの時間がたっていた。

その間には、クラスの生徒と仲良くなる機会もなく、ただ時間だけが過ぎていくだけだった。

しかし、その時期には一回目のテストがあったのだ。俺はいつも以上に勉強をしたつもりだったのだが、点数はいつもと同じぐらい。それが、少しいいなって感じたぐらいだ。

それにしても、今回もどうやら現代文が俺の足を引っ張ったようだ。つまり、学年9位以内はまだ手に届く距離ではなかった。

「なあ、龍之介」

俺は最後のテスト返却時間のチャイムが鳴ったと同時に、前の席に座っている龍之介の背中をシャープペンシルでツンと突っついた。

「ん？」

「現代文、どうしたら点数を取れると思う?」

「…カンニング」

「お前、顔に似合わず変なこというよな」

龍之介のルックスは、一言で言うとカッコイイ。

付け加えて説明すると、整った顔をしていて、眼鏡をかけている。しかし、その眼鏡も度の入っていない眼鏡。俺と同じように、カッコイイと言われるのが嫌でかけていると言っていたが、外見は全く変わっていない。むしろ、その眼鏡のおかげで、かっこよさが上昇していることを龍之介は気づいてない。まあ、同じような感情を抱いている俺だからこそ、ここまで親しくなれたのだろう。

噂に聞くところによると、こいつの熱狂的なファンが、龍之介様を守る会なんてものを作っているらしい。

どこの漫画から引つ張り出してきた話なんだ。ベタすぎるだろう。

「龍之介は、頭良いからいいよな。勉強しなくても、点数取れているんだから」

「勉強している」

言つのを忘れていたが、龍之介はちよつとした、学校の有名人だ。と言うのも、龍之介は入学して以来、学年成績を一位以外とったことがない。そんな実績を残しているのは、創立以来龍之介だけらしい。

「その勉強の仕方を教えてほしいものだよ。俺がどつかの国に飛ばされて、奴隷同然の生活をしてもいいというのなら別だが」

「してもいい」

「おい」

「冗談」

…言っておくが、さつきからこいつは俺の顔を一度たりとも見ようとはしない。

ずっと、手に持っている本に目を向けている。

なんだか分からないが、難しい本ということは見ただけで分かった。

だって、英語で全部書いてあるのだから。

俺だって、一応そこその成績は取っているから、辞書や自分の頭を使って読んでいけば、5分ぐらいでページを読み終わられる自身はある。…が、こいつときたら、一度も辞書を見ずに、そこに日本語でも書いてあるのかと思うぐらいのペースで読んでいる。

つまり、早いのだ。早すぎるのだ。

どれぐらい前だか忘れたが、「ちゃんと分かって読んでいるの？」と、一度聞いたことがある。

こいつは俺の顔をチラッと一瞬覗いてから、本にもう一度目にやり、

英語の文章を見ながら、スラスラと日本語で話し始めたのだ。

将来、英和訳の仕事をさせたら儲けられるだろうな、と思うほどに。

「日曜日：暇？」

次の授業開始を知らせるチャイムがあと少しで鳴るのではないか、というタイミングで龍之介は俺に質問をしてきた。

「日曜日暇だけど、何かあるの？」

龍之介から、遊びの誘いが来るのは滅多にない。この機会を断ってしまったら、あと数年はお目にかかれまいであろう場面だ。

「…」

俺の質問には一切答えずに、本を閉じて俺をじっと見ている。

「ひ、暇だよ！」

俺が少し大きめな声でそう答えると、龍之介は前を向いた。同時に授業が始まるチャイムが鳴る。

「素の姿で来てほしい。時間と場所はまたメールをする」

そう言った龍之介の後姿を見ながら、そういえば、今日は金曜日だったなと心の中で呟いた。

#01 日曜日：暇？（後書き）

貴方は、彼の名前を読めましたでしょうか？

紺野は普通に読めますが、大將は『たいしょう』と読んだ人が多いのではないのでしょうか？

大將〓だいすけ なのでお気をつけください。

#02 …ひとつ、言う

金曜日の夜、11時半。

ご飯も食べ終え、お風呂にも入り、のんびりとするこの時間に、ベッドの脇の机から、俺の好きな音楽が流れてきた。

簡単に言うと、携帯が鳴っているのだ。

俺は「はいはい」と呟きながら携帯へと手を伸ばす。

送信者の名前を見ると、ディスプレイには小泉 龍之介と記されていた。

携帯を片手でパカッと開きメールを開くと『日曜日、16時半、トドの銅像の前』と、表示されていた。

龍之介って、メールでもこういう単調な喋り方するんだよな。

そんな喋り方して疲れないのかな、なんて思ったのは数回のレベルじゃない。

俺は『了解』と龍之介の喋り方の真似をして、送り返してやった。

それにしても、16時半って微妙すぎるだろ。集まる時間にしては。

何があるんだろう。

そんな疑問を持ちながら、その日の夜は眠りについた。

時は立ち、俺は綺麗に晴れた空を眺めながら、駅前にあるトドの銅像の前で一人ぼつんと立っていた。

今の時刻は、16時。

実は、ベタな話なのだが、かれこれ俺は30分以上前からここにいます。つまり、集合時間の一時間前にはここにいたのだ。

「ねえねえ、お兄さん。今なにしてるのお？ 暇なら私と遊ばない？」

「すみません。友達を待っているんですよ」

俺は適当に笑みを作り、化粧の濃い20代前半であろうお姉さんに言った。

ここに来て、30分ほどしか立っていないというのに、俺はすでに3人のお姉さんから声をかけられている。だから、素の姿は好きじゃないんだ。

「お友達？ じゃあ、お友達と一緒にいいから、お姉さんと遊ぼう」

お前が、音符をつけても可愛くねえんだよ！！ なんて言っただけで、そんなことを言ったら面倒なことになるのは目に見えている。

「ごめんね、友達彼女も連れてくるんだ」

「じゃあ、Wデートでいいじゃない？」

…しつこいなあ。

俺が「しつこいよ」と口に出して言おうとしたとき、隣から聞きなれた声が俺の耳を捉えた。

「…邪魔？」

「りゅ、龍之介」

いつ来たか分からないが、俺の隣でちょこんと立っている龍之介を見てみると、センス抜群の服を着ている。

そういえば、私服の龍之介を見るのは、これが二回目だ。

だけど、そのときは眼鏡をかけて、少し髪の毛がボサボサしていた。今はというと、眼鏡をはずして、髪の毛をビシッと決めてきている。そんな龍之介を見るのは、これが初めてだ。

一つ言っておく。この龍之介を見ると、世界で一番カッコイイの一言で全てが片付けられそうだ。

ちなみに、龍之介が俺の素の姿を見るのはこれが二回目だ。一回目は俺が隣に立っているのに、俺ということに全く気づかなかった龍之介に、腹を抱えて笑った覚えがある。

それにしても、この場にこんなカッコイイ龍之介がやってきたら、あのケバイ女が食いついてくるに決まっている。ややこしいことに

なりそうだ。

「お、お兄さんのお友達？」

ほら、食いついてきた。

「二人ともお姉さんと遊ぼうよ！ もう一人、ものすごく可愛い女の子を誘ってあげるからさ！」

その女が、目をピカピカ光らせながら友達を呼ぶのであろう、携帯を手に取ったときだ。俺の近くから、罵倒がとんだ。

「女、うざい。立ち去れ」

そういったのは俺じゃない。

「な、何よ!!」

「う・ざ・いつて言っているんだ。お前は日本語もわからないのか？ Shall I speak in English？」

「ち、ちよつとカツコイイからって調子に乗ってるんじゃないわよ！」

そういいながら、携帯を片手に女はどこかへ立ち去ってしまった。

「りゅ、龍之介？」

「…何？」

そう、啖呵を切ったのは龍之介だった。

「いあ、何も…」

俺は、何故か何も龍之介に聞けなかった。

とにかく、あんな龍之介を見るのは初めてだったし、龍之介が単語ごとに区切らなくても、喋ることができることにも驚いた。

驚く場所が、少し違う気がするけど、気にしないでほしい。

そして、あの罵倒を浴びせた龍之介に何を話していいのか分からないまま数分間、沈黙が俺達の間流れた。

「き、今日は何かあるのか？」

俺はこの嫌な沈黙に負け、龍之介に質問をしてしまった。

まあ、この質問は妥当だと思う。トドの銅像の前に俺達は揃ったというのに、龍之介は動こうとはしないからだ。

「…ひとつ、言う」

「…なに？」

「ごめん」

…いったいどうしたものか。あの龍之介が、俺に対して謝るなんてもしかすると、今日は何か変なものが空から降ってくるかもしれない

い。

そう思つて、俺が上を向いたときだった。

唐突に龍之介は「来た」と呟いた。

「な、何が？」

俺がそう聞くと、龍之介は無言で手を垂直に上げ、ある人物を指差した。

「やつほ、龍之介！ 約束のイケメン君は連れてきたのか？」

そう言つてきたのは、笑顔がとっても似合つ、いまどきのお兄さん。チラッと見ただけで判断すると、俺達よりかは年上のような。

「…これ」

今度は俺を指差す龍之介。

その笑顔が似合うお兄さんは俺のとこまで来て、手を前へと出してきた。俺はその手を取り、握手をする。

「俺は龍之介の先輩で、おおやま きょうへい大山 恭平きょうへいつて言つや。よろしくな」

「紺野 大将です。よろしくおねがいします」

俺は失礼がないように、丁寧に頭を下げた。

「そんな堅苦しくせんでもええで！ もっと楽に行こうや」

「あ、はい」

… 関西弁だ。

龍之介の先輩って言うていたけど、龍之介はいつたどこに住んでいたのだろう。

恭平さんは関西弁使っているから、関西にいたのか？

…とにかく、謎だ。

去年、ずっと一緒に居たというのに、本当は龍之介のことを全く知らないかもしれない。これは、友達として悲しいことだな。

「んじゃ、いくで！」

そう言つて、龍之介の先輩… 恭平さんは先頭をきつて歩き出した。

#03 働かしたことのなかった悪知恵

俺達三人が向かった先は、駅から少し歩いたところにあるカラオケだった。

…どうして、カラオケなんだ？

この三人でカラオケに行つて、何が面白い？

龍之介は大人しくて、カラオケとかそういうのは似合わない。かといふ俺も、カラオケなどの無理やり盛り上がる部類は苦手なのだ。

この三人で唯一盛り上がりそうなのは、恭平さんだけだろう。

…まさか、あれじゃないよな？

男三人：人数的には十分可能性はありうる。

昔、先輩にそのかされて、それに行ったものの、精神的、肉体的に疲れた記憶がある。

中学生で、そういうことをするのもどうかと思うが。

「大将は、龍之介と同じ高校なん？」

カラオケの部屋に入るなり、恭平さんが質問をしてきた。

「え、あ、はい。龍之介にはいつも勉強とか色々お世話になっていました」

「そんな敬語使わんでもええで？ 俺、困るやんか」

そついいながら、軽く微笑む恭平さん。

不覚にも、女なら恋に落ちるのではないか？ と思ってしまった。

…俺は決してホモじゃないぞ？

そんな他愛もない会話をしていると、俺達のいる部屋のドアが開くと、そこには女が二人入ってきた。

「俺の嫌な予感的中か…」

小さな声でボソツと呟くと、龍之介は俺の顔を見て小さくごめんと呟いた。

いや、龍之介に謝られても困るのだが。正直、龍之介にこれは頼られたってことだよな？ それは友達として嬉しいことだ。そう、考えることにしよう。

「恭平君やつほお！ 合コンなんて久しぶりだから緊張するよ」

ニコニコしながら、最初に入ってきた女がそう言った。

その後ろについてきている女は、そのニコニコ笑っている女の顔を見ながら「うそだあ！ さっきまで寝ていたじゃない」と笑いながら言っている。

「だ、黙っててよ！」

「果歩ちゃんは、毎回そうなんやからあ」

と、恭平さんも笑って言っている。

どうやら、一番に入ってきた女は果歩と言うらしい。恭平さんとは知り合いのようだ。

俺と龍之介は、そんなハイテンションな三人についていけず、ただ椅子に座って苦笑するしかなかった。

その間に、果歩と、もう一人の女は隣同士で席に座る。

「あれ？ 二人なん？ もう一人はどうしたんや？」

恭平さんは不思議そうにしながら、隣に座った果歩に聞いていた。

「えっと、トイレ行ってるんだってさ。人数がいなかったから、無理矢理連れてきたの。初心だから、あまりいじめないであげてね」

「いじめへんよあ！ 俺は優しいからなあ」

「女の子だけにはねえ」

果歩は笑いながら恭平さんと会話をしている。そんな姿を、俺と龍之介は先に頼んだジュースを飲みながら見ていた。

そうしたら、突然果歩がドアのほうを向いた。

「ん？ どうしたんや？」

「いや、未来トイレ長いなあって思って」

…ん？ 未来？

「そうだねえ。未来、もしかしたら、緊張してるんじゃない？」

…未来？ みく？ どうかで聞いた名前だな…。

噂をすれば影がさすと言いが、このときは、ああこのことわざは本物だなんて思った。

その会話の直後に、ドアが開いたんだから。

「ごめん、ごめん！ トイレに行列ができてちゃ…」

…うん。確かにどこかで聞いたと思ったわけだ。

ドアから入ってきた女の言葉が途中で途切れる。それは、俺と龍之介を見たからだろう。

俺と龍之介もその女性を見て、何も発することができなかった。

そりゃあ、言葉にもつまるさ。

「…小泉龍之介君だよな？」

だって、そこにいるのは、俺達の担任なんだもの。

「せ…先生？」

俺よりも先に口を開いたのは龍之介だった。後に、このことを感謝しなくてはいけないなんて、今は知る由もない。

「ど、どうして、龍之介君がここにいるの!？」

未来先生の、少し大きめの声がカラオケボックス内に響いた。

「…呼ばれた」

そのあと、龍之介は口を開こうとしない。

「知り合いなの？」

恭平さんの隣に座っている、果歩が驚いた表情をしている未来に質問をする。

未来先生は「ええ…教え子よ」と、果歩の顔を見ずに返事をした。

未来の返事に、未来先生のお友達二人がケラケラと笑い始める。

その笑い声を無視するかのように、未来は机をはさんで前に立った。

「り、龍之介君、高校生が合コンなんかしちゃいけません!」

未来先生は、龍之介の机をバンツッと叩いた。その音は、先生の友達と思われる二人の笑い声を抑えるのには、十分なほどの音だ。

「す、すみません…」

龍之介は申し訳なさそうに、下を向いている。

「未来ちゃんってゆうたっけ？ ええやないか。細かいこと気にしていると可愛い未来ちゃんの顔にしわが出来ちゃうで？」

「貴方も無責任なことを言わないでください！ あなたは見る限り二十歳を超えているでしょう？ そんな人が、高校二年生にこんな事を……」

恭平さんの、ここを和ませるための言葉だったのだろう。しかし、それが裏目と出てしまったようだ。余計に、未来を怒らしたらしい。もはや最後まで言葉を言い切れていない。

「そら、俺は21歳やし……」

拗ねたように恭平さんが言うと、未来はギラッと恭平を睨んだ。

それがおかしくて、俺は少し笑い声を漏らしてしまった。すると、先生は俺のほうを向いてきた。

「貴方も貴方です！ 高校生をこんなところに連れてくるなんて非常識ですよ！」

「す、すみません……」

と、答えた。

……って、ちょっと待て。今の今まで、未来先生の気迫に押されて全く気づかなかったが、未来先生は、俺が先生の生徒である紺野 大将って事に気づいていないのか？

さつきから、俺を名前で呼ぶ様子もないし、さつきの会話からすると、俺のことを高校生とすら思っていないらしいし。

中学校のときから、20歳だと思われていた俺だから不思議ではないが、先生とは一ヶ月半ほど、俺の顔をどこかで見ていたはずだ。

ただ影が薄くて、俺のことを知らないだけなのか、俺を知っているけど、気づかないだけなのか。

「まあ、何はともあれ、未来ちゃんはまだ生徒と合コンしてもうたんや。もう諦めて、今日は一緒に楽しもうや！」

太陽様がいるのではないかと思うぐらい、まぶしい笑顔を恭平は未来先生に向けた。

未来先生も諦めたのか、ゆっくりと椅子に腰を下ろす。

…ちよつと、鎌を掛けてみるか

「未来さん…って呼んでもいいでしょうか？」

俺は不自然の無いように、軽く微笑みかけた。

「…はい」

未来先生は、俺のことを獣を見るような目で見ているが。

「龍之介は、学校ではどのような子なのでしょう？」

多分、この会話を聞いている龍之介も、恭平さんにも、俺の意図は分かっていないだろう。

「え？ だい…って！！！」

恭平さんが、不思議に思ったのか、俺の名前を呼ぼうとしたときだった。空気の読める龍之介様が、恭平さんの足をぐつと踏んで止めてくれた。本当に感謝。

「龍之介君ですか？ そうですね、とても静かで、授業も真面目に聞いてくれますし、仲のいい友達といつも楽しそうに話していますね」

…楽しそうに？

細かいことにツツコミはいれなくておこつ。とりあえず、龍之介が学校でいつも一緒に居るのは俺だ。と、言うことは俺のことは、ちゃんと先生の頭の中で認識しているって事になる。

つまり先生は、俺が紺野 大将って事に気付いていない。

…ここで、俺の今までの人生で、全くと言っていいほど働かしたことのなかった悪知恵が働いた。

「龍之介が楽しそうに？ それは一度でいいから見てみたいですね」

俺は、今までにないぐらいのスマイルを未来先生に放った。

#04 歌いましょう

俺には少し自信があったことがあった。

あまり、これを自慢：みたいな形にはしたくないのだが、モデル級並み容姿だ。

素の姿で街に出ると、1人や2人、多い日には10人ほどに逆ナンをされた日もあった。

それほど、俺の容姿は女ウケがいいらしい。

しかも、今日はいつものはしない髪の設定もしてきた。

いつも以上に、カッコイイと自分では思っている。

…その容姿を生かして、俺はある女を落としてしまおうと考えたのだ。

その女とは、担任の先生でもあり、俺の最も苦手な現代文のテストを作っている張本人。

俺の作戦はこうだ。

ばれないように先生の彼氏、または一番仲のいい男友達に成り上がる。そして、テスト作成中にそつと現代文のテストを覗くのだ。

ばれた時の恐怖はあるが、俺が日本に残るにはこの手しかない。一番簡単で、一番確実な方法だ。

「よっしゃ！　まずは自己紹介から始めよか」

そう言ったのは、今回の司会役である、恭平さんだった。

「まあ、最初は俺からいこか。大山　恭平って言います。よろしくなああ！！」

そう言つて、両手をあげて「どうも、どうも」としている。

周りの女子と、俺は盛り上がって拍手をした。龍之介と未来先生はいまいち盛り上がれないようだ。

「じゃあ、次は龍之介な！」

「…龍之介。高校生」

それだけを言つて、龍之介は目の前に置いてあるジュースを飲んだ。

俺は恭平さんに紹介される前に、自分の名前を言う。

「俺の名前は、堂本　悠ゆづと言います。龍之介とはちょっとした知り合いで、今日呼ばれたんですけど、こんな美人さんと遊べて、本当に嬉しいです。今日はよろしくおねがいします」

俺はそういうと、ちょっとした意味をこめて、微笑みながら未来先生の顔をチラッと見た。

な、何よ。みたいな顔をして、こっちを見返してきたが、俺はすぐに目をそらした。

「こちらこそ、よろしく!!」

そう叫んだのは、果歩という女の人だ。貴方には言っていないんだけどね。

恭平さんは、不思議そうな顔をしていたが、話をずっと進めてくれた。

「じゃあ次は、そっちの自己紹介をお願いね」

「私から行きます! 柴田^{しばた} 果歩^{かほ}23歳! 今は彼氏募集してます!」

ニコニコして可愛い笑顔で、俺と龍之介に向けてくる。

「もう、果歩ったら…。私は立花^{たちばな} 美智子^{みちこ}よろしくおねがいします」

そういえば、色々ありすぎて気付かなかったが、よく見てみると、この二人結構美人と言われる部類に入るのかもしれない。

「未来。次は未来の出番だよ!」

果歩がそういうと、未来先生はため息をついて「諸戸 未来です」

とだけ言った。

「もう未来だったらあ。せつかく未来の彼氏を探しに来たのに、そんな調子じゃ駄目じゃない!」

果歩がそういうと、未来先生は「頼んだ覚えはないけど…」と小声で答えた。

「わ、私達、ちょっとトイレいつてくるね!!」

入ってきて数分。早くも女の人たちはお手洗い相談タイムに行ってしまった。

果歩と美智子が立って、二人で未来の腕を片手ずつ掴んだ。

「い、いたっ! 私はさっきトイレ行っただよ!」

「いいの! 未来も行くの!!」

果歩と美智子の力に負けたのか、未来はズルズルと引きずられて行った。

ドアの閉まる音がすると同時に、恭平さんは俺のほうへと体を向ける。

「え? あの先生って、大将君の高校の先生じゃないんか? なんです、あの先生は龍之介だけ怒ったんや? どうして大将君は偽名なんか使ったん? 高校生ってことがバレるのを恐れたからなんか?」

「いや、あの…」

俺が言葉につまっているのを気にせず、恭平さんは喋り続ける。

「なんなん？ 堂本 悠って！ 誰？ どうしてそんな嘘ついたんや！？」

俺が何も返せないと知ってか、隣に座っている龍之介が助け舟を出してくれた。

「恭平、うるさい」

龍之介の声は、静かながらも怒りがこもっていた。それは、俺が偽名を使ったからではないだろう。… たぶん。

「大将、意味があつて嘘ついた」

… さすがは天才というべきか。俺のことは、何でも御見通してか？

恭平さんは、龍之介の言葉に圧倒されて、俺に質問を投げかけるのをやめた。

「恭平さん、すみません。理由は色々とあるのですが…」

俺が理由を話そうとし始めたら、ドアの向こう側に未来先生達の姿が見えた。

くそ…。説明したいのに。

「と、とりあえず！ 今は俺のことを悠と呼んでください！ お願いします！」

俺が少し早口で喋ると、恭平さんは仕方ないなあとおつばやきながら、髪をボリボリと掻いた。

「たっただいまあ！」

元気よくこの部屋に入ってきたのは、やはり果歩だった。あんなデシヨン高くて疲れないのだろうか。

「おかえり！ もう、待ちくたびれたでえ！」

恭平さんがさういうと、隣にいる美智子も一緒に謝っていた。

未来はというと、さっきよりはマシな顔になったが、どこかふてくされている様子がする。

「そんじゃ！ せっかくカラオケ来たんやし、歌おうや！！」

恭平さんはさういうと、カラオケボックスに置いてあるリモコンを慣れた手つきで操作し、あっという間に曲を入れてしまった。

それからどれぐらい立っただろうか、俺も数曲いれては歌い、盛り上がる振りをした。

そして、また俺は歌う。歌っている曲数の順番で言うと、恭平さんと果歩さんが同じぐらいで、その次に美智子さん、その次に俺といったところだろうか。

未来先生と龍之介は歌おうともしない。

「未来さん」

一曲歌い終わった俺は、さっきまで座っていた場所とは違い、未来の隣へと腰へとおろした。

「なんででしょうか？」

「カラオケはよく来られるんですか？」

俺は不自然の無いように、微笑みかける。

「…あまり行かないですね。先生という職柄、あまり関わることがないので」

「そうなんですかぁ。未来さんの声は綺麗なのに、もったいないですよ」

俺がそういうと、そ、そんなことない！ と言いたそうな顔を見せた未来先生。その仕草が少し可愛く思えた。

まあ、俺だって男だ。可愛いと思ってしまふのは、仕方ないことだろう。

「今日、一度も歌ってないのでは？ もし、よかったら一緒に歌いましょうよ」

そして俺は、いつの間にか会得していた、女落としての笑顔を見せた。この俺の誘いを断る人はいない。

「…別に」

「じゃあ、歌いましょう！」

俺はニツコリとして、適当に曲を選んだ。

「これでいい？」

俺がそう聞くと、未来先生は小さくうなずく。

この肯定の合図は、一緒に歌う気があると受け取っていいものだろう。

俺はリモコンを手にして、曲を入れた。

未来先生のほうをチラッと見ると、龍之介に目が行っている。それもそうだろう。なんたって教え子なんだから。

それにしても、教え子と合コンをよく許したもんだ。どうせ、あの果歩と美智子が、俺と龍之介と恭平さんの格好良さのあまり、なんとか未来先生を言いくるめたって所だろう。

それはそれで、俺にチャンスが回ってきたのだから、果歩と美智子には感謝をしなくてはいけない。

俺が曲を入力してから、数曲終わったとき、俺の入れた音楽が流れ始めた。

「ほら、未来さんマイク持って」

俺は、さっき歌っていた恭平さんからマイクを借りて、未来先生に

渡す。

未来先生は乗り気ではないが、なんとか歌ってくれそうな雰囲気だ。俺が入れた曲とは、ちょっと昔に流行ったバラード系の曲。俺はちよつとだけ未来先生との距離を詰めた。

未来先生は一瞬俺を見て、すぐさま歌詞が流れる画面へと目を向ける。

そして俺達は歌い始めた。

「おー！ 未来ちゃんの歌声最高やん！」

歌い終わると、拍手が沸き起こる。

俺もビックリして、曲の途中で少し歌うのをやめてしまった。

だって、あまりにも未来先生の歌声がすばしかったから。

多分、そこらの歌手じゃ、足元にも及ばないだろう。それほどの実力があつた。

「未来さん…すごいじゃないですか！ とても上手かったですよ！」

隣で座っている未来先生に言葉をかけると、少し困った顔をして未来先生は声を出した。

「お、お世辞はやめてください」

「お世辞じゃないですよ。本当に上手だなんて思って…」

そうだ。

もともと、声の質はいいな、とは思っていたが、ここまですごいとは思っていなかった。

「そんな…」

先生は、顔を真っ赤にして顔を下へと向けた。その仕草を俺は可愛いと思うてしまう。

俺が「可愛いですよ」と言おうとした時、部屋のテレフォンが鳴った。

それは、この楽しい時間を終わらせる合図だった。

#05 一緒に帰るしなくなっちゃいましたね

「んじゃ、今から飲みにも行きますか？」

カラオケも終わり、店の前で集まる形になると、果歩が右手でちょいっと飲む振りをして言った。

2時間という時間はあまりにも早すぎた。もう一曲ぐらい、未来先生の歌声を聞きたかったものだ。

「行こかあ！」

果歩の発言につられて、恭平さんは果歩の真似をしながらそう言った。

「そ、そんなの駄目よー！」

と、未来先生。

当たり前だろう。龍之介という未成年でもあり、学校の生徒である人物を連れて、人目につく場所にいけるわけがない。

特に飲み屋という場所なんかには。

えー！ と言って、果歩が残念そうな顔をしているが、どうやら未来先生は譲る気が一切ないらしい。そんなオーラをさっきからプンプン匂わしている。

「…大丈夫」

そう呟いたのは、本日一番口を開いていないと思われる龍之介だった。

「りゅ、龍之介君！」

「もう少し、遊びたい」

龍之介は視線を未来先生へと向けた。俺もあの視線を幾度となく食らったことがあるが、拒否できるような気持ちにはなれない。

「け、けど……」

あの視線を食らいながらも反発しようとする未来先生を、俺は心のそこから褒めてあげたい。

「未来さん、いいじゃないですか。龍之介には飲ませませんから」

俺も本当は未成年だけだね。

「でも……」

「先生」

龍之介の必殺視線炸裂！！

「……はあ、しょうがないわね」

先生は頭をポリッと一回掻いて、ため息をついた。

「よし！ 決まり！」

果歩がそう言っていると、みんなは歩き出した。

「龍之介君。未来は先生としてどうよ？」

果歩が龍之介の隣に座って、龍之介に話しかけている。

「…いい先生」

今、このテーブルに届いたジュースをストローで吸いながら、龍之介はそう答えた。

「そっか！ よかったね、未来！」

「ちょ、何聞いているの！！」

真っ赤な顔をして照れている未来先生を見ると、少しドキツとした。

俺達は、あのカラオケの後、話し合いの通り居酒屋に来ている。

お店の人も俺を高校生とは見ていなくて、普通にお酒を出してくれている。先生もまだ、俺が紺野大将っていう事には気付いてないようだ。

「そっいえば、悠さんは今何歳なんですか？」

「と、年ですか!？」

隣に座っていた美智子がいきなり話してくる。しかも、思いもしなかった年の話だ。

…実際、俺が今何歳ぐらいに見えているかなんて、全くわからない。下手に答えると、未来先生に怪しまれるのではないのだろうか。…ここは一つ。

「何歳ぐらいに見えます?」

俺は美智子さんのほうに少し体を向けて、笑みを浮かべて試みてみた。

「え、えっと…」

そう言ったきり、美智子は顔を赤くして下を向いてしまった。

数秒たった後、彼女はボソッと口を開く。

「にじゅー…」

「20歳に見えますか?」

「は、はい」

それぐらいに見えるのだろう。男が女の人の年齢を答えるときに、見た目より少し年を低く言うとかの思考も、今の美智子にはなさそうだし。これは参考になった。

「正解ですよ」

俺はニコッと笑って答えると、やったーと喜んだ。

…っというか、俺は美智子とやらと喋っている暇はないんだ。少しでも未来先生に好印象を与えてはいけないのだから。

俺は左に座っている未来先生に話しかけた。

「未来さん。ちゃんと飲んでいますか？」

俺が聞くと、コクツと小さく頷いた。極力話さないようにしているのを見て取れる。学校では結構、活発的な女の人のイメージがあるのに。

「未来さんは、科目担当は何を受け持っているんですか？」

俺が質問すると、俺の顔を一瞬チラツと見て、現代文と答えた。

「現代文って、色々覚えなくちゃいけないから、大変な科目じゃないですか？ 僕は高校生のとき苦手な科目でしたね…」

俺がそういうと、先生は目の色を変えて話し始めた。

「現代文っていうのは、とても深みのあると思うんですよ。本を読んで、日本語を学んで、それを言葉にして伝える。意思の伝達には必要となるものなのです。学んでおいて損はない。学校の授業でも、一番と言っているほど、将来に役立つものなのですよ」

…先生の力説。この話は、この前学校でもしたのだ。こういう話も含めて、分かりやすい授業だから、未来先生の授業は生徒にはとても人気なのだ。

かという俺は、現代文が大の苦手。別に嫌いじゃないし、先生の授業が分かりにくいとも思わない。ただ、苦手なだけなのだ。

それからしばらく未来先生と会話をした。最初のころに比べては、心を開いてくれたような気がする。学校のと看ほどの先生ではないが。

「ねえねえ、悠さん」

右隣に座っている美智子に服の袖をちょんちょんと引つ張られた。

「な、何ですか？」

「悠さんは、彼女いないんですかあ？」

二へへと笑いながら俺に質問をしてくる。どうやら、美智子は酔っているようだ。ここに来てから、早2時間ほど立っている。どれぐらい飲んだのだろう？　ちなみに俺は、ジョッキを数杯飲んだだけだ。

「い、いないですよ。モテませんから。それより、美智子さん酔っているようですが、大丈夫ですか？」

「でんでんだいじょーぶ！　酔ってないもん！」

…いや、普通に酔っているから。

「きよ、恭平さん！」

俺は助けを求めるために、美智子の前に座っている恭平さんに声をかけた。

「なんや〜!？」

…どうやら、彼も酔っているらしい。果歩と無駄にベタベタしている。果歩はというと、苦笑いを浮かべているが。

「ど、どうしよう?。」

俺は前の席に座っている、まだほろ酔い程度であろう果歩に話しかけた。

「まあ、そろそろお開きって言う手もあるけど」

「そうですね…明日学校だし」

俺がボソツと答えると、果歩が俺の言葉に反応した。

「え? 悠君って学校に通っているの?。」

…あ。

「い、いや! 俺じゃなくて、龍之介や未来さんですよ。特に未来さんは人に教える立場なんですから」

ね!?! と俺は言いながら、未来先生のほうへと顔をむけた。

いきなり話を振られてビックリしている。

「え、ええ」

「じゃあ、今日は解散ということで」

俺のその言葉に肯定の意を表す3人。3人というのは、恭平さんと美智子さんを除いた3人だ。

「未来先生は、家はどのあたりなんですか？」

俺の質問に、未来先生は少し間をおいてから答えた。

「西区よ」

西区……。俺の家と少し近いな。

「じゃあ、僕が送っていきますよ。僕は北区なので」

「わ、私は一人で大丈夫ですよ！」

そう答える未来先生に言葉を俺は乗せる。

「女の人が一人じゃ危ないですよ」

俺が未来先生と話していると、美智子が話しに入ってきた。

「わたしにもしくなのー！ 未来も悠さんもいっしょに帰ろおよお」

俺は少し頭を回転させた後、はい、と答えた。

「これで一緒に帰るしなくなっちゃいましたね」

俺は苦笑いしながら、未来先生に顔を向けた。

#05 一緒に帰るしなくなっちゃいましたね（後書き）

ネット小説ランキング様に参加させていただきました。

もし、よろしければ投票してあげてください。（PCのみ）

より多くの人に見てもらいたいので、どうかよろしくおねがいします。

他にお勧めのランキングサイトがあれば、教えていただけたら嬉しいなっ…なんて（、、；A

#06 友人と思っていたのですけどね

「ゆうさーんは、かのじょとかいないんですかああ？」

帰るタクシーの中、俺は隣に座る美智子に絡まれていた。

「い、いませんよ！ 彼女とか、作った経験ないですし！」

「うそはよくないですよ！ ゆうさんほどかつこよかつたら、ぜつつつたあああいもてもてなんだからああ！」

駄目だ。この人はもう何を言っているか分からない。

美智子を挟んで向こう側に座っている未来先生さえも苦笑している。

「いつもこんな感じなんですか？」

俺は苦笑いをしながら未来先生に質問する。

「ええ、この子お酒に弱いのにドンドン飲むですよ」

と笑いながら言ってくれた。しかも、今日初めて俺の顔を見て話してくれた。

「あ、そうなんですかあ……」

面食らってしまった。ゲーム対象にこんな事を言うのは駄目なのかもしれない。だけど、俺の心は不覚にも思ってしまった。

その笑顔、とてつもなく可愛いと。

そのせいか、そうですね、の続きの言葉が見つからない。

「え、えつと？」

俺がずっと未来先生のほうを見ながら、口をパクパクしていたからなのだろうか。先生は少し笑みを浮かべながら俺に言葉を投げかけてきた。

「あ、い、いや、なんでもないですよ。そ、それにしても、今日は楽しかったですね」

俺は未来先生から目を逸らす。

「…はい」

この話題には触れてはいけなかったのだろうか。先生の返事に少し間があった。

「あ、その…未来さんは龍之介と一緒にだったから、楽しくなかったですね…」

俺が落ち込むように言うと、先生は慌てて訂正の言葉をかけた。

「え！？ あ、そういうことじゃなくて…た、楽しかったですよ？」

焦って言っている彼女の言葉を、今は誰が信じるだろうか。俺に不快な思いをさせないようにと、必死になっている未来先生が面白く見えた。

「くく…」

思わず笑みがこぼれてしまった。

「わ、笑わなくても！」

「す、すみません…。未来さんって最初見たときは、ちょっと怖い人になって思ったんですよ」

「人当たりがよくないってよく言われます…」

「けど、しっかりした人だなんて思いました」

俺はニコツと笑って、言葉を投げかけた。

「…へ？」

未来先生は、思っても見なかった言葉に、どう反応していいのか迷っているようだ。

「普通なら、生徒が居てもその場の雰囲気で流されてしまうと思うのですよ。だけど、未来さんは自分の言葉を守ろうと、お友達とも喧嘩していた。…そんなところが、素晴らしい人だなんて思って」

うわ、少し恥ずかしいことを言ってしまった…。

俺は頭をぼりぼりと掻く仕草をする。

「あ、ありがとうございます…」

暗くて未来先生の顔ははっきり見えないが、多分赤くしているのだろ。縮こまって下を向いてしまっている。

そんな話をしているうちに、美智子の家の前までやってきた。

「未来さんの家は、ここから近いんですか？」

タクシーを降りる少し前、俺は未来先生に質問をした。

「ええ、ここからなら歩いて数十分です」

「じゃあ、美智子さんの家からは歩いて帰りますか。酔い覚ましにでも」

俺は笑いながらそう言うと、未来先生は少し悩んだ後、そうですね。と肯定の返事をくれた。

ここまでの金額を俺は払った。未来先生は遠慮をしてお金を出そうとしていたが、そこは俺がなんとか言いくるめて、男らしさをアピール。

「ほら、美智子！ 家着いたわよ」

「ん……」

俺達が相手にしなかったせいなのか、美智子は熟睡していた。

「起きる気配、全くないですね……」

さて、どうしようか。やっぱりこは、男として運んであげるべきなのだろう。

「俺が運びますよ」

そう言つて、美智子に背中を向け、腕を取り、そして背負う。その行動をすばやく行つた。

「す、すみません…」

その言葉を漏らしたのは美智子ではない。未来先生だ。

「いえいえ、どうして謝るんですか」

「だって、私の友達だし…」

俺達はエレベータの前までやってきた。

美智子の家は、普通のマンション。未来先生に聞くとところによると、4階らしい。

エレベータが俺達の前までやってきて、ドアが開く。俺達は足を進め乗り込んだ。

「よいしょ」

俺はおっさんくさい声をあげて、美智子を背負いなおす。さっきから、女の人特有のものがあたっているが、俺は心の中で気にしない、気にしないとつぶやいていた。

ブーンと音を鳴らし、エレベータは上昇していく。その途中、俺と未来先生は喋ることはなかった。

エレベータが甲高い音を鳴らし、その場に停止した。ドアが開くと、未来先生がさきに歩き出す。

俺はそれについていく感じ。

少し歩くと未来先生は、とあるドアの前でピタッと止まり、美智子の名前を呼んだ。

「ん……」

起きているのか、起きていないのかは分からないが、美智子は小さな声で返事をした。

「ほら、美智子。鍵出して鍵」

美智子はその言葉には無反応。どうやら起きていないようだ。紛らわしい人だな、全く。

未来先生はため息をつき、美智子の鞆を漁って部屋の鍵を探し出した。

先生はその鍵を使って扉を開き、俺を招き入れた。

俺は靴を脱いで、部屋に上がりこむと、美智子をベッドへと寝かしに向かった。

「ゆーくーん！」

寝ていると思っていた彼女に俺はぐつと引つ張られ、美智子に覆いかぶさるような形になってベッドへと倒れた。

「ちょ、何やっているんですか！」

俺は少し声を張り上げて、その場から逃げ出す。しかし、俺が声を張り上げた言葉は、「うわぁ！」だったのだ。

つまり、何やっているといったのは俺ではなくて、俺の後ろに突っ立っている…未来先生だった。

「い、いや！ 違います！ ただ、俺は引つ張られて、バランスを崩してですね…」

あの状況を、瞬間的に見た人なら、誰もが俺が美智子を襲っているように見えるだろう。

俺は振り返って、未来先生のほうを向く。

「……」

「……」

「…ぷっ」

最初に笑ったのは未来先生だった。

「本当ですよ!？」

「分かっていますって。悠さんがそんな人じゃないって事ぐらい、今日の会話で分かりましたから」

今日、初めて俺の名前を呼んだ未来先生。何故だか…俺の心はどこかで喜んでいた。

恋とか、愛とか、そういうのではなく、彼女との距離をゲームとして縮められたことを。

俺は一足先に部屋の外を出て、未来先生を待った。

数分後、未来先生は部屋の鍵を持って外に出てきた。そして、部屋の鍵をガチャッと閉め、ポストへと鍵を放り込む。

「そんな物騒なこととして大丈夫ですか？」

ポストに入っている鍵に気付かず、部屋を出たらどうするつもりなのだろうか。

「大丈夫、部屋の上にメモ書きを残してきたから」

俺の心の言葉を察知したかのように、未来先生は笑って言った。

それから数分間、今日のことを少し話して、未来先生の家に向かう。

「そういえば、俺が美智子さんを運ぶときに、先生は俺に謝りましたよね。私の友達だから…って」

俺は何の前振りもなく、その話を振った。

「は、はあ」

「俺は… もう未来さん達のことを友人と思っていたのですけどね」

俺は悲しそうな顔を無意識に作ってそう言っていた。

そう… 無意識に。

「そうですね」

未来先生は笑ってそう言ってくれた。

#07 イケメンが台無しやで

俺は今まで一人で生きてきた。

友達という友達も出来ず、地位と名誉のことだけを考えると言わんばかりの、勉強の量を毎日こなす。

中学校のころまでは、トップの成績をとっていた。

周りの男子からは、勉強のサイボーグなどといわれてきた。

女からはカッコイイといわれ、毎日知らない女からは話かけられていたものだ。

うざったい。

近寄ってくるな。

話しかけるな。

関わるんじゃない!!

うぜえんだよ!!!

ガバッ!!

俺は、ベッドから飛び起きた。

「い、嫌な夢を見た」

昔は一人で生きてきた俺に、今は龍之介という親友が出来た。

龍之介を一番に考えて行動をしたい。ホモとかそういうのではないぞ。ただ、素晴らしい友人に出会えたなって心のそこから思っているのだ。

そして、昨日。

俺は恭平さんに会った。

そして、あまり好きじゃなかった合コンに無理やり参加させられた。けど、昨日の楽しかった温もり、人間関係を味わってしまった。

「…何考えてんだよ、俺って」

俺はベッドから降りて、制服へと手を伸ばす。

「お坊ちゃん」

トントンという音と共に、ドアの向こうから聞こえてきたのは、キヨ爺の声だった。

「開いているぞ」

俺がそういうと、ドアの開く音が聞こえる。

「今日は、早いお目覚めですね」

キヨ爺が俺のほうに近づいてきて、そう言った。

「嫌な夢でも見たから…かな」

俺は苦笑いを作りながら、制服を着替え終えた。

キヨ爺と少し話をして、階段を下りていく。

いつものように、髪の毛をボサボサにセッティングして、眼鏡をかける。

鏡を見ると、昨日の俺は消え去っていた。

今の俺は、紺野 大将だ。

「よしっ！」

気合を入れて、俺は振り返る。リビングへと足を進めた。

ドアを開けて、靴を取りに行く。そのとき、一瞬だけと親父と目が合った。

何か言われる。直感的に、そう感じた。

「大将」

ほら、来た。

「お前、昨日の夜は何処に行っていたんだ？」

「友達と遊びに…」

「遊んでいる暇があるとは、よっぽど余裕なんだな」

言い終わった後に、鼻で笑う親父。その姿を、俺の母親は見ても見ぬ振りをしている。

何もいわず、俺はリビングを出て、玄関へと向かった。

外の世界へと旅立つ。ギュッと少し大きいドアを押し開けて、学校へと向かった。

「龍之介え」

俺は今、机の上に上半身だけぐったりと寝かしていた。

「何？」

龍之介は後ろを向きながらも、本をずっと読んでいる。

「恭平さんに悪いことしたかな？」

昨日のことを、結局俺は恭平さんに話していない。何故俺が『堂本悠』と名乗ったのか。

「別に」

「そうかなあ…。また機会あったら、謝っておいてくれない？」

少しだけ顔を上げ、俺は龍之介の顔を見た。

「今日」

「ん？」

本をバンと閉じ、俺の顔をじっと見てきた。

「な、何？」

俺は小さく笑う共に、質問をする。

「今日、会う」

…それは、恭平さんと会うつていうことなのか？

俺が悩んでいると、龍之介は再び口を開いた。

「暇？」

一応、ヒマの『マ』の字の部分の音が上がっていたから、質問ということなのだろう。

「昨日、サボった分を勉強しなきゃいけないんだよね」

「そう…」

いつもは無表情な龍之介の顔が少し寂しそうに見えるように見えた。

「い、いや！ やっぱり暇だ！」

龍之介はどっち？ と思うのかもしれないが、龍之介のあんな顔を見たら断るわけにはいかなかった。

最悪なタイミングでチャイムが鳴り、龍之介は前を向いてしまった。

次の休み時間は、その話をするのではなく、時間だけがすぎ、再び授業が始まる。

そして、次の休み時間もその話は出なかった。

質問したい気持ちを抑えて、龍之介の言葉を待ってみるが、一向に出てくる気配がない。

待ち続けて半日、結局放課後になってしまった。

「ついてきて」

一日の終わりを示す音がなると同時に、龍之介は椅子から立ち、俺に向かって言った。

「ほへ？」

あまりにも予想外の言葉。俺の口から出たものは、意味不明な言葉だった。

「……」

じいじいっと、俺の顔を見ている。

その視線に急かされるかのように、俺は急ピッチで帰る仕度を済ませた。

仕度を済ませると、龍之介は無言で歩き始めた。

どこへ向かっているのか。何をするのか。そのような話は一切しない。

それ以前に、俺達は帰り始めて数十分話しさえしていない。

「着いた」

龍之介の言葉に反応し、俺は足を止める。

「…小泉？」

俺の目の前にある家の門を見ると、小泉と記入されていた。

「りゅ、龍之介の家？」

俺が質問すると、コクンと頭をさげる龍之介。

新学校だから、ボンボンかいっぱい居ると思っていた。俺みたいな医者の子供とかが多いと。

だけど、これはスケールが違う。

この家は…違う。

「お父さんは…？」

俺は無意識で、龍之介に質問をしていた。

「政治家」

小泉って言う政治家をどこかで聞いた気がする。

龍之介が門の前に立つと、自動で大きな門が開いた。こんなの、テレビや漫画でしか見たことがない。

無言で歩き始める龍之介の後ろを、俺は小さくなりながら歩いた。

家の庭に居る執事みたいな人を呼んで、龍之介はなにか話しているようだ。

龍之介が言い終わったのか、執事は頭を少し下げ、その場から居なくなる。

「行こう」

俺がその光景に見とれていることに気付いたのか、龍之介は俺に声をかけた。

1分ほど歩いて、龍之介の家の玄関らしきものが見えてきた。

どれだけ豪華なんだよ。

ドアの横に立っている執事にドアを開けさせ、龍之介と俺は家の中

へと入っていった。

真正面にある階段を上る。

どうやらここでは靴を脱がなくてもいいようだ。

2階まで上がり、少し歩いたところで龍之介は立ち止まり、その近辺にあるドアを開けた。

「……」

ドアの中は…

「普通…」

なんと、普通だった。

豪華なベッドや、家具があると思ったのだが、いたって普通。俺の家とさほど変わりはない。

部屋に入ると、龍之介は適当に座ってと言葉を俺に告げた。

その数秒後、部屋のドアがガチャッと開き、俺の見覚えのある人が入ってきた。

「龍之介様、飲み物を持ってまいりました」

お盆を片手に、彼はドアを閉める。

そして、龍之介の部屋にあるテーブルにお盆を置いた。

「龍之介の友達なんか？」

さっきの敬語はどこへいったのだろうか。喋り方が関西弁に戻っていた。

そう、彼は…

「俺は大山 恭平って言っんや。龍之介の執事をやらしてもらってる。お友達は、なんていう名前なん？ 龍之介が友達連れてくるなんて珍しいからなあ」

どうやら、俺の変装に彼は気付いていないらしい。眼鏡と、髪の毛をいじっただけで、ここまで分からなくなるのだろうか？

「…紺野 大将です」

俺がぼそつと返事をする、恭平さんが笑い出した。

「あははは！ 龍之介の友達と同じ名前やか！ 大将っていう名前の人と、龍之介は仲がいいんやなあ」

俺も龍之介もあきれていた。

そんなことあるかい！ 関西弁でツツコミをしたかった。

だけど、俺はあえて冷静に対処する。

「…同一人物です。昨日の紺野大将と」

俺がそういうと、やっと理解したのか、恭平さんは笑うのをやめた。

「…へ？」

不意に俺に近づき、俺のボサボサな髪の毛をかきあげる。

「ホンマや…」

ビックリした表情を見せる恭平さん。

「ビックリや…」

「俺こそビックリしましたよ。まさか、恭平さんが龍之介の執事なんて」

入ってきたときは敬語だったのは多分、龍之介とタメ語を話しているところを、外から見られると彼の立場上好くないのだろう。

彼は驚いた表情を隠せないまま、口を今一度開いた。

「大将…イケメンが台無しやで…」

#08 俺、先生を騙すつもりだから

「恭平さん」

俺は、未だビクリしている恭平さんの顔をじつと見て、真面目に聞こえるように少し低めの声で彼の名前を呼んだ。

「な、なんや…？」

「昨日、俺が偽名使ったのは覚えていますか？」

俺の質問を聞いてから、少し間をあけて「覚えとる」と声を返してきた。

「実は、俺…最悪な男なんです」

俺のこの言葉で、恭平さんの驚きも収まったのだろう。彼もまた、真剣な顔で俺と向き合ってくれた。

「なんでや？」

「俺、先生を騙すつもりだから」

俺のこの言葉では、意味が分からなかったのだろう。待て待てと言いながら、俺の肩をギュツと握ってきた。

「状況を把握できない」

そう言うと、恭平さんは俺の肩を握った手を戻し、再び座りなおす。

「俺、学年末の成績が上位9位以内に入らないと、外国に飛ばされて医者の勉強をしなきゃいけないんです。あの頑固親父は、本当にそれを実行してしまうほどで…。そのためには、俺の苦手な科目を克服しなくちゃいけないですよ。普通の勉強じゃ、絶対に9位以内は無理なんです。近道…ゲームで例えると、裏技しかもう道は残っていないんです。せつかく、龍之介と友達になれたのに…外国になんか行きたくない」

「…話は分かる。やけど、今年度もまだ始まって一ヶ月半やないか。コツコツ勉強すれば、9位以内なんて無理な話やないやろ？ 大将を見る限り、頭悪そうに見えへんし、去年は29位ぐらいなんとちやうんか？」

29位…ずばりの中です。貴方はどれだけ、細かい数字を当ててくるのですか。

「…出来たら、こんなことしませんよ」

俺は苦笑いをしながら、恭平に言葉を投げ返す。

「それでも…」

恭平さんは複雑のようだ。果歩のお友達が、これから騙されようとしていること。大事なご主人様の龍之介の友達が、これから騙そうとしていること。

「すみません。昨日急に思いついたので」

俺は深々と頭を下げた。

「ちょ、頭なんか下げるなって！ 仮にも龍之介の友達や。そんなことしたら、使用人としての立場がなくなってしまうやんか」

優しく微笑みかけてくれる恭平に、少し甘えそうになった。俺の周りには、そういう笑顔をくれる人は、数少ないから…。

「…分かった」

恭平さんは俺の目をしっかりと見て、そういった。

「ありがとうございます」

「果歩ちゃんにはいわへん。やけど、大将もそんなことしたら未来ちゃんが傷つくって分かってるやろ。肝に銘じておくんやな」

「…はい」

俺がそう告げると、恭平はお盆だけを持って、立ち上がった。

「あまりここに長居すると、怒られてしまうからな。俺はおいたまするわ！ ほな、また！」

恭平さんは、左手をヒラヒラと振って、部屋から出て行った。

「とりあえず、恭平さんの口止めは出来た…かな？」

「…大将、勉強教えてあげる」

龍之介の素直な意思。少しでも、頑張っしてほしいと思う心。そんな

気持ちを受け止めながら、俺は龍之介のほうに顔を向けた。

「…ありがとう」

そういう俺の言葉は、少し震えていた。

「もう、こんな時間か」

時計を見ると、20時を回っていた。

俺の親は俺に無関心だから、どれだけ遅くなっても何も言われないのだ。直接言ってくれるのは、キヨ爺だけ。

昨日だって、俺は11時過ぎまで未来先生と一緒に居た。

未来先生を家まで送っていき、キヨ爺に向かいに来てほしいと連絡をいれた。

家に着いても親父等は「おかえり」とも何も言わない。車に乗っているときに、キヨ爺から軽い説教を受けたただけだ。

その説教が、俺にとってはどれだけ嬉しかったことか。

「教えてくれてありがとう」と俺は言って、龍之介の家を後にする。

龍之介は首を横に振りながら、いつでも教えるからと、言ってくれ

た。

涙がこぼれたかは分からない。俺は「さようなら」とだけ言って、龍之介に背を向けた。

「キヨ爺…」

龍之介宅から帰る車の中。俺は、運転席に座っているキヨ爺に話しかけた。

「何でございましょうか？」

…このことはキヨ爺にはいえない。

こんな計画を聞かせたら、悲しませることになるかもしれない。

「…いや、何もないよ」

俺は後部座席の窓から、かけた月を眺めていた。

今後の、計画を考えながら。

土曜日

とうとうこの日が来た。

今俺は、とあるマンションの近辺に居る。

電柱に隠れながら…など、ベタな事はしていない。

そのマンションの向かいにある、カフェで監視をしながら、ゆったりとしている最中だ。

「ねえ、お兄さん！」

…前言撤回。ゆったりとはしていない。

俺は、この女の声を見殺すことに決めた。

「どうしたの？ 何かあったの？ もしかして、彼女に振られたのか…？」

なんの許可もなく、俺にいきなり話しかけてきた女は、前の椅子に腰掛けた。

「…なんでしょうか？」

俺は冷たい声で、そう言い放った。

座られてしまったのだから、監視をし続けることは無理だろう。

「慰めてあげようと思って」

ニコッと笑う俺の前に座っている女は、どちらかというと可愛い部類に入と思う。

だけど、俺の好みじゃない。というか、女なんて大ッッ嫌いだ！！
「彼女に振られたわけでもないし、慰めてもらおうような事はひとつ
もありません」

俺がそういうと彼女は、あははと小さく声に出して笑った。

本当にうざりたい。

どこかにいってくれ。

「ねえ、遊ばない？」

彼女は笑うのがひと段落終わったのだろう。俺の顔を見てそういった。

「結構です」

俺は席を立つと、俺が監視していたマンションから、一人の女の人
が出てきた。

グットタイミング！！

俺は心の中でガッツポーズをし、その場から離れた。

「ちょ、ちょっと…」

女が何か言っているが気にしない。

「携帯、忘れているよ」

…ご丁寧に教えてくれたようだ。

俺は数歩戻って、女の前に行き「ありがとう」と呟いて、その場から今度こそ居なくなった。

俺が監視していた人物は、一人で道を歩いている。

買い物袋のような物を持っているところを見ると、スーパーにでも行くのか？

俺が監視している人物との距離は約30mといったところだろう。隠れたりはしていないが、これは立派なストーカーといえる行動ではないのだろうか。

「何やっているんだ俺は…」

少し情けなくなつて、俺は顔を空に向けた。

それから歩くこと数十分。俺は少し見覚えのある場所に来ていた。

…駅前のデパート。

土曜日ということもあって少し混雑している。

ドン！

俺は、入り口付近で成人男性とぶつかった。結構強めに。

「すみません…」

そして今一度監視人物のほうへと目を向ける…が、少し目を放した隙に、監視人物を見失ったようだ。

俺は周りをぐるぐると見渡す。

軽く走ったりして、ようやく見つけることが出来た。

焦らさないでくれ…諸戸未来。

#08 俺、先生を騙すつもりだから（後書き）

感想等いただけると、非常に作者は元気が出ます。
よろしくおねがいします。

#09 心臓に悪いです！

俺がストーカー紛いな事をしながら、付けていた人物とは未来先生だ。

これは全て計画のため。

とりあえず、少しでも偶然を装って運命とやらに結び付けなくてはいけない。女性は運命的な物に憧れるという。

俺はあの計画を思いついてから、本屋さんに行って『恋愛完全マスタ―』という本を買ったのだ。そこには、色々と恋愛について書き込まれている。女の人が惚れる仕草とか、ドキッとする言葉など、色々と書かれていた。

一通り全て読んでみた。分かったことといえば、女心は難しいということだけ。一応、それなりの内容は頭に入っているから、困りはしないけど。

前方に見える未来先生を俺は見つめていた。

どうしたら、偶然を装えるのだろうか。とりあえず、チャンスが来るまで、見つからないようにしなくては。

そして、俺は見つからないように距離をとりながら、未来先生の後ろを再びつけた。

最初は服屋、そのあとは化粧品売り場と、俺が居ては明らかに不自然なところばかり回っていた。

かれこれ1時間、未来先生の後ろをつけているが、あの様子だと全く俺に気付いてないみたい。

そろそろ仕掛けないと、未来先生が帰ってしまうかもしれない…。でも、無茶なタイミングで行ったら、かえって怪しまれるかもしれない。

俺があれこれ考えていると、彼女は食品売り場に入ってしまった。

これだ！ここなら、俺がいてもそんな不自然ではないし、色々と理由もつけられる。

俺はショッピング用のかごを取り、カップラーメンを3個ぶち込んだ。

「あれ、未来さん？」

冷静を装い、未来先生に近づき話しかけた。

「は、はい？」

ジーと俺の顔を見ている。もしかして、顔に何かついてるのか！？なんてベタな事を思ったけど、未来先生の様子だとそうじゃないらしい。しかも、そんなに見られると恥ずかしすぎて、目をそらしたくなるんですけど。

もしかして、未来さんの姉妹か、双子か？

俺は不安になりながらも、目の前にいる人に質問をした。

「未来…さんですよね？」

「…そうですけど」

どうやら未来先生らしい。

何なのだ。未来先生なら、俺を認識しているはず。なのに、なぜ何も話してくれないんだ？

そんな俺の疑問さえ、ふっ飛ばすような言葉が俺に降りかかってきた。

「…ど、どちらさまですか？」

…おいおい。ちょっと待ってくれ。今日はこの前と同じ服装で来ているし、間違えようがないだろう。それに、自惚れているわけではないが、容姿だけはそこの男には負けないものを持っていると思う。カッコイイ人という感じで、俺のことを覚えているのが普通なのだ。

…なのに、この女はなんだ。

一週間前に会った俺のことを「どちらさまですか？」で済ますのか？ モデル級の容姿を持っている俺に。こんな屈辱は初めてだ。

「ほ、ほら、堂本 悠ですよ。一週間前に、果歩さん達と一緒に遊んだじゃないですか」

プライドらしき物を傷つけられた俺は、苦笑いになりながら質問に

答える。

「…あ！」

すると未来先生は、今思い出したのか、手をポンと叩いた。俺って、彼女にとって一週間で忘れられるような存在なのだろうか。

「こんにちは。今日はどうしてここに？」

未来先生は、さっきより一歩近づいてニコツと微笑みをくれた。

「ちょっと食料の調達に」

俺はポリポリと頭をかいて、持っているかごを少し隠し、恥ずかしそうな様子を見せる。そうすることで、俺の持っているかごに何が入っているか気にさせるのだ。

そして、かごに入っているカップラーメンを見せることにより、俺の食生活を少し見せる。

『恋愛完全マスター』によると、女の人は栄養が偏っている食生活をしている親しい男の人には、料理をしたくなる傾向があるらしい。俺は数分前の会話で、未来先生は俺のことを親しいどころか、赤の他人だと思っているらしい。覚えてももらっていないなんて、本当にショックだった。

「そんなご飯ばかり食べているんですか？」

未来先生は、俺の誘導にどつぱりとつかり、俺のかごを見て心配し

たらしい。

心優しい未来先生には悪いが、俺は毎日家政婦に栄養満天のご飯を
食べさせてもらっている。

「そうなんですよ」

俺は、あはは…と軽く笑いながら、情けなさそうにした。

「…大変ですねえ」

「そ…！」

そ、それだけですか！　なんて叫びそうになったって。

「どうしました？」

俺の変な叫びに、彼女は疑問を抱いたのだろう。

「いえ、なんでも…」

そのあと、会話が続かない。こんなところで、つまずいてはいけな
いんだ。今度は未来先生の記憶に残るような人にならないと。

「み、未来先生は、この後は夕飯のお買い物ですか？」

俺の質問に、彼女は首をコクンと曲げる。

「お供しますよ」

何が、お供しますよ、だ。自分で言っただけ吐き気がした。

「は、はい」

未来先生も困っているみたいだし、もう最悪だし…。

俺は未来先生が持っているかごを持ってあげ、その中に俺のカップラーメン3つを放り込んだ。これはかごが二つあると不便という理由だからで、決しておごってもらおうなんて考えていない。そんなことをしたら嫌われてしまうからな。

「あ、ありがとうございます…」

俺の行動に、未来先生は顔を赤くしながらそういった。紳士を装い、俺は『いえいえ』と答えておく。

…少し、後悔した。

いや、大分後悔した。

「こ、こんなに食べるんですか？」

俺の質問に、未来先生は顔を再び真っ赤にする。

だって、俺が持っている食品の量は、半端じゃないのだ。今、俺の手にはかご二ついっぱいになった食品を抱えている。推定、20キロぐらいだろう。

「い、一週間分だから…」

それでも、この量は多すぎないか？ 女の人が一人で持てる量じゃない。

「そ、それに…悠さんが居てくれたから…」

だから、いつも以上に買ってしまったわけですね。まあ、これは頼られているということだし、さっきまでしていた悪い気も、その言葉でなくなった。

というわけで、俺は今堂々と未来先生の家へと向かっている。この量を未来先生一人に持たせて帰るというのは、男として最低な行動と思ったからだ。

「それにしても、今日は駅前のデパートに未来先生がいてビックリしましたよ。毎週通っているんですか？」

「ええ、土曜日に予定がない場合は大抵行きますね」

ちなみに未来先生は俺が持ちきれなかった商品を片手に歩いている。

「俺も結構行くんですよ。未来さんみたいな可愛い人がいたのに、気付けなかったとか少し人生を存した気分です」

なんて、臭いことを言ってみた。『恋愛完全マスター』によると、男のサラッと言うロマンチックな言葉に惹かれるらしい。引かれる…と読み間違えてない事を祈ろう。

その言葉に対して、未来先生はというと…

「へ？ 何か言いました？」

聞いていなかったらしい。

「い、いや…」

あんな臭いセリフを二度もいえるかって。

「本当ですかあ？」

未来先生はいきなり足を止めて、俺の目をじっと見つめてきた。

待て、これはまずい。こんな未来先生…

「か、可愛いな…って」

あ、声に出してしまった。

彼女は頭からボンツつと効果音が出そうなほど顔を赤くして、俺の腰をバシッと叩いてきた。

「いてっ！」

「じよ、冗談はやめてください！ 心臓に悪いです！」

そつぱを向いて先を歩く未来先生は、なんだか本当に可愛かった。

#09 心臓に悪いです！（後書き）

本当にシリアスなのか、よく分からなくなってきました。
…ですが、お付き合いいただけると嬉しいです。
よろしくおねがいします。

#10 俺は自惚れていた

「そうなんですよぉ！」

俺は今、未来先生の家が上がっている。

この前、未来先生を送りに行ったときは、マンションの前で解散だったため、部屋の中を見ることは出来なかった。

しかし、今回は荷物の件もあって、自然にターゲットの家にあがれたのだ。これは大きな一歩だと思ってもいいだろう。

「やっぱ綺麗にしているんですね……」

未来先生の家は、2LDKのようだ。布団やワークテーブルが見当たらない点から、俺が今居る部屋とは別のところにあるのだろう。

「あまり、ジロジロ見ないでくださいねえ」

「す、すみません」

ちなみに今、未来先生はお茶を入れるために、お湯を沸かしてくれている。それらの行動を見る限り、ある程度の時間はここに居られるらしい。

そういえば、あの本に異性を部屋に招き入れるということは、その異性に対して好感を持っているといえるだろう。なんて事が書いてあった気がする。

未来先生は、今日の一件でどこか少し抜けていることが分かった。多分、俺を家に入れたことさえ、好感どうこうの話ではなく、なんとなく流れて気で…的な感じだろう。この人に、あの本に書いてあることが通じるのか、とても不安になってきたぞ。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

未来先生は、今の季節に適した氷が入った冷たいお茶を運んで来てくれた。俺はお礼を言つとその場に座り、先生自身も少し離れたところで腰を下ろした。

「手伝ってもらつて、ありがとうございます」

「いえいえ、当たり前ですよ」

俺は照れながらもそう返事をした。御礼といわんばかりか、お菓子が大量に俺の前へと置かれた。

「召し上がってください」

未来先生はニコツと微笑む。俺は、ありがとうございますと言って、煎餅をひとつ手に取った。

袋を開け、俺はボリボリと音を立てながら食べる。ちょっと不謹慎かな、なんてこと思っただけど、未来先生もボリボリ食べているのだ。俺達は何も話すことなくテレビへと目を向けていた。

動物の私生活を見ながらも、クイズをするという番組を俺達は見入

っている。…あまりにも無言すぎて、いい雰囲気とかそういうのが全くないじゃないか。せっかく部屋に上がりこめたのに、これじゃあ猫に小判だ。意味があっているかは知らないが。さすが俺、現代文苦手なことだけはある。

「未来さん」

「はい？」

「未来さんは、普段休日は何をされているんですか？」

彼女は少し悩んだ表情を見せて、俺のほうを覗き込んできた。

「…興味あります？」

「ほえ？」

唐突すぎる質問に、思わず声が裏返ってしまったではないか。休日は何していますか、という質問に、興味あります？ と答えてきた女は初めてだ。

「いえ、その…」

「悠さんは何をしているんですか？」

おいおい、質問しているのはこっちだぞ。なんて思ったけど、ここでそんな事を言ったら、『なんて心の狭い人なの！』とか思われそうだからな。

「俺は散歩に出かけたり、友達と遊びに行ったりしていますね」

「私は、大抵家でのんびりしているか、果歩たちに誘われて服を買いに行ったりするだけですよ」

あはは、と笑いながら、やっと俺の質問に答えてくれた。

「果歩さんたちと、仲がいいんですね」

「果歩とは高校のときからの友人なんです。同じ部活に所属しています」

「仲のいいお友達を持つと、幸せですよ…」

俺のこの言葉は、心からこぼれた言葉だった。無意識だった。本当に…幸せだった。俺にも龍之介が居るから。

「はい」

未来先生は、俺の悲しそうな顔に気付いたのか、優しく答えてくれた。

それからテレビを見たり、お話をしたりしていた俺は、さすがに入り浸りすぎたようだ。外はもう茜色に染まっていた。

しかし、ここで終わらせてしまったら、豚に真珠だ。意味はあっているが知らないが。このネタ二回目なのに、全くうけていないのはどうということなのだろうか。

少しでも、仲を深めたい俺はある考えが思いついた。

「今日の…」

俺は意を決して、言葉を放つ。

「晩御飯は、何か予定でも？」

「…いえ」

これから俺に誘われると気付いたのだろう。少しだけ先生は下を向いた。

「どうですか？ 今日俺と一緒に晩ご飯でも」

爽やか笑顔で質問した後、少し無言が続く。こんな誘いをしたことない俺にとっては、その沈黙は耐えられなかった。

「駄目…ですか？」

俺のこの言葉で、完全に未来先生は下を向いてしまった。

「何で私なんですか？」

「…へ？」

またもや意味不明の質問が飛んできた。ご飯に誘っただけなのに「何で私なんですか？」と質問してくる。正直言う。彼女の言動は意味不明だ。

「何でって…」

それにしても、こういう場合はどうしたらいいのだろうか。経験のない俺にはさっぱりわからない。

「美智子とか、誘えばいいじゃないですか…」

「……」

「あ、すみません。そういうつもりじゃ…」

そういうつもりじゃないなら、どういうつもりだ。

この、俺の誘いを断るのか？

「すみません。無理に誘ってしまったみたいで」

「……」

何も返事をしない未来先生に、俺は苛立ちを感じた。もう、わけわかんねえ。

「また…今度行きましょうね」

怒りを表に出さないように、ニコツと笑うことが出来た、と思う。

「は…はい」

未来先生のその言葉を聞くと、俺はスツと立ち上がり玄関へと向かった。

外に出ると、生暖かい風が俺に吹きかけてきた。

心に響く。今まで、こんなことはなかった。

女なんて、俺の思い通りに。

そう、心のどこかで思っていたと思う。

俺は自惚れていた。

だけど、このままじゃ終われない。ここまでの苦労が水の泡だ。

茜色だった空が、暗闇の世界へと姿を変えたとき、俺は携帯を手に持った。

誰も人が通っていない道を歩きながら、俺は電話をかける。

「…お願いがあります」

こうするしかないと思った。

#11 心が動くとき

「…理由はよくわかった」

電話越しに聞こえてくる声は、恭平さんのものだ。

「迷惑ばかりかけてすみません…」

この対応を見る限り、恭平さんは俺の作戦に協力してくれるようだ。

「俺も、果歩ちゃんに会いたいしな…!」

そっちが狙いですか。

「果歩ちゃんとの仲を取り持ってくれるなら、考えてやってもいいけど?」

「へ? それはもちろん!」

あんなに意気投合している果歩と恭平さんを、これ以上どうやって仲を取り持つのか、聞きたいぐらいだが。ここは肯定の返事をしておいて、失敗ではなかっただろう。

「別に、お前に協力とかしてないんやでな」

もし俺がバレてしまい、この作戦に恭平さんが関わっていたということが分かってしまえば、果歩と恭平さんの関係は終わってしまうに違いない。

「ありがとうございます…」

俺は恭平さんの優しさに触れ、声が震えてしまった。

家に帰ると、未来先生から受けた傷のことを忘れるために、勉強に明け暮れた。ご飯はキヨ爺に持ってきてもらい、英語の教科書と参考書を眺めている。すると、携帯がピリリと鳴り出した。

「…ん？」

携帯を手にとった俺は目を疑った。

『明日、１７時に駅前集合。果歩ちゃんや、未来ちゃんも誘ったから、遅刻したら俺がパンチをくらわすでえ!!』

と書かれたメールがきたのだ。

…恭平さん、行動早すぎるでしょ。電話だって、１時間前ぐらいにしたばかりだ。

送信者リストを見ると、龍之介のアドレスも一緒に書かれていたのだ。龍之介もその行事に行くのだろう。

感謝と了解のメールを書いて送信し、俺は携帯を閉じた。

「明日か…」

今日、あんなことがあったから、明日未来先生に会うのは少し気まづい気がする。だけど、そんなことを言っている時間も残されていないのが事実だ。次のテストまで、あと数週間といったところだし。

俺は教科書を閉じて、机の中に閉まってある『恋愛完全マスター』を取り出し、ベッドの上で寝転びながら読み始めた。

「…女の子は押しに弱いと」

時には引くことも大事だが、押すことをしなければ引くことは無意味に終わる、ということらしい。

とりあえず、何を押すのだ？ 何を引くのだ？

俺はそのページの隅っこにある例に目を向けた。

「お前の事、好きだよ」

「君…？」

「次の日」

「お前の事、好きだよ」

「…そ、そうやってからかうの？」

「本気なんだ！」

「次の日」

「大好きなんだよ！」

「何回言つのよー!」

「お前が、俺のことを分かってくれるまでに決まっているだろ」

「もう…嫌なの」

「次の日」

「…」

「5日後」

「…な、なんで、最近かまってくれないの？」

「嫌って言われたから、見守るだけにしようかって。好きだからさ」

「もう、いいんだよ…」

「え？」

「私も、あなたのことが…!」

と、なるらしい。

とてつもなく長い『例』だったが気にしないでくれ。どうやらこ

ういうやり取りが「押し」「引く」というらしい。違う意味の、引くではないことを願おう。

「あああ！ 日本語って難しい…」

俺が少し大きい声を出したせいか、キヨ爺が慌てて部屋に入ってきた。

「どうしました!？」

「え、いや…なんでもないよ」

俺は右手に持っている本を、キヨ爺にはれないようにベッドの中に隠した。正直、こんな本を読んでいるなんて、キヨ爺には知られたくない。

「そうでありましたか。ノックも無しに、部屋に入って申し訳ございません」

キヨ爺はお辞儀を俺にして、ドアへと手を回した。

「キヨ爺…」

俺は無意識にキヨ爺を呼び止めていた。

「はい、どうなされました？」

「…キヨ爺は、恋をしたことある?」

いきなりの俺の質問に、キヨ爺は目を丸くした。まあ、そういう反

応するだろうな。今までの俺を見てきた人なら。

「そりゃ、私もこれだけ年を取っていますと、恋をしたことはありませんが…」

「難しいものなのかな？」

「難しいというより、心の問題ですからね。自分に素直になれるかなれないかの違いだと思いますよ」

キヨ爺は俺に笑みを向けた。どうやら、キヨ爺は俺が誰かに恋していると勘違いしているようだ。

「…恋をするときって、どんなとき？」

「心が動くとき…ですかねえ」

「心が動くとき…」

俺はキヨ爺が発した言葉を、口に出して繰り返した。

心が動くときとは、どのような感じなのだろうか。俺は、今まで恋をしたことはないし、しようとも思ったことがない。

「俺には、まだ早そうだな」

笑いながらさういうと、キヨ爺は優しい声で、そんなことありませんよ。と、優しい笑みをくれた。

「恋は、突如やってくるものです。気付いたときには、もう心は動

かされているものですよ」

それから数十分、キヨ爺の昔話を聞かされたが、あまり覚えていない。

ベッドの中に、本を隠したまま俺は目を閉じて、夢の世界へと旅立った。

「ふぁ・・・！」

俺は朝の光を向かえるために、カーテンをガラツと開いた。

時計を見る限り、今の時間は朝の9時。遅くもなく、早くもない時間帯だ。

予定としては、15時まで勉強をして、それから身なりを整え、駅前の集合場所へと向かうつもりだ。

このまま、先生との恋愛ゲームに力を入れすぎて、他の科目がグダグダになってしまったら、元もこうもないからね。

俺は机に向かい、参考書を開いた。

「4x...」

ボソボソと公式を呟きながら、シャープペンシルを持っていると、携帯からすさまじい音量で音楽が流れ始めた。

「もう15時か」

俺は鳴っている携帯を止め、ポケットに入れた。そのまま、洗面所へと向かう。学校へと行く髪型、服装ではなく、世間一般でカッコイイと言われるような容姿作りをした。この前は、何がなんだか分からず出かけたため、特にカッコ良くしたつもりはなかったのだが、今回は話が別なのだ。最初からターゲットに会うために、恋に落とすために出かける。それなりの身なりは必要なのだ。

じつくり時間をかけ、30分程度で済まし、荷物の確認、そして軽く体臭を消すためにあると思われるスプレーを体にかけて。まあ、実際のところ、臭いといわれたことなんて記憶にないけど。

準備が終わると、キヨ爺に一言かけて家を出た。

「お待たせっ!!」

俺が駅前に着いたときには、恭平さん以外全員がいた。つまり、女3人と龍之介。…一人で心細かったろうな。

「遅いですよお!」

一番に話しかけてきたのは、意外にも美智子だった。どこか大人しそうなイメージがあったために、少しビックリしてしまう。

それよりも、今日は未来先生がこの前の合コンのときの雰囲気になっっているのだ。機嫌が悪いというか、なんというか。俺と二人でいたときは、そんなことなかったのに。

「未来さん？」

俺が話しかけると、未来先生はビクツと動いて一歩引いた。

「は、はい？」

顔を引きつらせながら返事をする彼女を見ると、どうやらこの前の事を気にしているようだ。そりゃもう、腹が煮え返るほどムカつきはしたが。

「…元気無いようですけど、どうしたんですか？」

「緊張しているのよぉ！」

俺の言葉に反応したのは、未来先生ではなかった。

「果歩！ 果歩が龍之介君は来ないから安心してって言ったから来たのに！」

「ごめん、ごめん！」

軽く悪いながら未来先生に謝っている果歩は謝る気はなさそうだ。未来先生は頬を軽く膨らましている。

それよりも、俺の読みは間違えていたようだ。未来先生はこの前のことなんか気にしていないみたい。

俺がそんな事を考えていると、未来先生は俺の顔をじっと見てきた。

「な、何ですか？」

俺が引きつる顔を抑えながら、未来先生に聞いてみると小さい声で「その…この前は、本当にごめんなさい…」と謝ってきた。

前言撤回。やっぱり気にしていたみたいだ。本当に、この人はよく分らない。もう少し…知ってみたいな。

そんな事を思いながら、俺は「今度は嫌がらないでくださいね」と意地悪っぽく言っちゃった。

#11 心が動くとき（後書き）

本当にシリアスなのか？ と問われたら、100%そうですと言
い切れません。申し訳ないです。

しかし、楽しんでもらえるように、作者は頑張って執筆したいと思
うので、どうかよろしくおねがいします。

#12 付き合っちゃいます？

結局、全員が揃ったのは17時10分だった。

そう、恭平さんが遅刻してきたのだ。龍之介と同じ家から出発しているはずなのに、あの人だけ遅刻するとはどういうことなのか知りたい。

「ほんまごめんって！」

両手を合わせて必死に謝る恭平さんを見ると、なんだか執事の面影が見られない。本当にあの時龍之介の家にはいた人なのだろうか、と疑問に思ってしまうほどに。

「恭平君！ 今度から遅れてくるときは連絡をいれること！ 分かった！？」

果歩は怒り気味な声で、恭平に言い放った。

「ほんまごめん」

真剣に謝る恭平を見てなのか、どうなのかは分からないが、果歩は小さな声で「けど、何事もなくよかった…」と呟いた。

「え？ 心配してくれたん！？ めっちゃ嬉しいんやけど！ 遅刻もしてみるもんやなあ」

えへへと嬉しそうに笑いながら、恭平さんは頭を掻いていた。

「べ、別に！ 恭平君のことなんて言っていないじゃん！ 馬鹿っ！」
そつばを向いて一人先頭を歩く果歩の隣に、恭平さんはぴったりとついた。

そういえば、こんな光景を本の中で見た気がするぞ。えっと、なんだっけ。ツンドロ？ ツン…でれ？

そうだ。ツンデレだ。

男は、ツンデレに弱い人が多いと聞いたが、恭平さんもその一人のようだ。

「仲がいいですね…」

いつの間にか俺の隣に居た美智子が言った。

「そうですねえ…」

「私も…ラブラブしたいなあ」

あれをラブラブというのだろうか？ なんて疑問を持ったが、そこは特に気にしない。

「彼氏さんとラブラブすればいいじゃないですか」

「あれ、言っていないませんでしたっけ？ 私も今フリーなんですよお」

そんな満面の笑みで言うことじゃないと思っただけだなあ…。

「…確か、悠さんもフリーでしたよね？」

「そうですねえ」

まあ、狙っている人ならいるけどね。

「じゃあ、その…付き合っちゃいます？」

…は？

この女は、今なんと言った？ 付き合う？ 待て待て、俺が狙っているのは、未来先生であって、美智子じゃないんだけど。

「……」

あまりにも予想外の言葉すぎて、返す言葉も見つからない。

「じよ、『冗談ですよお！』」

「で、ですよね！？」

あはは、と笑いながら誤魔化すも、あの言い方は結構本気だったのだろう。とりあえず、告白されることだけは免れなければ。

美智子に告白されても、俺の答えはNOなのだ。つまり、振るって事。そうなれば、美智子の友人である未来先生とも会いにくい。遊べる確率が減るのは勘弁だからな。

とりあえず、近づかなければOKだ。

俺はちょっと歩くペースを落として、龍之介の隣についた。

「…元気？」

美智子から逃れるためにここに来たため、話す内容が全く思い浮かばない。

「元気」

龍之介も即答しているし！

「その…これから何処に行くんだろっなあ」

「分からない」

17時という中途半端な集合時間にした理由は、これからこの前同様カラオケに行くか、飲みに行くかの二択だろう。

高校生でもあるまいし、ゲームセンターなんかに行くわけ…

「よっしゃ！ 飯の前にゲームセンターで汗流していくで！」

…あるみたいだ。

「おー！ ゲームセンターとか久しぶり！」

果歩もノリノリだし…。

そして、俺達はゲームセンターに着き、初めに、UFOキャッチャーがある場所へと皆で足を運んだ。

「かわいい…」

俺のそばで、未来先生の物欲しそうな小さな声がした。

未来先生の目線を追ってみると、なんだかリラックスしそうなクマの人形がそこにあった。どうやら、この人形がほしいらしい。

…ベタだけど挑戦してみるか。

「おい、悠、置いてくでえ！」

「あ、先に行っていてください！」

そういうと、みんなは奥に歩いていった。このゲームセンターは街の中で一番大きいゲームセンターらしい。まあ、滅多なことがない限り、俺のこの恥ずかしい挑戦に気付きはしないだろう。

そして俺はお金をUFOキャッチャーに200円を入れた。

「悠、今どこやねん？」

挑戦すること10分。恭平さんから電話がかかってきた。

「あ、すみません。道に迷っちゃいました」

まあ、こんな所で道に迷うわけがないが。この変な人形を手に入れるために1000円以上使ってしまったただけなのだ。

「今、プリクラのそこにおるから、あと1分以内に来いよ」

恭平さんはそれだけ言うと、携帯をブチツと切った。まあ、今日のセッティングは恭平さんがしてくれたんだから、これ以上迷惑をかけるわけにはいかないよな。

俺はそう思い、携帯をポケットにしまって、プリクラ機のある場所へと小走りした。

「悠！ 遅いッちゅうねん！」

「す、すみません！」

気持ち焦りすぎたのか、なんと道に迷ってしまった。道に迷うわけがない、とか言っていた自分が恥ずかしい。

結局5分ほどかけて、目的地につけた。

「ほらほら、皆待つてるから、早くこいや」

「は、はあ……」

俺はため息のような返事をして、皆が待つ場所へと歩み寄った。

まあ、当然のごとく、女子からは罵声のようなものを浴びせられた。

「ちょ、俺も撮るんですか!？」

会話の流れで、今からプリクラを撮るという話になった。というか、俺が来る前から撮るつもりだったらしい。ただの分かりやすい集合場所ではなかったようだ。

「けど…」

「うっさいなあ。遅れて来たんやから、口答えなんかすんな!」

「恭平が言っな!」

そういうのは、果歩。いつの間にか呼び捨てで読んでいるようだ。

「まあ、悠君恥ずかしがらずにおいで」

果歩の言葉に、俺は何も出来ず、ただ肯定の返事をした。

ここで断ってしまったら、ただの空気が読めない遅刻の男だ。とりあえず、俺はプリクラ機に入った。

6人という数は少し多かったのか、少し窮屈に感じる…。

俺は軽く微笑み、人生初のプリクラを撮った。

今、プリクラ機の傍にある落書きコーナーのような場所で、美智子と果歩はプリクラを加工していた。この作業は男子達には任せられ

ないようだ。

美智子と果歩の後ろで、軽く微笑みながらその作業を見ている未来先生の肩をちょんちょんと叩いた。

未来先生は頭にはてなを浮かべながら、俺の顔をじっと見てくる。

「な、何でしょう？」

「これ、プレゼントしますよ」

俺はさつき10分かけて取ったクマの人形を未来先生の前へと突き出す。

「…へ？」

その人形をみた瞬間、未来先生は驚きでいっぱい顔で俺の目を見してきた。

「い、いいです！」

そう言つて、未来先生は人形を俺に押し戻してきた。

「貰ってもらえませんか？俺がこんな可愛い人形を持っていたら、笑われるでしょう？」

俺はニツコリ笑つて、もう一度人形を未来先生に突き出す。

「…あ、ありがとうございます」

俺から人形を受け取ると、ニツコリと笑いながら。人形をもふもふと触っている。

女の方は、さり気ないプレゼントに弱い。って、本に書いてあったが、それは本当のようだ。

「大事にしてくださいね」

俺が未来先生の持っている人形をつつつきながらそういうと、彼女は大きくうなずいた。

#12 付き合っちゃいます？（後書き）

感想等いただいたら、とても嬉しいです。

#13 ……それ、本当なの？

「未来、その人形可愛いねえ」

プリクラをみんなに配っている美智子は、未来先生の持っている、俺があげた人形に気付いたようだ。どうして、女ってもんはあんなに人形が好きなのだろうか。

「え、えつと……」

返答に困っている未来先生はあたふたしている。『こんな可愛い人形を持っていたら、笑われるでしょう？』と言った俺に気を使ってくれているみたいだ。本当に優しいんだから。

「つ、次はなにをするの？」

話をそらすために、未来先生が果歩に話をふった。美智子はその姿を睨み付けるように見ている。

……睨み付けるように？

「み、美智子さん」

俺が話しかけると、美智子はうつむいてしまった。

「……大丈夫ですか？」

何故、俺は話しかけたのだろう。

「わた…に…ぎょ…と…て」

「はい？」

何故、俺は名前を呼んでしまったのだろう。

「私にも人形をとって…」

「み、ちこ…さん？」

…何故、俺はこんなことに気付かなかったのだろう。

「ご、ごめんなさい…お手洗いで行ってきます」

彼女の声は、泣いているかのように震えていた。

「美智子！」

小走りでトイレのあるほうへ行った美智子を、未来先生と果歩は走って追いかけていった。

「悠、なにしたんや？」

状況が飲み込めていないのか、不思議そうな声で俺のそばによってきた恭平さん。

「さ、さあ？」

俺は分からない振りをして、恭平さんと話を始めた。龍之介は、俺の隣でずっと俺の顔を覗いている。気付いているのだろう。俺が、

美智子に酷いことをしたということ。

彼女の気持ちに気付きながらも、彼女の前で未来先生に人形をあげてしまった。『嫉妬心』という言葉が、恋愛完全マスターに書いてあった気がする。好きな人が、自分以外の異性と仲良くしているのを見ると、生まれる感情らしい。

どうやら、美智子はその感情を抱いてしまったようだ。未来先生に對して。

…待てよ。

昨日、未来先生が俺の誘いを断つたのも、美智子に悪いという気持ちがあったからではないのか？ 未来先生は美智子の気持ちを知っていたのではないのか？

…最悪だ。少し考えれば、この状況を逃れられたではないか。

美智子が居ないところで人形をあげれば。

美智子にもっと冷たく当たっておけば。

…それにしても、俺は人間のクズなのかもしれない。

俺は美智子に、悪いという気持ちを一切抱いていない。むしろ、未来先生に会いにくくなるのではないか、という考えばかり、頭に浮かんでくる。

「大将」

色々考えている俺の思考を止めたのは、龍之介の声だった。

「戻ってくる」

龍之介はそういうと、少し離れた場所に居る未来先生たちをチラッと見た。

…美智子も居る。

「今日は、お開きでもいいかな？」

果歩は、戻ってくると同時に、俺達にそう言い放った。少し冷たい声で。

「ああ」

状況が把握できていない恭平さんも、この空気に気付いたのか、即答をした。

果歩は俺に近づいてくると、耳元で小さく一言つぶやいた。

この後、駅前の公園で待っているから。

俺は、驚きのあまり果歩に視線をむけた。しかし、彼女はすでに恭平の元へと行っていた。

…どうして、こんなことに。

俺の計画は、徐々に歯車が狂い始めている。

「…やっほ、悠君」

俺が公園へ行くと、果歩は一人で待っていた。この公園は、市内でも結構広いと有名な公園だ。中央には池があったりもする。

「他の人はどうしたんですか？」

「美智子は、未来が送って行っただよ」

そついうと、果歩は歩き始めた。

さて、どうしようものか。ここに呼ばれた理由はなんとなく分かっている。このタイミングは、美智子のこと以外ありえないだろう。困ったものだ。

無言で歩いていた果歩は、ベンチの前に行くと足を止め、そこに腰を下ろした。俺はその隣へ座る。

「美智子のことなんだけど」

やっぱりか。

「美智子はね、悠君の事好きなのよ」

知っているよ。

「それで…悠君、未来に人形をあげていたでしょう？」

「はい」

「…私達ね、高校のときからの友達なのよ」

それがどうした？

「こんなこと言いたくないんだけどね、こんなくだらない事で、未来と美智子の友情関係を壊したくないの」

「…はい」

「ねえ、悠君。美智子のこと、どう思っている？」

果歩のその質問に、俺は口を閉じてしまった。美智子のことなんて今までそんなに考えたこともないし、未来先生のお友達と認識している程度だ。そりゃ、少しは話していて楽しいし、面白い。だからと言って、どう思っているといわれても困るわけだ。

ここで『未来さんのお友達』なんて答えてみる。俺が、未来先生狙ってことが、もろバレになっってしまう。そうなったら、余計2人の関係は崩れてしまうだろう。

…だから、どうした。俺にとって、2人の関係はどうでもいいことではないのか？ いや、待て。そんなことじゃ、さっきの二の舞だ。一般的に考えて、未来先生は俺に全く恋愛感情を抱いているようには見えない。そんな状況で、俺の印象を悪くしてみる。それこそ、俺の計画は完璧に狂ってしまう。

…もう、大分狂っているが。

「美智子さんは…優しい人だと…」

「そういうことを、聞いているんじゃないの」

俺の言葉を遮った果歩の顔を見ると、真剣そのものだ。そりゃそう
だ。友達が俺によって傷ついたのだから。

「好きか、どうか聞いているの」

…ストレートだな。そんな質問されても困るじゃないか。

俺が口を閉じていると、美智子はひとつ小さなため息をついて、再
び質問をしてきた。今度は、さっきと違う、もっと…俺が答えられ
ない質問を。

「じゃあ、質問をかえる。悠君…好きな人は居るの？」

「好きな…人？」

「そう」

「……」

このまま黙っていたら、いると言っているのと同じことになってしま
う。だからといって否定も出来ない。俺は未来先生を狙っている
のだから。ここで『いません』なんていつてしまえば、この状況的
に果歩は俺に、美智子のことを考えてほしいと言っだろう。

「い…る」

考えた挙句、俺が出した答えはこの言葉だった。

「…そう」

俺のその返答に、悲しそうな顔を見せた。

「その人とは、もう付き合っているの？」

「いえ、俺に彼女なんかできませんよ」

あはは、と軽く笑って誤魔化す。

「もしかして、未来が好きなの…？」

「え？」

ある意味、確信をつかれた俺の顔は、どんなふうになっているだろう。まさか、そんな質問が来るとは思ってもいなかった。予想外すぎて、頭の中が真っ白だ。

「…それ、本当なの？」

俺と果歩は驚きのあまり、目を見開いてしまった。それもそうだろう。俺達の目の前には、ここには居てはならない人がいたのだから。

「美智子っ！」

遠くのほうから、未来先生の声が聞こえた。

… 本当に最悪だ。

こんな状況ってありかよ。

俺と果歩の目の前には、涙がまだ止まっていない美智子の姿があった。

#14 まだ、諦めるには早い

「そうなの…？ 悠君」

なんという修羅場だよ、これ。こんな場面、ドラマでも漫画でも、
そうそう見られるものじゃない。

目の前には、俺のことを好きと言っている女。

その後ろには、俺の狙っている女。

俺の隣には、その二人の友人。

…本当に、どんな修羅場だよ。

「えっと…」

さて、どうする俺。正直、今はパニックになって頭の中が真っ白だ。
何も思いつかない。

「その…」

ここで違うとっていいのか？ 駄目なのか？

「どうなの？」

美智子の目は、しっかりと俺を捉えていた。

幸いなことに、未来先生は俺達の会話を聞いていなかった。だから、

未来先生は今、何がなんだか分かっていないだろう。

…まあ、その状況も時間の問題だが。

「美智子？」

未来先生は、不思議そうな声で美智子の名前を呼んだ。その言葉に、美智子は反応をしない。

「果歩…？」

美智子が答えなかったからか、未来先生の質問の先は俺の隣に座っている果歩に向けられた。

「えっと…その…」

どうやら、果歩も俺同様パニックに陥っているようだ。

「何の話をしているんですか？」

最後に、未来先生の言葉は俺に投げかけられた。とりあえず、返答をしておこう。

「……」

しかし、無理だった。今の俺に、何を答えろというのだ？ 未来さん狙っていたということがばれました、か？ 美智子さんをふってしまいました、か？

「えっと…」

俺が言葉につまらせていると、美智子のはっきりと口に出していった。

「今、悠君に未来の事が好きか。って、聞いているの」

「え？」

いきなりのもので、未来先生もビックリしているようだ。

「…未来が好きなんでしょ？」

美智子は言葉をとめない。

「そんなこと急に聞かれても…」

そう答えるしかなかった。『そう』とも『違う』とも答えられないのだから。

今まで以上の重苦しい空気が、周辺を漂った。その空気を消し去ったのは、未来先生の声だった。

「そんなわけないよ」

「え？」

突然の未来先生の言葉に、美智子も果歩もビックリした顔を見せる。

「…ですよね？」

「そ、そうです」

未来先生の圧倒的な雰囲気を押されて俺は答えてしまった。認めてしまった。

未来先生のことを好きじゃないということ。

「…本当なの？」

そう言ったのは果歩。

「…ああ」

そう答えるのが精一杯だった。敬語さえ使う余裕もない。

「…ほら、二人とも帰ろうよ」

未来先生の言葉で、果歩はベンチから立ち上がり、美智子は俺に背を向けて歩き出した。

俺は一人、公園のベンチに残されていた。寂しかった。何かが足りなかった。

「あゝ…」

誰にも聞かれない程度の声を漏らした。

「失敗したなあ…」

今ならよく考えられる。あの状況は100%、俺が未来先生を好き

だと言っているのも同じなのだろう。

そして、俺は未来先生に『好きじゃない』という言葉が無理やり迫られた。そうせざる終えなかった。

とりあえず、これだけはいえる。俺は振られた。未来先生にあつさり振られた。

涙が一粒、俺の目から零れ落ちた。これは、振られたことによってじゃない。失敗したからだ。だけど、心のどこかが痛んだ。

奥底の、どこかが。

無理やり足を立たせ、俺は自分の家へと帰ることが出来た。キヨ爺などに話しかけられるが、軽く返事をして俺は自分の部屋へと向かった。

「どうしようか…」

俺がベッドに倒れこむと、ドシツと音を立てて沈む。まさに俺の心のような。

「…転校」

最悪な展開が見えてきた。さようならしなくちゃいけないのかな。俺の唯一の親友である龍之介と、その執事である俺の悪事に付き合ってくれた恭平さんとも。

そして、未来先生とも。

「嫌だなあ……」

俺は、大きなため息をついた。ため息をつくと、幸せが逃げるとかいうけれど、今の俺には関係ない。幸せなど、持ち合わせていないのだから。

「お坊ちやま」

声に反応して、俺はドアに視線を向けた。どうやら、ドアの向こう側にキヨ爺がいるようだ。

「入ってもよろしいでしょうか？」

「いいよ」

俺は何も考えず、返答をする。今日一日、色々と考えすぎた。

「何かありましたか？」

キヨ爺は、心配してくれたのだろう。俺がいつもと違うから。ただ俺は何も答えられない。

「……まだ、諦めるには早いと思います」

「キヨ爺に、何が分かるの？」

確信を疲れた俺は、キヨ爺に冷たい言葉を返してしまった。

「いえ、何も分かりません。人は結局、全てを分かり合うことが出来ないのですから」

「……」

「だけど、これだけは言えます。お坊ちやま、諦めないでください」
その言葉に続きに、キヨ爺は『最近のお坊ちやまは楽しそうに見えました』といったのだ。

「楽しそう？」

「はい」

小さいときから俺を見てきたキヨ爺だ。俺が楽しそうに見えたのは本当なのだろう。よく考えてみると、この一週間は楽しかった。恭平さんとも出会ったし、未来先生とも出会った。果歩や、美智子とも。

楽しかったか？ と聞かれると、そりやもう、楽しかったのだろう。だけど、その楽しい時間も、もう終わりなのかもしれない。

「お坊ちやま」

「何？」

「携帯が、鳴っております」

机に置きっぱなしにしていた携帯が、チカチカと光りながら、ブー

ブーと振動音が鳴り響いていた。

未来先生かもしれない。

なぜか俺はそう思い、携帯の元へと近寄った。

携帯をあけ、通話ボタンを押す。

「もしもし…」

俺がそう言葉を発すると、キヨ爺は頭を一度下げ、部屋から静かに出て行った。

携帯から聞こえてくる声は、俺が今一番聞きたかった人の声だろう。

そう言っていると思う。

「未来さん…」

そして、俺が一番聞くことを恐れていた声でもあった。

言葉が矛盾しているが、これで正解なのだ。間違っているのではない。

「悠さん…私」

俺の心は、一瞬にして決まった。諦めないと。そして…

「未来さん、今から会えませんか？」

あの言葉をぶつけようと。俺の計画の最大なる場面を迎えようとし

て
い
た。

#15 だけど、ここは現実の世界

「え…?」

俺のいきなりの質問に、未来先生は戸惑っているようだっただ。

「未来さんの家の近くまで行くんで…」

ここは引いてはいけない。そう、本能が呟いていた。

「今から…じゃないと駄目ですか?」

「できれば、今がいいんです」

その言葉から数秒間未来先生は考えたのだろう。声が聞こえてこない。

「…わかりました」

悩んだ拳句、未来先生が出した答えは、YESだった。俺は小さく拳を握り締めて、ガッツポーズをとる。

「じゃあ、マンション前に着いたら連絡しますので」

俺はそういうと、携帯から耳を離し、通話を終了した。

これから俺は、今までに経験がないことをする。言っておくが、かなり不安だ。こんな気持ちは、そうそう味わえるものじゃない。

とりあえず、俺は服を整え、あるものに手を伸ばした。

『恋愛完全マスター』

最近はこの本に頼りっぱなしだ。多分、これから頼るのだろう。恋愛経験が無に等しい俺にとっては、この本が未来先生を攻略する本なのだ。

「えっと…」

俺は、指で文字を追いながら、ある文章に目を通した。

「未来さん…」

俺はあれから家を出て、キヨ爺に頼んで未来先生宅の近くまで乗せていってもらった。キヨ爺は人生経験からなのか、俺に対して一切質問をしてこなかった。

普通に考えて、俺がこんな時間に外出するなんて、今までになかったことだ。もう夜9時ごろなのだから、使用人としては心配してもいい時間なはずなのに。

「こんばんは」

そう声を出したのは、俺の目の前に立っている未来先生だった。格好は、今日の昼となんら変わっていない。

「こんな時間に、申し訳ございません」

「いえいえ」

何を伝えるかは考えてきた。しかし、それまでに何を話そうなど、考えていなかった。そこまで頭が回らなかったと言ったほうがいいだろう。

「えっと…」

そのせいで、言葉がつまってしまう。

「美智子は…今、私の家でゆっくりしています」

…美智子のが聞きかたかったわけではない。いや、少しは聞きかたかったが。

「すみません…」

俺は、なんだか申し訳ない気持ちになった。美智子に対してではなく、未来先生に対して。

「公園…行きますか」

そう提案したのは、未来先生のほうだった。俺は首を縦に振る。

「近くに、桜が綺麗に見える公園があるんですよ。今はもう夏なので、桜は咲いていませんが」

そう言つて、未来先生は笑みを浮かべる。

「桜…見たかったです」

「来年は…」

そこで言葉をとめてしまった未来先生。来年は一緒に居れるかわからない、という意味だろう。

そのまま、俺達二人の会話は途切れた。ただ、公園に向かって歩くだけ。

これから、俺の伝える言葉をどう受け取るのだろうか。

そんなことを考えながら、俺は未来先生の後姿を眺めていた。

「…夜風が涼しいですね」

公園内にあるベンチの前まで行くと、未来先生は腰を下ろした。俺はその隣に座ることが出来ず、未来先生の前方で立つたままにいる。

「座らないんですか？」

「…じゃあ、遠慮せず」

俺はゆっくりと近づいていき、隣に腰掛けた。

しかし、俺も未来先生も口を開こうとはせず、沈黙の時間が流れた。何か話さなくては、何か…。

「学校は、楽しいですか？」

何を聞いているんだ、俺は。そんなことを聞いても、何も面白くないだろう。

「生徒達が、とっても可愛いです」

「未来さんはきっと、いい先生なんだろうね」

俺は、意味も無く話を長引かせようと必死だ。いや、意味はある。この心臓の高鳴りが、さつきから全く収まらないのだ。

「いえ、そんなことは・・・」

何故俺は…

こんなにも感情が高ぶっている？

こんなにも動悸が激しいのだ？

こんなにも緊張をしているのだろうか…？

「あの…」

俺が、言葉を発しようとしたときだった。未来先生が、少し大きめの声で話し始めた。

「美智子は、悠さんのことを好きって言っていました」

「……」

「なぜ、振ったんですか？　なぜ傷つけたんですか？」

振った？　俺が？　まだ、直接的に振ったわけではないだろう？
まあ、あの状況では、振ったと言っても間違いではなさそうだが。

「……」

言葉が出てこない。言い訳するために必要な、『それは…』の言葉が出てこない。それさえ言えば、あとは俺の口が勝手に動いてくれるのに。

「…好きだったんですよ？」

今、未来先生の顔は、人一倍悲しい顔をした。今までに見たことがない顔だっただけに、俺は驚いてしまった。自分が振られたわけでもないのに、今にも泣きそうな顔をしている。

「俺は…」

何も考えられなくなった俺の口は、ようやく動いてくれた。

「未来さんのことが…」

思い出せ。あの本に書いてあったことを。

『告白するときは、夜景の綺麗な場所がいい』

…おっけ。夜景はばっちりだ。

『告白文句は、ストレートで。手紙よりも電話、電話よりも直接言
ったほうが、気持ちが伝わりやすい』

告白。

俺は今ここで、人生初の告白をするのだ。

「未来さんのことが、好きなんです」

俺はベンチから立ちあがり、未来先生を見つめた。予想通り、未来先生は驚きを隠せない表情をしている。

言った！ よく言ったぞ俺！

「なんで…」

未来先生が言葉をぼろっとこぼした。

「私なの…？」

俺の言葉に、さっき俺に見せたあの悲しい表情を再び見せた。

どうして、そんな表情をする？ お前は今俺に告白されているんだぞ？

そして、未来先生の目からは涙がこぼれていた…。

「未来さんは、俺のことどう思っていますか？」

俺の真剣なまなざしに気付いたのか、未来先生は涙をこらえながら

答えてくれた。

「どう思っているって…」

考えたこともないのだから、答えられるわけがないのだろう。昨日まで俺の存在を忘れていたのだから。

「…嫌いですか？」

「嫌い…じゃ…」

そう言う未来先生の涙を俺の目はしっかりと捉えた。未来先生も俺の顔をその泣いている目でしっかりと捕らえている。

「本当のことを言うと、付き合いたいと思っています」

俺を見つめる先生の瞳に、飲み込まれるように俺は言葉を放った。ここが、俺の計画の中で最大の場面だろう。

ゲームでは失敗すれば、コンテニューが出来る。だけど、ここは現実の世界。

行くところまで行ってしまった。

もう、後戻りは出来ない。

「俺は貴方が大好きなんです」

俺は自然に腕が伸びて、涙が溢れこぼれている未来先生の体を包んだ。

「好きなんだ…」

気付けば、言葉が止まらなくなっていた。

#15 だけど、ここは現実の世界（後書き）

あとがきは、僕自身のblogに書いております。
よろしければ、のぞいてやってください。

HP <http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/>

（HOMEからもいけます）

そして、感想をください…。

#16 俺：好きだから！

未来先生を抱きしめて、もうどれくらい経っただろうか？ 10分？ いや、現実では1分も経っていないのだろう。

「悠…さん」

「あ、すみません！」

俺は未来先生から手を離し、少し離れた。

あの状況とはいえ、なんで未来先生にあんなことをしたんだ？ 無意識だった。気付けば未来先生を抱きしめていて、気付けばあの言葉を放っていた。

俺のこの行動で、二人の間は妙に嫌な雰囲気の流れている。

「その…すみません」

「い、いえ…」

未来先生も驚いているのだろう。ずっと俯いたままだった。

「未来さんは、俺のことを何とも思っていないことは知っています。だから、こんな事を言ってしまったって…」

「……」

黙りきっている未来先生の顔をチラッと一瞬見て、俺は未来先生に

背を向けた。

「昨日だって、一週間前に会った俺のことを、覚えてくれていましてしたもんね」

そうだ。俺は、未来先生の興味すら引かない男だったのだ。

「そ、それは！」

仕方がない。この際、未来先生は諦めるしかない…。そして、もう一度死に物狂いで勉強を試みよう。

…そう、考えたのに、この女ときたら。

「お、覚えてない振りをしたんですよ！」

…は？

「お、覚えて…え？　どういうこと」

少し待ってくれ、理解する時間をくれ。つまり、未来先生は昨日、俺と気付いてはいたが、ジョークのつもりで、あんな馬鹿な演技っぽいことをしていたというのか？

「す、すみません！」

「い、いえ…」

完全にペースを乱されている。何なのだ、この女は。

「何で、そんなことを？」

これが、正しい質問だろう。

「それは、美智子が悠さんの事を…」

好きだって言っただからか？ それでも、そんなことをする必要がないだろう。

「私だって、悠さんのこと…」

そこまで言っただけで、未来先生は自分で口を手で押さえた。

「え？ 俺の…こと？」

そ、その続きは！？ 何を言おうとした！？

俺は気持ちを抑えることが出来なかった。

「もしかして、俺のこと…」

まさか。まさか。まさか。

まさか…！

「好き…なんですか？」

こんなことを聞く奴は、この世で俺ぐらいなのだろう。だからと言って、俺のこの口も止まる様子を見せない。なんせ、100%無理だと思っていたゲームを、クリアできそうなのだから。

「ち、ちがいます…」

俺のその問いに、力なく答える未来先生。

もしかして、未来先生は美智子が俺のことを好きだと知っていて、自分は引いたというのか？

果歩の言っていた『未来と美智子の友情関係を壊したくないの』という言葉。もつと深い意味があったのか？ 果歩は、未来先生と美智子が俺を好きだということを知っていて、俺を二人から離そうとしたと考えても… つじつまが合う。

「悠さんのことなんかっ」

未来先生が喋っている途中。俺は、またも無意識に未来先生を抱きしめてしまった。

心が震えて、涙が出そうだった。

いや、待て。何故、涙が出そうになるんだ？ 心が震えているんだ？ もつと冷静になるんだ、俺！

「あ、すいませ…」

俺が未来先生をすつと離すと、未来先生は俯きながら、そつと俺の服を引っ張ってきた。

「未来さん…？」

「なんで…私なんですか」

顔は見えないが、泣いているのだろつ。声が震えている。

「なんで、美智子を選ばないんですか！」

「それは…」

言葉に詰まった。どうして、美智子じゃないかと聞かれたら、現代文の先生じゃないから。と答えるしかない。そんな事を答えるほど俺は馬鹿じゃないが、代わりの言葉が出てこないのも事実。

「ばか…」

未来先生は、我慢していた泣き声をいつきに放出したかのように泣き出した。

こういう場合はどうしたらいい？ 『恋愛完全マスター』にはなんと書いてあった？

…くそっ！ 大事なときに、なにひとつ出てこない。

異性が泣いている場合は、そつと胸を貸すと良い。
弱っている人には、効き目抜群。

これだ…！

「未来さん…」

未来先生が泣き止むまで俺は、しっかりと抱きしめた。今日、何度

彼女を抱擁したことだろう。しかし、その行為は嫌ではなかった。むしろ、何か落ち着く。そのようなものを感じとれた。

このままの時間がすぎればいいのにと、少し思ってしまったほどだ。

「悠さん…」

10分ほど、俺の胸で泣いていた未来先生はやっと落ち着いたのか、声は多少震えながらも俺の名前を呼んだ。

俺は再び未来先生を離す。

「はい」

これで未来先生は俺のものだ。

そう考えた俺が馬鹿だった。

「もう…私に会っちゃだめです」

「え？」

「私は、美智子を裏切れません」

そう呟いた未来先生の眼差しは、俺の心にまで響いた。これは、本気で言っているのだと。考えた末の結果なのだ。

「俺は…諦め切れません」

これは心から出た言葉だ。諦めきれない。ここまでゲームは進んだのだ。行くところまで行くと決めたはずだろう？

「悠さん…」

俺の名前を悲しそうな声で呼ぶ未来先生の顔を、俺は見る事が出来なかった。今、見てしまったら、諦めてしまいそうで怖かったからだ。

「俺は、貴方が好きなんです」

「でも…私は…」

ここで引き下がるわけには行かない。

「美智子さんのことは…」

どうでもいい、なんてこと言えるはずがない。でも、俺には未来先生が必要なんだ。

重い沈黙が、俺達の間を駆け抜けた。

「考えさせてください…」

そついうと、未来先生はおもむろにベンチから立ち上がり、その場から去っていった。

「未来さん！」

俺が呼びかけるが、止まる様子はない。どうやら、また泣いているようだ。手で、涙をぬぐっている。そんな彼女を抱きしめてあげたい。未来先生の涙なんか見たくない…。

「俺…好きだから！」

そう思う、俺の心は…何かの病気にかかってしまったようだった。

#17 優しい人なの

次の日の朝、俺はいつものように学校へと登校した。龍之介と喋り、昨晚出来なかった勉強をする。

唯一、違うといえば、未来先生の顔を見ることが出来なくなったただけだ。

なぜだろうか。なんか、こっ心がきしむ音がする。

「何、あった？」

昼休み、俺の前の席に座っている龍之介は、パンツといつも読んでいる本を閉じ、俺に質問をしてきた。

「いや、昨日、未来先生とさ…」

俺は一通り、黙って聞いている龍之介に、昨日の全てを打ち明けた。美智子の気持ちに気付いたこと、果歩に言われたこと、そして俺が告白したこと。

龍之介に言ったからといって、何か変わるわけではないが、どうしてか口が勝手に話し始めていた。

その途中、いきなり聞き覚えのある声が、俺の耳に入ってきた。

「はい！ 朝、言うのを忘れていたけど、席替えをするから、みんなこのクジに名前書いてね！」

未来先生のその言葉に、教室中にどよめきが起こった。それもそうだろう。俺達は去年、一度も席替えという行事を行っていないからだ。

まあ、人間はどうやらそういう行事が好きらしくて、どよめきもそのうち雑談に変わり、「どこに書く？」とか聞こえてくる。

俺と龍之介は、そういう行事には全くの無関心だったからであろう。

次の日の朝、最悪な出来事は起きた。

「ま…まじですか」

朝登校してきて教室に入ると、黒板には席が表記された紙が張られていた。

「本当」

いつの間にか後ろに居た龍之介に、ボソツと最後の一撃を食らわされてしまった。

「…教卓の前って」

神様、これは何かの運命なのでしょうか？

「後ろ」

そう呟きながら、龍之介は自分の席を指差した。そこは、真ん中の前から二番目の席。つまり、俺の後ろ。

「運命かな」

俺がぼそつと呟くと、龍之介に冷たい目で見られたなんてことは言えない。

ため息をつきながらも、自分の席について鞆から筆箱を取り出し、チャイムが鳴るのを待った。

「皆、席についているかな？」

チャイムとほぼ同時に、この教室のドアが開き、担任である未来先生が朝の連絡をするために、教室に入ってきた。

「よし、席についているね！」

みんなの顔をチラッと見ると、未来先生はいつものように出席を撮り始めた。

それにしても、目の前にいる未来先生の姿を俺は見られずに居る。

「小泉 龍之介君」

「はい」

やっぱり、あんなことがあったのだから、俺の心が恥ずかしがっているのか？

「紺野 大将君」

いやいや、待て待て。何故、恥ずかしがる必要がある？ 相手は俺

だと分かっていないのだし、俺だって未来先生をゲーム対象としてしか見ていないはずだ…。

「大将君？」

そうだな…？

「だ・い・す・け・君！」

「はいっ！！」

知らぬ間に、俺の名前が呼ばれていたようだ。教室内の数名がクスクスと笑っているのが聞こえる。

それよりも俺が恥ずかしかったのは、未来先生の顔が目の前にあったことだ。

「大丈夫？」

「は、はい…」

俺は再びうつむいてしまった。日曜日は全く逆の立場だったのに。

それにしても、この先生は日曜日のことがなかったかのように、いつもと変わらない笑顔と、口調でみんなと話している。

あんなことがあったんだ。

少しくらい同様しているかな、って思った俺が馬鹿だったのか？

「あ、そうだ」

全員の名前を呼び終え、連絡事項も済ませた先生が、ボソツと言葉を漏らした。

「えっと、大将君準備室に来てくれるかな？」

「は、はあ……」

先生の願いを断るわけにもいかず、俺は曖昧な返事をしておいた。何があるのだろう。未来先生が俺を呼び出すなんて、初めてのことだ。

まさか、ばれた？ だから人気の少ない準備室に俺を呼んで、話すつもりなのか？

いや、もしバレているのなら、もう少し違う方法で俺に告げるだろう？ 席も一番前にする理由が全くないし。先生がクジを作ったのだから、ごまかしはいくらでも利くはずだ。

俺は疑問に思いながらも、足を準備室へと向けた。

「失礼します」

俺はドアをトンと二回叩き、未来先生が居るであろう準備室のドアを開けた。準備室は9畳ぐらいの大きさになっている。地球儀とか、電卓など、授業で使うような備品がたくさんある場所だ。

「えっと、何の用で？」

未来先生は、待ってましたといわんばかりの笑顔を俺に見せた。

ドキッ…。

って、ちょっと待て。ドキッはおかしいだろう？

「ごめんね、こんなところに呼び出しちゃって。一時限目が私の授業でしょう？ 今日辞書が必要なんだけど、ちょっと一人じゃ持てなくて」

あはは、と笑いながらこっちにお尻を突き出すような格好で、奥のほうにあるダンボールを取ろうとしていた。

「…俺がやりますよ」

未来先生の隣まで行って、ダンボールに手をかけた。

こんなところにあるものも、取れないのか。

「あ、ありがと…」

未来先生は、一步、二歩と俺から離れていった。

「どうしました？」

俺はダンボールを抱え、未来先生の顔を見た。

未来先生は、少し黙った後そっと口を開いた。

「大将君ね、私の知り合いに似ているなって」

その顔は、とても悲しそうな顔をしている。

「……」

俺は黙ってしまった。もしかして、これはピンチというやつではないのか？

「丁寧でいい人なんだけど、どこかぶつきら棒で、なんだか冷たい人なの」

それは、俺のことだろう。これは直感だ。ただ、なんとなくそう思った。

「けど……」

未来先生は下を向いてしまった。

「優しい人なの……」

「未来…先生」

俺は、未来先生を抱きしめそうになった。この俺の手に乗っている強大なダンボールさえなければ、多分手を差し出していただろう。なんだ、この気持ち。

「…う、うめんね！」

未来先生は、いつもの口調に戻った。

「こんな話、するつもりじゃなかったんだけどなあ」

あはは、と笑いながら俺の顔を悲しそうな目で見た。重ねているの
だろう。今の俺と…悠を。

「そ、それじゃあ、それを教室に持って行ってね！」

ありがとう、と言って、未来先生は準備室から出て行った。

無理していたんだな。心のどこかでは、動揺していたんだ。生徒の
前では、心を抑えていたんだ…。

「未来…さん」

俺は、声に出して未来先生の名前を呼んだ。

無性に悲しくなり、俺はダンボールを持ち直して歩き出した。

俺は、何をしているのだろう。彼女をあんなに悩ましていいのか？
悲しませて、泣かせていいのか？

…否、いいはずがないだろう。

俺の心が、初めてこのゲームに否定の意見を述べた。

「だけど…」

俺は、ここにいたい。離れたくない。

前よりもずっと、俺のこの気持ちは強くなっていた。

「ごめんなさい…」

未来先生に謝るかのように、俺の口は動いた。

#18 ありがとう、龍之介

「大将」

「ん、どうした？」

後ろの席に座っている龍之介が、俺の背中をちょんちょんと突つきながら、話しかけてきた。

いつも前の席に座っていた龍之介。俺の後ろに居ると何か違和感がある。

それにしても、教室に帰ってきてからの俺はひどかった。簡単な問題も答えられない、数学の授業なのに、次の授業である生物のノートにメモをとっていたり。

とにかく散々な一日だ。

こんなことは、俺が生まれてきてから初めてかもしれない。何もかもに集中が出来なくなっていた。

「大丈夫…？」

本当に心配そうに見る龍之介を、俺はナデナデをしてあげた。こんなことすると、女子どもに嫉妬されるだろうが、関係ない。

龍之介は無言で俺の顔を睨み付けてきた。相当嫌だったのだろう。

「大丈夫。ありがとう」

俺は出来るだけの笑みを、龍之介に返した。正直、ちゃんと笑えている自信はない。

「今日くる？」

どこに？ と問いたいところだが、この言い方に龍之介の家のことだろう。果歩と親しい仲にいる恭平さんも居るし、ちょっと行ってみてもいいかもしれない。

もしかしたら、何か聞けるかもしれないから。

「うん。行かせてもらうよ」

俺はそう答え、放課後となるチャイムを待った。

「おかえりなさいませ、龍之介様。だ…悠様も、ご一緒だったのですか」

「あ、今は大将でいいですよ」

俺は軽く頭を下げながら、そう返事をした。俺達を出迎えてくれたのは、スーツをびしっと決めた恭平さんだった。

「今日は、お勉強をされにきたのですか？」

いつもとは違って、敬語を話す恭平さん。

「お部屋へ案内させていただきます」

早く、俺達と普通に話したいのだろう。恭平さんのほうから、部屋に行こうと誘いがあった。もしかしたら、この前のことを聞いているのかもしれない。

「お茶をお持ちしますので、少々お待ちください」

そう言って、恭平さんは龍之介の部屋のドアを閉めた。

「恭平さんって、どうしてここの執事をしているの？」

「わからない」

「結構若いのに。どうしてだろうね」

そんな話をしていると、ドアを叩く音が聞こえた。どうやら、恭平さんが帰ってきたようだ。

って、早ッ！ まだ二言しか話してないぞ！

「どうぞ」

龍之介がそういうと、ドアは少し音を立てながら開いた。

「飲み物をお持ちいたしました」

「ありがとう」

飲み物を持ってきたのは、もちろん恭平さんだった。そのまま恭平さんは、龍之介の部屋に入り、無造作にお盆を置いて俺の近くまでやってきた。

「何があつたんや？」

「何…って」

いきなりの質問に、俺は龍之介の目を見て助けを求めてしまった。

「恭平」

龍之介のその一言で、恭平さんは俺から離れる。

「果歩ちゃんから聞いた。未来ちゃんと、美智子ちゃんと何かあったそうやな」

どうやら恭平さんも、詳しいことまでは聞いていないようだ。

「…はい」

俺は正直に全てのことを話すか、躊躇ってしまった。だって俺はとうとう未来先生に告白したのだ。

そのうち知るであろうが、今言うのはなぜか・・・その忍びない。なんというのだろうか、恥ずかしい？ いやいや、違う。なにか後ろめたいものがあるのだろうか。

「何があつたんや？」

今度はゆっくりと、俺に言ってきた。

「それは…」

「それは？」

「……」

俺は困惑していた。自分のこの気持ちに。

なぜ言えない？

後ろめたいものなんて本当にあるのか？ 未来先生を騙す事を恭平さんは知っているではないか。それ以上後ろめたいものなど、ないだろう？

「その…」

なのに、俺は言えなかった。ただ『告白しました』って言えばいいのに。

「…少しは、果歩から聞いたんやけどな」

さすがの俺も、聞いてたんかい！ と、関西弁突っ込む気にもなれなかった。

「ど、どこまで？」

聞きたくない質問ではあった。でも、聞かなくてはいけない質問だ

った。

「悠…大将が、美智子に告白されて、未来ちゃんに…」

龍之介の前だからだろうか、恭平さんはそのあとを言おうとはしなかった。

「こ、告白したことですか？」

「ああ」

やっぱり知っていたのか。未来先生は多分、果歩に相談をしたのだろう。

「何か言っていましたか？」

俺のその質問に、恭平さんは下を向いてしまった。どうやら、いい報告ではなさそうだ。

「もう会うなと？」

さっきから俺が質問ばかりしているのだが、恭平さんの表情や仕草で答えが分かかってしまう。昔から、親のそういうところにはかりを、気をつけていたからだろうか。人の表情や、仕草に敏感になってしまったようだ。

「けど、俺は…諦め切れません」

俺のその言葉に、恭平さんの顔は驚きに満ちていた。

「大将：まさか？」

まさか？

「な、何ですか？」

「…いや、なんもあらへんよ。俺は、もうこれ以上言うこともないし、大将の邪魔をするつもりもあらへん。止めたいけど、お前はとまらへんのやろ？」

「…はい」

「そういうことや。後は、大将の腕次第やな」

俺は一度だけ頷いた。

「龍之介も、大将が無理しそうになったら、止めたらなあかんで？
なんたって、親友なんやからな」

龍之介は、コクンと一回俺と同様縦に首を振った。

「んじゃ、俺は仕事に戻るわ。また何かあったら、相談してもええからな？」

恭平さんは、いつもの優しい笑顔で、俺にそう言ってくれた。

「ありがとうございます…」

俺は涙が出そうになった。嫌なことがあったとかそういうことじゃない。嬉しかったのだ。恭平さんがそう言ってくれたことも。龍之

介が助けてくれるということも。

本当に、この人たちに出会えて俺はよかった。

「龍之介」

恭平さんが部屋から出て行って数分、俺達は沈黙の中にいた。

「何？」

「俺、未来先生に電話してくる」

「そう」

「今日は、本当にありがとう」

「……」

「本当に……ありがとう」

俺は無言で本を読み続けている龍之介に背を向けて、ドアに手をかけた。

「大将」

「ん？」

俺が龍之介の声に反応して振り返ると、こちらをじっと見ていた。

「……無理しないで」

「
ああ」

ありがとう、龍之介。

俺はドアをゆっくりと開き、歩き始めた。

#19 貴方が好きです

家に帰ると、俺は自分の部屋へと足を進ませた。

今から俺には、やるべきことがある。やらなければならないことがある。

部屋に着くと、俺は荷物を適当に置き、携帯をポケットから出した。

「……」

何を言えばいいのだろうか？ いや、言うことは決まっているのだが…。付き合ってほしいということと、美智子のこと、未来先生のこと。

他にもたくさん話したいことはあるが、何から話を切り出せばいい？

昨日、先生は考えさせて、と言った。もちろん、昨日の今日で未来先生の意思が固まっているとは思えない。

…こついつときは、どうすればいい？

俺は無意識に、いつも助けてもらっている『恋愛完全マスター』に手を伸ばした。

「えっと、異性に電話がしにくいとき…」

俺はボソボソと呟きながら、関連がありそうな言葉を搜した。ペーシをぺらぺらとめくっていくと、そこには『雰囲気が悪くなった異

性との電話の対処法!』という文字を見つけた。

そこには、最初は明るめに話をし、少し時間がたってからその話題に持っていくとよい。と書かれていた。

明るい…って、俺はそんなキャラなのだろうか？

そんなことを考えながら、文章を読んでいると再び注目すべきものを見つけた。

どうしても駄目ならば、その異性の友達から当たっていくか、『原因』を対処したほうがいい。

…原因？

俺達の仲での一番の原因…。それは俺の告白か？ 原因を対処したほうがいいということは、告白を取り消して、今までどおりの関係を保てということなのだろうか。いや、いまさら引いたところで、俺と未来先生の関係が何か変わるとは到底思えない。

よく考えてみる、俺達のこの状況作り出した原因を。

…み、美智子？ 美智子なのか？

そう考えてみれば、そうなのかもしれない。美智子が俺を好きでなければ、もしかしたら今頃俺と未来先生は付き合っていたのではないのだろうか？ 未来先生は、美智子に遠慮をしているみたいだし。

…まだ、俺のことを好きとは言ってくれていないが。

それよりも、この状況を作り出した一番の原因はやはり、美智子ではないのだろうか。

ならば、この本に書いてある通り、美智子から対処していくべきなのだろう。…いや、未来先生に電話をして、もう一度俺の気持ちを伝えるべきなのだろう…か。

どうすればいいんだよ…。

数分後俺は、携帯をパカッと開き、迷いを心のどこかで捨てて、電話をかけた。

「もしもし…俺ですけど」

「ゆ、悠さん…?」

「今、会えますか?」

そう言った後俺が時間を見ると、もう19時を過ぎていた。今から電車で会いに行けば、ここからならさほど時間はかからないだろう。

「…会えないと、言っただけです」

「家に行きますから」

電話の向こうから聞こえてくる声は、どこか悲しげで、少し震えている気がした。

「……」

「行きますから」

俺はそう言つと、彼女の返事を待たずに、携帯から耳を離し電話を切ると、ドアのほうからノック音が聞こえてきた。

「はい」

そついうと、ドアの向こう側からは、キヨ爺の声が聞こえた。

「キヨ爺？ 入ってもいいよ」

「失礼します」

キヨ爺はゆつくりとドアを開き、一歩部屋の中へ入ってきた。

「どうしたの？」

「…今から、どこかへお出かけでしょうか？」

「ああ」

俺がそついうと、キヨ爺はニコツといつもの笑顔を見せてくれた。どうやら、時間からして俺にご飯の準備が出来たことを知らせに来たようだ。

「お氣をつけてください」

「…ああ」

せつかく作ってもらったのに、ごめんなキヨ爺。でも、俺は…

ドアを開けて待つてくれているキヨ爺の横を通っていく。

「頑張ってください」

「…え？」

キヨ爺の言葉に、俺は反応した。まさか、そんな言葉が来るとは思っていなかったから。

ニコツと笑うキヨ爺の顔を見ると、自然と笑みがこぼれた。

「うん。いつてくる」

キヨ爺には、俺の心が読まれているのではないか。

そんなことを思いながら、足を進ませた。

「…夜遅くに、申し訳ございません」

「……」

目の前にいる彼女は、俯いている。今、どんな表情をしているのだろうか。そりゃ、あの時合えないといった手前、本当に会いにくいのだろう。

「どうしても、言いたいことがあって」

俺のその言葉に、俯いていた彼女の顔はすっとあがった。

「…どうぞ」

え、どうぞって、家に入れて事なのだろうか？ 彼女は家の奥へとどんどん進んでいく。

考えてみれば、この部屋に入るのも二回目だ。

「お茶入れますので、少し待っていてください」

彼女は、俺を部屋の奥へと案内すると、キッチンへと歩いていってしまった。

さて、これから何を話そうか。

美智子について？ それとも未来先生について？

思い切って電話したのはいいものの、どっちに電話するか考えるばかりで、何を話すか決めていなかった。本当に俺って、計画性がないよな。

「緑茶がいいですか？ 烏龍茶がいいですか？」

キッチンのほうから聞こえてくる、彼女の声に俺は『緑茶で』とこたえた。

こういうのも、ちょっと新鮮でいいかもしれない。

「はい、どうぞ」

彼女は持ってきたコップを、俺の前にある机の上に置き、よいしょと、声を出しながらそこに座った。

「よ、よいしょ…」

「き、聞かなかったことにしてください！」

彼女は恥ずかしそうに顔を手で隠し、お茶に手をかけた。

「熱っ！」

自分が今さっき入れてきたことを忘れていたのだろうか？ やはり彼女は、相当のドジっ子だ。そこがなんとも可愛い…なんつって。

「大丈夫ですか？」

「は、はひ…」

下を火傷したのだろうか？ 上手く喋れていない。

「俺、その…やっぱり、未来さんのことが好きなんです」

「……」

俺のその言葉に、黙りこくってしまった。こんなことを、初めに話すつもりはなかったんだけどな。

「……」

そして、俺もそのあとの言葉が出てこない。見切り発車もいいところだ。

…未来さんは美智子さんに遠慮をしているとでも言うのか？ 未来先生は、まだ俺のことを好きとは一言も言っていないし、美智子に遠慮をしているとも言っていない。そうであってほしいという、俺のただの空想だ。

「私……」

目の前にいる彼女は、俺より先に言葉を放った。

「貴方が好きです」

「……」

俺は彼女のその言葉に黙ってしまった。どうやって答えていいのかわからなかったからじゃない。ただ、驚いたのだ。

いきなり、彼女の口からそんな言葉が聞けるとは思っていなかったから。

「あ……」

やっと俺の口から出た言葉は、間の抜けた言葉だった。

「でも、美智子を裏切ることとは出来ないんです」

力強くいった彼女…… 未来先生の瞳は、俺の瞳を捕らえていた。

#19 貴方が好きです（後書き）

感想等いただけると、非常に作者は嬉しいです。
なにとぞ、よろしくおねがいします。

#20 心が跳ねた（前書き）

友人より、恋人。

恋人より、友人。

貴方は、どちらを選びますか？

#20 心が跳ねた

「そ、そんな…」

彼女の告白を聞いた俺は、黙って入れなかった。

「好きな人同士、付き合うのが普通でしょう！」

いつの間にか怒鳴ってしまっていた。

「ごめんなさい…」

未来先生は、今にも泣きそうな顔をしている。相当、考えた末の結果なのだろう。…多分。学校で、何の関係もない俺に素性を少し明かしてしまうほど、動揺していたのだ。

「……」

もはや、どう答えればいいのか分からなくなっていた。

美智子を裏切れない。今ならば、そんな未来先生の気持ち痛いほど分かるからだ。この状況を例えられる友人が、俺にも出来たから。中学校までの俺なら、未来先生の心境を分かりはしなかっただろう。

…だけど、俺のその考えに心を除く全てがついて来られなかった。

「嫌だ…」

涙がこぼれそうなほど、胸が痛い。

「未来…好きなんだ」

好きなんだ…。

思わず呼び捨てにしてしまった。思わず呟いてしまっていた。

「ここで、俺が引いたら、未来はもう会ってくれない…」

「……」

好きという言葉を。

「会えないなんて、考えられない」

そう言った瞬間、俺の右目から涙がポロっと零れたのを感じ取れた。

「…え」

それに一番驚いたのは、俺だった。

「何で…」

無意識に俺の放つ言葉に、未来は同様している。

「涙が…」

止まらなかった。やむことはなかった。

俺の心のダムが、溢れてきた…。

「出てきたんだ…」

戸惑う俺に、暖かいものが覆いかぶさった。

「え…」

「うっ、うっ…」

そして、俺の頭上から聞こえてきたのは、未来の泣き声だった。

「み…く」

未来は、俺を好きだといった。それだけでも驚くことなのに、その未来は俺を抱きしめている。

そんな未来が…愛おしい。

心が跳ねた。

な…んだ？

これは何だ…？

コレハナンダ…？

『恋は、突如やってくるものです。気付いたときには、もう心は動かされているものですよ』

キヨ爺の言葉が、リフレインしてきた。

こ、心・・・動く？

「うつ…」

いまだ聞こえてくる未来の泣き声。

ドクンッ。

「な…んで」

俺はそう呟きながら、手を自分の目に持っていく。

…やはり、濡れている。確かに、涙を流している。

そして、その手を次は胸に持つていく。

…やはり、震えている。確かに、いつもより激しい。

最後に俺の手は、彼女の頬へと動いた。

…やはり、愛おしい。確かに、俺は

そのまま俺は、涙で顔がしわくちゃになっている未来と口付けを交わした。

俺は未来を心から好きになっている。

「ううつ、うつ…」

目の前で泣いている彼女をギュッと抱き寄せる。

「辛いよな…辛いんだよな…ごめん…」

そう呟きながら俺は、彼女と一緒に泣いた。ずっとずっと、俺は抱きしめていた。一緒に居たかったから。未来は俺の腕の中でそのまま寝ていったけれども。

「未来」

いつの間にか、空は明るくなっていた。ああ、初めてだな。親に黙って、自宅以外で夜を過ごすなんて。

そんな事を考えていると、俺の腕の中にいる未来がもぞもぞと動き出した。

「ん…」

「おはよ」

俺がそういうと、未来は驚いた表情で俺の顔を見た。

「な、な、何で悠さんが！？ え、あ…そっか」

自分で言っているうちに納得したらしい。それでも、未来の顔は真っ赤になっているが。

「学校は大丈夫？ 何時から行けばいいの？」

現在の時刻は、朝の5時すぎだ。目の前の時計で確認したから間違いない。

「8時に集合だから…7時半に出れば間に合うの」

まだ、眠気が完璧に取れていないのか、ウトウトしている表情を見せている。こんな状況で寝ていたんだ。すっかりと眠気が取れているほうがどうかしている。

「ベッドで寝てくる？」

「ちょっとだけ…」

そう言つて、未来は自分で立ちベッドへと向かつていった。

…さて、どうしようか。

このままここで過ごしてしまえば、確実に学校には遅れてしまう。
だからと言って、目覚ましすらかけていないだろう、彼女を放つて
いくのも気が引ける。これで彼女が学校に遅刻したら、俺のせいだ。

俺はすくつと立ち上がつて、彼女の元へと歩み寄つていった。

ベッドには、寝息を立てながら寝ている未来がいた。

「寝るの早いな…」

俺はそう呟きながら、彼女の頬を撫でた。

つて、こんな事をしている場合じゃないな。

俺はベッド脇にある目覚まし時計に手を伸ばして、6時半ぐらいに
セットし、『家の鍵はポストの中』というメモを残したら、未来の
家を後にした。

学校に遅刻してしまつたら、俺が大将だつてことがバレてしまう可能性が出てくる。ちょっとでも、そういう危険なことは回避したいからな。

「ぼーぼー…」

俺はドアを静かに閉めて、鍵をポストの中に入れておいた。

道を歩く。

空はまだ思ったよりも薄暗くて…

未来から離れた俺の体は、もう未来の温もりを求めている。

#20 心が跳ねた（後書き）

昨日、私の師匠（僕の思い込みですが）である五十崎由記様が本を出版なされました。

『らしく。』という小説です。

多分、小説家になろうさまでもお知らせがあると思います。
でも！！

それよりも先に言っておきたかったんです！
って、先に言っちゃってよかったのかな？ 駄目だったら教えてください＞＜

とりあえず、詳しくは私のblog（<http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/>）か小説家になろう様が五十崎由記さんのblog（<http://www.ikazaki.com/?NW=3tCgnYtFcVXTDN>）をご覧ください。

ちなみに、表紙画像URL載せておきますね。

<http://ikazaki.up.seesaa.net/image/350.jpg>

携帯からだと見れないかもしれません。

#21 初恋だ

「Xはここに移行して…」

今は数学の時間。俺は成績を落とすまいと、眠さと戦いながら黒板を見つめていた。

「それで、ここにXを移行するだろ？」

そこは、さっきも説明しているよ…先生。

そんな事を思いながら、俺は指を必死に動かす。

今日の朝、未来先生とはHRで顔をあわせた。どうやら俺がセッとした目覚まし時計で起きられたらしい。いつもより、テンションは下がっていたけど。

かという俺は、未来先生と違って一睡もしていない。

俺は未来先生の家から自宅に帰ると、キヨ爺は5時半ごろだというのにもう起きていてせっせと仕事をしていた。

「お坊ちゃん、おかえりませいませ」

いつもの輝かしい笑顔が、俺の瞳を捕らえる。

「おはよー…」

「…寝ていないのですか？」

キヨ爺は手を止め、俺のそばへと近寄ってきた。

「ああ、色々とあつて…」

それにしても眠いと思いながら、目をゴシゴシこする。すると、そんな俺を見かねてか、キヨ爺は冷蔵庫からあるものを取り出した。

「これを飲みますと、一日中元気で居られますぞ」

「…ありがとう」

あきらかに変な色をした飲み物だったが、あのキヨ爺が勧めた飲み物だ。かなり効くのだろう。

俺はその飲み物の蓋を開け、一気に飲み干す。

「っえ…」

味は、見た目どおり不味かった。しかし、目はというと…

「あれ、スッキリ…」

スッキリしている。

その表所を見て、キヨ爺は仕事へと再び就いた。俺は自室へと足を進め、制服を手取る。今は朝6時。学校に行くには早すぎる時間だ。かといって、今から寝てしまったらキヨ爺から貰ったジュースが台無しになってしまう。

することが無い俺は、結局机の前につき、勉強をし始めた。

そして時間はすぎて、今は授業2時限目だ。あのキヨ爺から貰ったジュースの効き目も、朝よりかはかなり薄れてきた感じがする。

なんとか、数学の時間を耐え抜いた俺を待ち受けていたのは、3時限目の現代文だ。

「…眠い」

俺がそう呟くと、後ろから「眠い？」という声が聞こえてきた。その声の持ち主はもちろん龍之介だ。

「昨日、色々あって…一睡もしていないんだ」

「…大変」

「そう、大変なんだ」

「未来先生？」

「…うん。龍之介だから言うけど」

俺の言葉の途中で、3時限目が始まるチャイムが鳴った。

「俺」

そして、ガラガラと音を立て、未来先生が教室へと入ってきた。

「未来先生を好きになった」

恥ずかしさを紛らわすために、生徒が椅子を引く音にまぎれて、俺は龍之介に言った。龍之介は聞こえていたのだろう。目がいつも以上に開いている。

「初恋だ」

俺は軽く笑いながらそう言って、前を向いた。

「礼！」

学級委員長の声で、みんなは挨拶をする。俺は頭を軽く下げながら、チラッと未来先生の顔を覗いた。

教卓の前の席が、今までは嫌だと思っていたのに、未来先生が好きだと自覚してからは、なぜか嬉しく感じる。

未来先生がすぐそこに。

手を伸ばせば届く距離に。

眠気にやられたのか、俺は手を動かさずに、ただ…未来先生を見ていた。目が離せなくなっていた。

あの温もりが…一段と恋しくなった。

「えっと、今日の休みは…」

未来先生は教室をぐるっと見渡してから「欠席はなしと…」と呟きながら、出席表に書き込む。

「じゃあ、教科書出して…」

彼女の声が聞こえる。心が安らぐ…。

心が…やすら…ぐ。

いつの間にか俺は、机に突っ伏していた。

「…こら、大将君」

…え？ 未来？

頭に何かが当たる感触で、俺は目が覚めた。

「み…く？」

無意識に声が出た。小さな声。それでも、未来先生に聞こえるには十分だった。

「え？」

「あ、いや！」

もののコンマ数秒で俺は頭をフル回転にして、現在状況を理解して
いようとしていた。

そうだ、今は…授業中だ。

「起きた？」

未来先生の顔が目の前にある。心が騒ぎ出すのが分かった。

「え、あ…はい」

落ち着け俺。ここで焦ってどうする。

「勉強もほどどにね？ あまり無理すると、体に悪いから」

優しい笑顔で俺の顔を覗いてきた。

ああ、やっぱり可愛い。

「す、すみません」

俺は顔を伏せた。あまり、未来先生には顔を見られたくない。さすがに、じっくり見られるとバレてしまうそうぞ。

「じゃあ、続けるね」

そして、再び未来先生は教科書を読み始めた。

俺が、授業中に寝てしまうなど、ありえないことだった。成績は、テストが8割、毎日の授業態度、宿題の提出率が残り2割で成り立っている。

少しでも点数を下げたくない俺は、授業中はどんなにつまらなくても、真剣に聞いている振りをしてきた。

なのに、現代文の時間に寝てしまうとは…なんという不覚。

そんなことを思いながら、ため息をつくと授業終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。

「起立、礼！」

再び、委員長の声で授業は終わりを迎えた。

そのとき、目の前にいる彼女が俺に「大将君、昼休みに弁当を持参

して、私のところに来なさい」と言っ、教室から去っていった。

…まさか、さつき顔を覗かれたときにばれたか？ いや、まさかな。

もしかして、授業中に寝ていたから怒られるとか！？

色々妄想を膨らませながら、4時限目の授業が始まった。

そして、昼休み。

俺は弁当を片手に、1年の担任室へと向かった。

「失礼します」

コンコンとドアをノックしてから、俺は担任室へに入った。

「あ、大将君」

未来先生は男の先生と何やら楽しそうに話していたが、振り返って笑みを浮かべこっちを見た。

…何、他の男と、って…。なんだ、何かが爆発しそうだったぞ。

「では、行きましょう」

未来先生は、俺に近寄ってきてそう言った。俺は返事をして、彼女の後ろにつく。

え？ 1階？

疑問に思いながら、足を運ぶと、思わぬところに着いた。

「ほ、保健室？」

「そうだよ」

未来先生はどこに隠し持っていたのか分からない、弁当を取り出して座り始めた。

こんなところで、食事をしようって言っのか？

「早く、おいで」

この展開は、なにやら怪しい雰囲気伺える。いや、未来先生に限って生徒とそんなことをするようには思えないのだが。

俺はしぶしぶ、保健室の中央に置いてある机の上に弁当箱を置いて、食事を始めた。

「それは、誰が作っているの？」

「ご飯中、目の前にいる彼女は色々と質問を投げかけてくる。なぜだ、なぜ俺とご飯を食べようと思ったのだ？」

「…意味不明だ。」

「本当にバレたのか？ それとも、未来先生は生徒に手を出す女だったのか？」

「……。」

「えっと、どうして僕をここに…？」

俺はご飯を食べ終えたときに、未来先生に話しかけた。

「だって大将君、眠たいのでしょうか？」

「はあ、そうですが…。」

俺がそういうと、おもむろに未来先生は立ち上がった。そして、ベッドが置いてある場所へと足を運ぶ。

「おいで」

「って…？もしかして、本当に先生は。」

「ほら、早く」

未来先生の言葉に何も言えず、俺はただ従った。

「ほら、横になって」

おいおい、これじゃ本当に怪しい展開になってしまっぞ。

「じゃあ、目を瞑って」

俺は言われたとおり、目を瞑る。いいのか？　こんなことをして。

「40分後に、起しに来るから」

「…は？」

先生のあまりの言葉に、俺は間抜けな言葉がこぼれた。

「寝ていていいよ。大将君も何かあったのでしょうか？　私も、本当は今日とっても眠いの」

あはは、と笑いながら俺にそう言ってきた。

「あ、はは…」

何も言えず、俺は苦笑。だって、そうだろう。少しでも変なことを期待してしまった。そんなことがあるはずも無いのに。

先生は隣のベッドに横になると、目を瞑り始めた。

「え？　え？」

俺は戸惑って、何がなんだか分からない声を漏らす。

「保健の先生に、起こしてもらおうように頼んでおいたから、寝ても

大丈夫だよ」

今から40分後といえば、授業が始まる10分前。

うちの学校は、昼休みが1時間あるのだ。授業はきっちり、休みはがっちり。今の校長先生のもットーらしい。

「大将君にこの前、助けてもらったからね。これぐらいの恩は返さない」と

向こう側のベッドで目を瞑っている彼女は、ふと喋りだした。

「あ、ありがとうございます」

で、いいのか？

「…前みたいに、愚痴ってもいいかな？」

「はあ…」

俺は返答に迷い、肯定と取れる曖昧な返事をする。

「もう、逃げられないの。けど、心の準備が出来ていないときって、どうすればいいかな」

「……」

当の本人に、相談していると知ったら、彼女はどんな気持ちになるのだろうか。

「あ、ごめんね。こんなこと言っちゃって」

スーッと彼女の目からは涙が流れ落ちた。

「……」

俺が黙ったのは、返答に困ったからじゃない。ただ、現実を目の当たりにしたからだ。

そう、未来先生が言ったようにもう逃げられない。

「未来先生……？」

「すう……すう……」

青春期の男の前で、こんな無防備に寝る女は彼女ぐらいだろう。

……信用されすぎるのも、なんか辛いな。

小さな声で俺は笑った後、保健室を後にした。

逃げることは、もうしない。現実から目をそらさない。

俺は未来と一緒に居たいから

#22 大好きだよ

「ど、どうしたんです？」

いきなりの訪問に、ドア越しにいる彼女は戸惑っているようだ。

「少し、話せませんか？」

俺のその問いに、口を閉じてしまったドアの向こうにいる人物は、肯定の意味をこめてなのか、ドアをゆっくりと開けてくれた。

決着をつけよう。

俺は、今日家に帰ってからそう心に決めた。もう、未来先生の泣いている姿は見たくない。だから、俺が…言っしかないんだ。

全てがうまくいくように。

「…どうしました？」

俺はリビングらしきところにつくと、座布団の上に正座をした。そして、そのまま地面に手を付き、頭を下げる。

「未来さんは、あなたが大好きなんです」

いきなりこんな事を言われるとは思っていなかったのだろう。俺の言葉にびっくりする彼女は、口をぱくぱくしていた。

「え、え？」

戸惑いながら、頭をあげてくださいと言う彼女の言うことを聞かず、俺は頭を下げたままで居た。

「未来さんは、泣きながら俺に言ってきました」

全て本当のことを言おう。そうすれば、彼女：美智子さんだって分かってくれるはず。

「私は、別に怒ってなんか…」

「じゃあ、なんでギクシャクとしているんですか？」

未来先生と、美智子の情報は恭平さんから伝わってきている。というか、俺がただ問いたただいただけなんだけどね。

「そ、それは」

「俺を恨むのは勝手です。でも、未来さんを妬むのは違うんじゃないですか？」

ちょっと棘がある言葉だが、今の俺は氣にとめることが出来なかった。ただ、心から溢れ出てくる言葉を、口から放出しているだけ。

「でも、あの時未来は悠さんに振られて泣いている私を放って、貴方に会いに行っていたんですよ？　ちよつと、言いたいことがあるから行ってくるって…。なのに、帰ってきたら、未来は『告白、されちゃった…』って言ったんだよ…？　私への当て付けなの？　なんで、未来ばかりいい思いするの？　いつもいつも未来ばかり…」

あの時とは俺が未来先生に、あの公園で告白したときだろう。それにしても、美智子は勘違いをしすぎだ。未来先生の言いたいことは、俺に対する『好き』という言葉じゃなくて、『なんで美智子を振ったのか』という質問であること。そして、未来先生は美智子に隠し事が出来なかったのだろう。だから、言ってしまったただけなんだと思う。

「未来さんは、俺が呼んだとき、なんて言ったと思いますか？」

「……」

「なんで、美智子を傷つけたんですか？　って」

「え……」

美智子の小さな声が、ふと漏れた。

「私は、美智子を裏切れません。って、言ったんですよ？」

「あ……」

「俺は、諦め切れませんでした。正直、本当に未来さんのことが好きなんです」

「…そんなこと」

俺は美智子の言葉を遮って話し続ける。

「でも、未来さんは俺よりも、美智子さんを選びました」

「え？」

「もう会わないって言われちゃいました…」

俺は苦笑いしながら、美智子に目をむける。今日会ったことは、多分まだ聞かされていないだろう。

「でも…」

戸惑いの表情を見せる美智子。

「でも…じゃない。未来さんと一緒に居る美智子さんなら、未来さんのことを一番にわかってやれるはずだ。未来さんが貴方達を一番に考えないとしても、思っていますか？ 本当に応援していなかったと思いますか？」

俺の問いに、美智子は俯いてしまっている。

「本当は、分かっているんですよね？ でも、心がうまく理性についてこないんですよね」

今なら少し分かる、美智子の気持ちだ。

「…悠さ、んが」

美智子は震える声で、俺の名前を呼んだ。

「ただ、未来と付き合いた、いだけなんじゃ、ないんですか？」

「…実際のところは、付き合いたいです。もっと、一緒に居たいです」

「ぶつちゃけすぎですよ」

美智子は軽く笑みを見せてくれた。

「でも…」

そして、俺は決めた。決着を付けにきた。

「でも、未来さんのために俺は」

そして、ここまでやってきた。もう、未来先生の泣いている姿は見たくない。

「もう、会わないと思うっています」

俺は、心に決着をつけた。恋は盲目というが、まさしく俺がその状態だろう。

現代文の成績のことがあるが、恭平さんの言うように、今から死に物狂いで頑張れば、点数をあげられるかもしれない。もしかしたら、奇跡が起こるかもしれない。

そんな決意を、俺は決めた。

「え？」

「だから、どうかもう一度、あのたの…しそうな、…三人でいて、くだ…さ」

俺がそういいながら立ったときだった、ふらつと足場が抜け…いや、実際には俺の足がしっかりと立たなかったからだ。

俺は、美智子の家の床に、崩れ落ちた。

「あ…れ？」

体が思うように動かない。それに頭もなんか痛いような気がする。目の焦点も定まっていない。

「ど、なつて…るんだ？」

「え、悠さん！？」

必死に俺を揺すり起こそうと美智子さんの顔が、目の前にあった。

「悠さん！ 大丈夫ですか？」

呼ばれているのに、声が出せない。美智子さんは、机の上に置いてある携帯を手に取り、誰かに電話をかけているようだ。

「未来っ！ 悠さんが！ どうしょ！ たおれちゃって…あんだ彼

氏でしょ！　なんとかしなさいよ！」

ああ、未来先生か…。

そう認識したとき、俺の意識はどこかへと行ってしまっていた。

「悠…さん」

目の前には、俺が待ち望んでいたあの顔がそこにあった。

「み…く」

俺はかすかに口を動かしながら、その名前を呼んだ。

「寝なさすぎ…だそうですよ」

そういえば、ここ何日寝ていなかっただろうか。昨日は未来先生の家で徹夜したし、その前は心配になって寝られなかった…。

「すみません…」

とりあえず、謝っておこう。それにしても、ここは何処なんだ。薬品のおい、天井に白い網掛け模様。真っ先に思いつくのは、診療

所だ。そこまで大きい病院の雰囲気でもないし。

「どれだけ心配したと思っているんですか…」

あきれた顔で、俺の顔を見つめてくる。

「でも、これから…」

未来先生の言葉は、そこで止まった。何が言いたかったのだろうか。

「あの、悠さん？」

「はい？」

未来先生は、俺のおでこに手を乗せニコツと笑った。

「私達、付き合っちゃいましょうか」

…え？

俺の中の時間が一時停止したかのようにだった。それは、あまりにも突然の出来事で。

「付き…って？」

「その、恋人になろうって言っているんです!!」

「え、ええええ!!」

…ここは現実か？ 倒れたまま俺は妄想という世界へと入り込んで

いるんじゃないだろうな？ それともなんだ、これはドッキリ作戦か？

戸惑いながら俺は未来先生を見てみると、ひとつ息をはいて彼女は話し始めた。

「美智子に言われたんです。悠さんと付き合えって」

「……」

「美智子、今日の悠さんを見て、別人だと思ったって言っていましたよ。そこまで熱くなる人だとは思っていませんでした。それでもカツコイイって言っていました」

そう言いながら笑顔を見せる未来先生。だけど、俺にはそんな言葉たちも耳には素直に入ってこなくて、ただ驚きの表情を見せるだけだった。

「…本当に、付き合えるんですか？」

「はい」

未来先生はニツコリと眩しいぐらいに笑ってくれた。その笑顔がいとしくて、肩を抱き寄せた。

「やった…」

心で呟こうと思ったこの言葉が、そのまま口へと出てきてしまった。そして、未来先生も俺の背中に手を回す。

「悠さん」

俺はその言葉につられ、未来先生の顔を見ようと密着している体を、
少しだけ引き離れた。

「どうし…」

最後まで俺の口は話し続けられなかった。

だって、未来先生の口が俺の口を塞いでいたから。

「未来」

「何？」

「大好きだよ」

「ちょっと、もう…」

「未来は？」

「えつとねえ…」

#22 大好きだよ（後書き）

今回の話で、予定上の第一章が終了しました。
どうだったでしょうか？

読者の感想等を作者はお待ちしております。

もし、名前を出していいにくい、みんなに私の感想を見られるのが
恥ずかしいという方は、

net|touki|net@yahoo.co.jp

にメールを送ってくださいるか、

または、匿名（メルアドは別に知らない）の感想
を送ってください。

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/

これからも、恋愛完全マスターとお付き合いください。
よろしくおねがいします。

あなぞーすとりー（前書き）

#22の未来の視点です。

あなざーすとりー

「悠さん…」

私は悠さんから貰ったクマの人形を手に取り、ベッドの上で寝転がっていた。

「でも、美智子を…」

裏切れない。それは絶対。

「ああ、何で私」

悠さんを好きになっちゃんだろ。

あの時、悠さんに優しくしてもらわなかったら。

あの時、悠さんに人形を貰わなかったら。

あの時、悠さんの笑顔を見なかったら。

あの時、悠さんに出会わなかったら…私は、

私は、恋をしていなかったのに。こんな気持ちにならなかったのに。

「悠…さん」

私はもう一度、悠さんの名前を呟いた。そのとき、私の携帯は大音量の悲鳴をあげた。

「…美智子？」

携帯を手に取り、ディスプレイを見ると『立花 美智子』と表示されていた。

どうしたのだろう。美智子はずっと私を…無視し続けてきたのに。ううん、そんなことは関係ない。

私は意を決して携帯電話を耳に当てた。

「もしも…」

最後まで言い切る前に、美智子は声を張って悠さんの名前を呼んだ。

「未来っ！ 悠さんが！ どうしよ！ 倒れちゃって…あんた彼氏でしょ！ なんとかしなさいよ！」

「え？」

「どうしよ、未来…どうしよ」

美智子の声がだんだん泣き声に変わっていくのが分かった。

しかし、どうして悠さんが美智子の家に？ しかも倒れたってどういうこと？

今の私は混乱していた。

「未来！」

美智子の叫び声で私の心は少し落ち着くことが出来た。

「悠さんが、どうしたの？」

「いきなり…倒れちゃって、どうしよう！？ 私が無理させちゃったのかな…未来とギクシャクしてたからかな…ごめんなさい。ごめん…」

「大丈夫だよ。それよりも、今からそっちに向かうから！」

私はそう言って携帯を切り、車のキーを手を取った。

数分後、私は美智子の家に着く。

「未来！」

インターホンを鳴らすと同時に、未来が勢いよく部屋から出てきた。

「大丈夫！？」

「私より、悠さんが！！」

あわてながら私を部屋の中に引きずり込む。

「悠…さん？」

目の前には、ぐったりと倒れている悠さんがいた。

「と、とりあえず、落ち着こう」

これは私自身に言った言葉。美智子は、頷いているけれども、全く落ち着けていない。

私はそつと屈んで、悠さんをじっくり観察した。

「すう、すう…」

「…へ？」

「すう、すう…」

何度も聞こえてくる悠さんの…寝息。

「悠…さん？」

揺すってみるが、目をあけるような仕草は見せない。

「と、とりあえず、何事もなさそうだけど…一応、あの診療所につれていくよ？」

私は美智子にそういうと、まだあわてている美智子は何回も頷いた。

「ちょっと、手伝って」

私は美智子に、私とは逆側の悠さんの方を持つように言った。その

まま私の車に乗せ、車を走らせる。

走行中も、美智子は混乱しているのか、私にずっと謝っていた。

診療所に着き、診療所の先生に手伝ってもらい悠さんを中へと運ぶ。

診断結果は…

「ただ、寝ているだけです。もう、何日も寝ていなかったんではないでしょうか？」

先生はそういうと、少しここで寝かせてからご自宅へ帰ってもらおうとしようと言い、悠さんは空き室へと運ばれた。

「未来…」

やっと落ち着いたのか、悠さんが寝ているベッドの横で座っている私を、部屋の外から美智子は呼んだ。

「美智子、ごめん」

今の私の状況に気付く。彼女でもなんでもないのに、悠さんにべったり引っ付いている私を、美智子は良く思わないだろう。

「いいの」

しかし、美智子から帰ってきた言葉は、否定を示す言葉だった。

「美智子？」

私は戸惑い、美智子の名前を呼ぶ。

「私ね、最悪な女だったね」

美智子は苦笑いしながら、そう言った。

「美智子は、最悪な女なんかじゃないよ！ それ言うなら、私のほうが…」

そうだ、私のほうが最悪なんだ。美智子を応援するって決めたのに、悠さんの告白に動揺…嬉しく思っているのだから。

「うつん、未来はいい子すぎなのよ」

「え？」

「私ね、未来のこと大好きなのに、嫉妬しちゃったりして…未来のこと信じなかった。でも、悠さんが気付かせてくれたの。本当に…ごめん」

ボロボロ泣きながら私に抱きついてきた。

「裏切ったと思ってごめん。未来ごめんね…」

「うつん、いいの…」

そっか、美智子も私同様…苦しかったんだ。それだけが分かったから。

「未来」

涙を拭きながら、美智子は私の顔をじっと見てきた。

「悠さんは、未来にベタ惚れだから！ もう、付き合っちゃえ！」

ニヒヒと笑いながら、美智子の目からは涙がこぼれ出ていた。

美智子…

「うんっ…」

私も涙が自然と出てきた。あふれ出てきた。止まらなかった。

「ありがとね…」

私はもう一度美智子をぎゅっと抱き寄せた。

「本当に、ありがとう」

それしかもう、私の口は動かなかった。

それから少しして、美智子が『私がいたら、二人がイチャイチャで
きないからねっ！ 家に帰って自棄酒でもしてくるよ』と言って、
病院を出て行った。

その美智子の後姿を見ながら、私はもう一度ありがとと呟いた。

次の日の学校には休みの連絡をいれた。どうしても今だけは悠さんと一緒に居たかったから。

私はそつと、寝ている悠さんの寝顔を覗く。

本当に、カッコイイ…。

こんなにじっくり見たのは初めてだ。いつも、まぶしすぎて直視できなかったから。

そのまま私が悠さんの手を握ったとき、ゆっくりと彼の目は開いた。

「悠…さん」

半開きになっている悠さん目は、私の声で全て開ききる。

「み…く」

そうだ、この声だ。私の大好きな彼の声。全てをささげたい人の声。泣きそうな心を落ち着かせながら、私はニッコリ笑った。

あなざーすとーりー（後書き）

次から第二章となります。

基本、未来と悠が付き合っている話です。

どうか、最後まで恋愛完全マスターとお付き合いください。

#23 何もかも忘れるほどに（前書き）

ここから、第二章の始まりです。

注意点があるとすれば、大將が『未来』と呼ぶことになったことでしょうか。

最後まで、お付き合いのほどお願いします。

#23 何もかも忘れるほどに

「悠！ 悠ってばあ！！」

「ちよ、待って…まじ限界…」

今、遊園地へと来ている。

正式に付き合うことになった俺達は、お互いのことを呼び捨てで呼ぼうと決めた。いつまでも、さん付けでは他人行儀だからと俺が言い出したからだ。ただ単に、未来が俺の名前…まあ偽名だが、呼び捨てをしてほしかったからである。その、なんだ、嬉しいだろ？

「それにしても、あんな乗り物よく乗れるよな？」

「ジェットコースターのこと？ 面白いじゃない！」

俺はベンチに大きく手を広げて座りながら、未来にそう言った。

そして、俺が未来と付き合い始めてから2週間がたっていた。俺には勉強があるから、そんな頻繁には会えないが、こうして土曜日は一緒に遊ぶようにしている。

未来はどうやら、部活顧問を持っていないようだし、休日はフリーみだ。

「それにしても、悠が遊園地初めてとはね…」

そうなのだ。俺は今まで勉強勉強で、こついうところには来たことがなかった。中学校の修学旅行は『あんなもの、勉強のうちにも入らん!』と、親父に怒鳴られて行けなかったほどだ。

「あれも乗ろうよ!」

そう言っでぐいぐいと俺を引っ張る未来。そんな彼女を見るのは、本当に楽しいのだが…。

「ぎもぢわるう…」

ジェットコースターというものに、なんの耐性もない俺には、苦痛でしかなかった。

「大丈夫…?」

「だ、大丈夫…」

なわけあるか!!!

「けど、悠の弱っている姿はレアだね。いつも強がって、弱いところなんて見せてくれないし」

「それは未来の前だからで…」

と、気持ち悪さのせいか、ふと本音が漏れてしまった。ほら、未来だって戸惑ってしまっている。

この何週間でも未来について色々知ることが出来た。そのうちのひとつが、こういう恥ずかしい言葉に弱いということだ。『好きだよ』なんて言っと、顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまう。

「さ、さ、さあ！！ 次はあれに乗ろう！」

あたふたしながら言う彼女は、観覧車というものを指差していた。

「あれ？」

「そうそう」

足が震えるのが分かった。

「もしかして悠って、高所恐怖症？」

「ち、違う！」

いや、決して高いところは好きではないが、高所恐怖症というほどまで嫌いではない！ 山の頂上に行けば綺麗な景色だと思うし。

「じゃあ、行こっ！」

ニコニコ笑いながら、未来は俺の腕を取って歩き出した。

この二週間、色々なことがあった。

恭平さんに報告をすれば、なぜかとても嬉しがって、おめでとうと

言ってきたし、美智子からは泣きながら祝福された。龍之介といえ
ば、何も言わずいつもどおりそばに居てくれる。

そんな彼らの接し方は非常に嬉しかった。

美智子と未来のわだかまりもとれとようだし。

「ねえ、悠」

観覧車に乗って、数分。目の前に座っていた未来が、いつの間にか
俺の隣に座っていた。

「どつした？」

俺は隣に座った未来の手をとり、ニッコリと笑った。

「あのね、あのね」

普段、学校では見られないような未来のその顔は、俺の心のどこか
をくすぶっていた。

「私、悠に出会えて本当に良かったよ」

「…俺も未来に会えて本当に良かったよ」

未来のその言葉は、幸せすぎた。未来に会うまでそんなことも言わ
れたことがなかったし、言おうとも思っていなかった。

その後未来は、学校の出来事、美智子や果歩のことを、楽しそうに

話してくれた。

「あ、そういえば、この遊園地ってパレードがあるんだよね」

観覧車を降りて、ぶらぶらしていると、未来はそう言い出した。その顔は、いかにも行きたそうな顔をしている。どうやら、俺の言葉を待っているみたいだ。

「見に行く？」

俺がそういうと、未来はニッコリ笑って大きくうなずいた。

未来に手を取られ、先導されながら後ろをついていく。この状況が本当に幸せなのだ。失いたくない、そう思っていたのに。

そう、思えたときだったのに。

いきなり俺のポケットから電話が鳴り出した。

携帯を取り出してディスプレイを見ると、そこには一番見たくない人の名前が映し出されていた。

「電話？」

未来は携帯を片手に立ち止まっている俺の目の前に来て、顔を覗き込んできた。

「あ、うん」

今の俺の顔は、どういう風になっているんだろう？ どんな風に未

来に写っているのだろう。

「…誰？」

俺の表情から読み取ったのか、未来は俺に問いただしてきた。

「……」

「…女の人？」

「違う！」

「じゃあ、誰？」

俺はどうやって答えればいい？ いや、ただ単にそこに載っている人の名前を言えばいいのだ。

…親父だと。

「お……」

なのに、俺の口はその言葉を言えなかった。

「…でないの？」

「…わりい」

俺は未来から少し離れ、鳴り止まない電話をとった。

「もしもし……」

未来に目をむけると、どうしたの？　という目で俺をしつかりと見ている。

『大将、何をしている』

携帯向こう側からは、俺のどうしても聞きたくない声が聞こえてきた。

「関係ないだろ？」

…そんなことも言えず、俺はただ「すみません」と謝るだけだった。内容は全く覚えていない。

ただ、勉強もしないで、遊園地で遊ぶとは余裕だな。と呟かれたのは覚えている。

その返答も、もちろん「すみません」だった。

数分後、電話が終わり俺は未来の元へと近寄る。

「誰？」

再び、未来は俺に聞いてきた。

「…俺の嫌いな奴」

俺はそれしか言えなくて、ただ泣きたくなつた。親父の声、親父の発言により、俺は当初の目的を思い出したから。

俺は、未来を騙しているということを思い出したから。

居たたまれない気持ちだが、俺の中をめぐっている。現実を、親父のせいで思い知らされた。幸せだった。幸せすぎた。

何もかもを忘れるほどに。

「未来」

俺は黙っている未来の手をそつと握った。

「行こうか」

そう言うしかなかった。目の前には、未来の望んだパレードがあるのだから。今はただ、この幸せを味わうことだけを考えよう。

未来という時間を大切にしよう。

一步、また一步と悪魔の時間は近づいていく。

夏休み前の期末テストまで、残り一ヶ月をきっていた。

#23 何もかも忘れるほどに（後書き）

感想、メッセージ等お待ちしております。

メールでの感想もお待ちしておりますので、どしどし送っちゃってください。

net|t|ouki|net@yahoo.co.jp

#24 順調だよ？

「ただいま、帰宅しました」

楽しかった遊園地も終わり、俺は親父の部屋へと踏み込んだ。

「遅かったな」

帰宅時間は20時すぎ。今までの俺、そしてこの家にしては遅いほうだった。

「申し訳ございません」

俺は軽く頭を下げると、今まで資料に目を通していた親父の目は俺に向けられた。

「アメリカへ行く手続きは順調だぞ」

それだけ言うと、もう一度親父は資料に目を向けた。

もしかして、それだけを言うために俺をこの場所へ呼んだのか？

「…失礼します」

俺は振り返って、親父の部屋の強大なドアを押し開けとき、親父に名前を呼ばれた。

「何でしょうか？」

俺は少し反抗気味に振り返る。

「彼女とは仲良くしているのか？」

っ！！！

こいつっ！

「…何のことなのか、分かりかねます」

俺はそう言って、部屋を後にした。

多分親父は、今までの俺の変わりようから俺について調べさせたのだろう。お金だけは余るように出てくるのだから。

ということは、俺が未来と付き合っているということもバレているのだと思っいてもいいだろう。

…親父。

怒りというものが、俺の心に渦巻いていた。

未来とはもう離れられない。もう、未来無しの生活は考えられない。

「未来ッ」

俺は未来の名前を呼びながら、自分の部屋のベッドにしがみついた。

「お坊ちやま」

「…ん？」

頭上付近から、キヨ爺の声が聞こえてきた。

「夜の食事はどうなされますか？」

「…ごめん、いない」

何も食べる気にはなれなかった。未来を失うかもしれないこの状況なのだから。

「いいえ、駄目です。食べてもらいます」

そしてキヨ爺は無理やり、俺をベッドからおろした。

「ちょ、キヨ爺…」

「用意しております」

そついい残すと、キヨ爺は俺の部屋から出て行った。

ここまでキヨ爺が強硬手段に走ったのは、俺がこの高校に無理やり入れられたとき時ぐらいだろう。

あの時は、どうしてもこの高校に入りたくなくて、家で一晩中泣いていたときだった。キヨ爺は俺の部屋に無言で入ってきて、背中をバチンと強大な音を奏でるように叩いたのだ。

「クヨクヨしていても、何も進みません。お坊ちゃまは、この屈強に打ち勝てるキヨ爺は信じております」

そう言った後、にこっと笑ったキヨ爺の顔を今でも忘れることは出来ない。

このときのキヨ爺は、衝撃的な出来事だった。今まであんなにも強く背中を殴られたこともなかったし、信じているとも言われたことがなかったからだ。

本当に嬉しかった。

キヨ爺は唯一、この部屋で俺の居場所を作ってくれる人間だと、このとき思っただ。

そして今回もキヨ爺は俺を救っていた。

あのまま俺がベッドで放置されていたら、なにをするか分かったものじゃなかった。

一瞬俺の頭をよぎったのは、逃亡という二文字。

この家から出てしまえば、もうどうってことはない。そう考えたのだ。

だけど、そんなことをしても結果は見えている。

俺は大きく息を吸ってから、自分の部屋を出た。

3週間がたった。

俺は何の解決方法を見つけれずにいた。ただ、未来の隣で幸せを感じていただけだった。

これから来る、悪夢の時間を知りもしないで。

「大将」

俺の後ろから聞こえてくる声は、いつもの龍之介のものだった。

「な、何？」

いきなり話しかけられた俺はしどろもどろになっている。

「最近、どう？」

そう言っている龍之介の表情は、少し寂しそうに見えた。

この何ヶ月かで、龍之介の表情も今までよりはっきり分かれてきた気がする。今までは何を考えているのか分からなかったが、最近ではほんの少しだけ笑うようになったし、さっきのように寂しそうな

表情を見せることも多くなった。

俺だけではなく、龍之介も変わってきているのだ。

俺も変わっている自覚はある。今までどおり、学校では目立たないようにしているが、未来と二人になると、無性に甘えなくなるのだ。今までそんなことがなかったらから、正直今の自分の気持ちに戸惑っている。

「どうつて…。まあ、順調だよ?」

俺はニコッと笑って、龍之介に返事をした。

「勉強も?」

「…うん」

肯定の返事をしたが、前よりも勉強が進んでいると言い難い。昔と同じぐらいという言葉が合うだろう。

未来と一緒に居ないときは、勉強に時間を費やしているし、提出物だってしっかりとしている。

「協力、する」

「…ありがとう」

俺は涙を必死に抑えて、いつものように笑った。

「はい、席について！」

俺が龍之介と話していると、未来が教室へ入ってきた。

俺の席は特等席。一番、未来を間近で見られるという特権つきだ。付き合う前まで、いや好きと自覚する前までは、その席が苦痛でしかなかったが、今はここでよかったと思う。

目の前にいる未来は、俺を『悠』とは認識していないが。

「これから、テスト範囲の書いてあるプリントをお配りします」

その言葉が聞こえた瞬間、俺の心は跳ね上がった。

「テスト」

誰にも聞こえないようにそっと呟く。

そうだった、明日からテスト考查期間に入るのだ。テスト前の準備期間と言ったほうがいいだろうか。

先生達がテストを作成する時間のためにあると言っても過言ではない。

そのために、部活がこの時期だけ休みになるところも多いのだ。

この期間は、職員室に入ることも許されない。テストカンニング防止のためだ。

そして、俺はこのカンニングをするための、取って置きの切り札が

ある。そんな言い方をしたくないのだけれども。

「大将君？」

聞きなれた声が、俺の目の前から聞こえてきた。

「プリント、回してくれる？」

純粹なその笑顔で俺の顔を覗き込んできた。

「は、い」

俺は詰まりながら返事をして、プリントを受け取る。

「それで！」

その後、プリントの内容について詳しく説明していたが、俺の耳には全く届いてこなかった。

目を瞑る。

ああ、未来。

「では、テスト勉強頑張ってね！」

心が痛い。痛いんだ。

「未、ゝ、来」

俺は声に出して、未来の名前を呼んだ。

その声は誰にも届かずに、ただ俺の耳だけに残っていた。

#25 レンズの向こう側

「悠？」

その日の放課後、俺はどうしても未来に会いたくなって、未来を呼び出した。あの、公園に。

「よっ」

俺はベンチに腰掛けていた体を、立ち上がらせた。

「どうしたの？ 急に会いたいなんて、珍しいじゃん」

未来は満面の笑みで、俺を傍へと寄ってくる。

「いや、なんか、その…そういう時もあるんだよ」

俺はテレながらそっぽを向いてさういうと、いつものお返しかのように、未来は俺の腕へと抱きつき「私はいつもだよ？」といいながら顔を覗き込んできた。

その行動が、俺にとってはとても恥ずかしくて、顔を赤くしたのは言うでもない。

「さて、どうしましょうか」

俺に抱きついてた腕をそっと離し、未来は両手を腰へと当て、仁王立ちのような格好になった。

「どうしようか」

いつもどおり、計画性のない俺は、呼んだのはいいが何をするかは決めていなかった。…いや、決めていたのだが、口には出せなかった。

「悠？」

ボーっとしていたのだろう。未来は少し離れた場所にいたのに、いつの間にか俺の目の前に立っていた。

「ん？」

「私の家行く？」

ただいまの時刻、夜の八時。そんな時間に女の人の家にあがるということは、色々と期待してもいいってことだよな？

「お、おう」

俺はそう返事をする、俺の数歩前を歩く未来の隣について、そつと手を握った。それから、何を話すというわけでもなく、ただ未来の家へと向かった。

「何もないけど、ゆっくりしていつてねえ」

キッチンのほうから聞こえてくるその声に、俺の心はバクバクさせられる。

この前ここに来たときは、告白をしにきたときだったかな。あの時は、緊張しすぎて全く部屋の様子など覚えていなかったが、多少前より落ち着いている今の俺には刺激が強すぎる。

「よっこいしょ」

そう言っつて、腰を下ろす彼女を見て思わず噴出してしまった。そうだった、この前ここに来たときも、未来はそう言っつて座ったんだ。

「笑わないでよ！」

そつぱを向く彼女を慰めるように、俺は頭を撫でた。すると、機嫌が直ってきたのか、俺のほうをチラッと見た。

「…もう」

観念したのか、未来は目の前にあるパソコンに手をかけた。

「…仕事？」

パソコンを触る理由に、思わず最初に思いついたのはそれだった。その予想は、俺には当たってほしくないものだった。

だけど、現実には非情なもので、その俺の予想は当たってしまうことになる。

「そう、本当は持ち出しちゃいけないんだけどね。私の勤めている

学校って、進学校ってこの前言ったでしょ？」

「あ、あの有名な、学校でしょ？」

「そうそう、私の頭じゃそんなテキパキ出来ないからね…。悪いとは思っているんだけど、家でテストを作ってるの」

最悪だった。

「そ…っか」

俺はなんて返事をしていいのかわからなかった。その前に、目を開けてもいいのかさえ、分からなくなっていた。

「難しいんだよ！ 私だって、毎日のように勉強しているんだから」

そう言っただけで頬を膨らます未来。その頬に俺はキスをしてやった。

「え、ちょ…」

俺からキスするのは、今回が初めてなのかもしれない。だけど、今の俺の心には、恥ずかしさはなかった。ただ、罪悪感でいっぱいだったのだ。

「未来」

俺はその行動を中断させるかのように、ぎゅっと抱きしめた。

「な、何？」

いつもはこんなことをしない俺に戸惑っているのだろう。未来は顔を赤くして、俺のほうを見ようとはしない。

「……なんでもない」

「何よそれえ！」

と笑いながら未来は振り向いた。

そして、時が止まる。俺は振り向いた未来の唇を奪った。

「好きだよ……」

今、この言葉を発していいのか迷ってしまった。だけど、俺の心は抑えられなかったが、欲望に負けてしまった。

その後はただ強く抱きしめた。

「悠？」

いつもと違う俺に気付いたのか、未来は逃げようとはせず、そっと俺の手を触れてくれた。

「大丈夫、私はここにいるよ」

未来、居てはいけないんだ。

俺の近くに居てはいけないんだ。

だけど、俺は…

「悠、好きだよ？」

そんな言葉を吐いては駄目だ。

俺は悪の者なのに、そんなこと言っては駄目なんだ。

「未来う」

俺は未来の背中にぎゅっと顔を押し付けた。

「何かあったあ？」

俺のことを気遣ってか、未来はいつもより高い声で俺に聞いてくる。

「俺…」

未来を騙しているんだ。そんなことは、口が裂けてもいえなかった。

それが悲しくて、ただ泣きたくなるばかりだ。

「…お腹減っちゃった」

この雰囲気になえられなかったのか、未来は俺の腕の中でそう呟いた。

「何か、食べに行く？」

「うっん、私が何か作ってあげるよ！ “彼氏”のために！」

満面の笑みを浮かべる彼女の言葉は…俺の心にしみこんできた。

彼氏が

彼女に

嘘をついている。

俺からそっと離れ、キッチンへと向かう未来の後姿を俺はただ眺めているだけだった。

未来の鼻歌が聞こえてくる。

その歌は、俺の好きな部類に入る歌だった。

だけど、俺の耳はその曲を受け付けなくて、ただ、未来がこっちに來ないかだけ、それだけの為に耳を働かしていた。

パカッと、音をたてて、目の前にあるスリープ状態のPCを起動させる。

起動音が聞こえると同時に、俺は目を睨った。

…これは、未来と俺が一緒に居るために必要なことなんだ。

そう心に言い聞かせながら、俺は痛む心と向き合う。

理性よりも、いい点数を取りたいという欲望のために今、俺は動いている。

ごめん…

そう心の中で呟いて、そつと目を開いた。

そこには、テストの内容、範囲、問題の簡単な組み立てが成っていた。

俺はそのディスプレイにむかって、いつも所持しているカメラを向けた。

「ごめん…」

今度は声に出して未来に謝る。

これは、必要なことなんだ。俺がここにいるためには、俺が…未来と一緒にいるためには。

カシャっと、思ったよりも大きな音が未来の部屋に響き渡った。

そして、俺はPCを片手で閉じながら、未来にカメラを向ける。

「未来っ…!」

俺が呼ぶと、レンズの向こう側に居る未来は「何い？」と言いながら振り向いた。

人差し指を下ろす。そしてもう一度、カシャっという音が鳴り響い

た。

#25 レンズの向こう側（後書き）

最近、暑いですね。強大な地震も来ましたし、
近辺にはお気をつけください。

#26 最悪だ、俺

あれから、何事もなく俺は家に帰った。当初、期待していた“あれ”もすることなく。

自分の部屋に入ると、俺は今日使ったカメラのフォルダを覗いた。未来がエプロン姿でこっちを見ている写真、二人で肩を寄せ合って撮った写真、そして…

俺はその一番最初にとった写真の内容をノートに書き写すと、証拠を消すかのように、消去ボタンに手をかけた。

「未来…」

無性に悲しくなり、愛しの未来の名前を呼ぶ。俺は、彼女を裏切ったんだという、自覚がとてつもなく沸いてきたからだ。

「お坊ちやま…」

どれぐらい自分の世界に入っていたのだろうか、いつの間にか俺の隣にはキヨ爺が立っていた。

「夜のお食事は？」

「…キヨ爺」

俺はキヨ爺の質問には答えず、キヨ爺の名前を呼んだ。

「何でございましょうか？」

「俺さ…キヨ爺に感謝しているよ」

「それは、ありがとうございます」

キヨ爺はいつもの笑顔を見せ、俺にそう言った。

「だからさ…」

だから、親父を説得してくれといいそうになった。そんなことをしてしまつては、キヨ爺の首が飛ぶのは目に見えている。

「なんでもない。ご飯は、今日はいらないや。ごめんね、キヨ爺」

俺は悪そうに手を顔の前であわせ、キヨ爺に謝った。その行動のおかげか、キヨ爺はいつものまぶしい笑顔で「かしこまりました」と言い、部屋から出て行った。

「最悪だ、俺」

ベッドにうずくまると、自然に涙がこぼれてきた。

「未来う…」

今一番会いたい人の名前を俺は涙を堪えるかのように、布団にしがみついて呼んだ。

そのとき、携帯がピリリと鳴る。

明日、家

それだけが書かれたメールが届いた。もう分かると思うが、龍之介からだった。多分、このメールを見て思い当たる節は、一緒に勉強をしようと約束したことぐらいだ。ということは、明日龍之介の家で、勉強をしようというメール内容と取れる。

「ありがとう」

俺は口に出しながらメールを打ち終わると、送信ボタンを軽く押した。

そうだ、割り切ろう。

俺はベッドの上で仰向けになり、そう心に呟いた。

仕方なかったことじゃないか。未来が好きだからしたことじゃないか。今更後悔しても、どうなるってわけでもないじゃないか。

そうだ…そうだ…。

俺はそのまま目を瞑ると、頬を流れる涙を無視してそのまま眠りに付いた。

「よっ、大将！」

学校も終わって、龍之介の家に着き、部屋へ案内してもらったところには私服の恭平さんが座っていた。

「どうしたんですか？」

「いや、お前等が勉強するつちゅうから、俺が教えたらう思ってたな。ニヤニヤしながら、そう言う恭平さんは言いにくいが、頼りにならなそうだった。しかし、やっぱり執事という肩書きは嘘ではなくて…。」

「まあ、大將は基礎がちゃんと出来てるから教えることねえけど、言うなら気をつける場所が少し違う気がするな」

みっちり恭平さんに教えてもらって、早3時間がたった。大学とかは行ってないらしいけど、俺よりもはるかに頭がいい。あの龍之介だって、もしかしたら恭平さんに教えてもらったのかもしれない。

そう思って、龍之介のほうを見ると、いつもどおり英語の本を読んでいた。

「大將は、この問題一番気をつけるところはどこやと思う？」

科学の問題集を開けながら、恭平さんは俺に聞いてきた。

「やっぱり、この原子記号？」

俺が指差した先には、英語ばかりの原子記号があった。

「だと思っただろ？ だけど、ここで一番気をつけることは、ここな

んだ」

そう言つて、恭平さんが指差した場所は教科書でもなく、ノートでもなく、俺の心に向かつていた。

「へ？」

意味が分からない俺は、どこから出たのか分からない声を発していた。

「だから、心やつちゅうの！ どの教科でも一緒やけどな、間違えへん！ っちゅう心が大事なんや」

ニシシと笑いながら、恭平さんは俺の頭を撫でた。

「未来ちゃんに罪悪感が沸いてるんやろ？」

俺の顔を覗き込むように、少し恭平さんは顔を下げた。俺はその恭平さんの顔を見ることが出来なくて、目をそらしてしまう。

「そ、そんなこと……」

無いわけが無い。

こんなに好きになった人を、騙しているんだ。罪悪感が沸かないわけが無い。

「…大将」

恭平さんは、俺の頭に乗せていた手を肩に乗せ、じっくり俺を見て

きた。

「その嘘、いつかは…」

いつかは、言わなくちゃいけない。

その後の言葉は、俺の頭の中でずっとリフレインしていた言葉だった。

「考えたくないのは分かる。やけど、お前が決めた道なんやから、迷ったらあかんで。俺は正直、大将の今の気持ちがいまいち把握できやへん。今までそんな事した経験もあらへんしな」

俺は目の前にあるノートをくしゃくしゃにしたい衝動に駆られてしまった。恭平さんに言われたことがムカついたわけではない。ただ、自分の不甲斐なさに、泣きたくなったからだ。

「今日はここらへんにしよか！ また、来るやろ？」

にこやかに笑う恭平さんの顔を見て、俺は一回縦にうなずいた。そして、龍之介の家を後にした。

家に帰ると、いつものようにベッドへと直行した。そして、考えることはいつものように未来の事。

「言うか…そのまま去るか…」

確実に、後者のほうがいいのだろう。だけど、俺は！ 俺は…

「未来と離れ離れになるなんて、考えられねえよ…」

そう言った俺の声はもはや、誰も聞き取れないぐらいの涙声だった。今キヨ爺が入ってきたら、何も言い訳が出来ない。あの笑顔で「どうされました？」なんて聞かれたら、今の俺の心はキヨ爺に頼ってしまう。

…キヨ爺には、迷惑はかけたくない。

「未来…未来っ」

俺の意識は、昨日同様そのまま意識が無くなった。

「お坊ちやま、携帯が鳴っております」

ベッドの上で寝ていた俺の体を揺るのは、いつものようにキヨ爺だった。

「あ、ごめ…」

俺は寝ぼけたまま携帯に手を伸ばし、通話ボタンを押した。

「ん？」

俺は目を擦りながら電話を耳に当てると、だんだんと意識がはつきりとしてきた。

『悠う？』

電話の向こうからは、未来の声が。

「え、あ…やつほ」

そう答えるしか出来ない。だって、俺の隣にはキヨ爺が居るのだから。

『どうしたの？』

「いあ、その…」

俺はそういいながらキヨ爺をチラッと見た。多分、もうバレていると思う。電話の相手が俺の彼女であるということ。

俺が思うに、キヨ爺はもう親父から俺に彼女がいること、それが学校の先生であるということを知っているのだと思う。キヨ爺は俺の世話係だからな。

「下でお待ちしております」

そういうと、キヨ爺は俺に背を向け部屋から出て行った。

「ちょっと知り合いが来ていてさ」

『そうなの。今、大丈夫？』

電話越しでも分かる、彼女の心配している声は、余計に俺の心を罪悪感で満たして言った。

「大丈夫だよ。何かあった？」

俺がそういうと、未来はなんとなく声が聞きたくてと、可愛い声で言ってきた。あまり聞きなれないその声は、俺の心を震わせるのに十分だった。

「仕事、大変だろ？ あんまり無理するなよ？」

未来の生徒である俺が言うのもなんだが。

「うん。いい子ばかりで、私が助けられているぐらいなんだよ？
そういえばこの前ね…」

「ん？」

「“大将君” って言う子がいるんだけどね」

未来のその言葉で、俺の背中には冷や汗が流れた。今まで大将の俺に“悠”の話はしていたが、悠の俺に“大将”の話をしたことがなかった。

「う、うん」

俺はつまりながら、相槌を打つ。

「悠みたいなお子なんだよ？ どうか素っ気無いんだけど、本当はとっても優しい子なのよ！ この前なんて、私が持てなさそうなダンボールも、教室に運ぶのを手伝ってくれたの」

いい子でしょあー！ という未来に、俺は焦りを感じていた。出来るだけ目立たないように学校生活を過ごそうと決めていた俺に、い

い方向で先生に目立っているようだ。

「お、俺に似てるって？　そ、そんなイケメンいるのかよぉ！」

俺は笑ってそういうと、未来は容姿については完全否定をしてくれた。

「その子、好きになるなよ？」

「ならないわよ！　間違っても教師と生徒はそういう感情を持ちません！」

「そ…っか」

未来にそう言われた俺は、悲しくなった。俺は生徒だけど、未来が大好きだというのに。

「俺は…」

「何い？」

「未来が俺の先生だったら、好きになっているよ」

「ちょ、ちょっと！　変なこと言わないでよ！」

その後、どうしても俺には聞きたいことがあった。この衝動を抑えられない俺は、未来の言葉に間を空けず言葉を発する。

「俺が、生徒だったら…好きになっている？」

俺達の間、沈黙が少し流れた。

#27 応援していますよ

「どう…なの？」

俺は緊張しながら、その質問の答えを待った。

「悠が生徒だったら、私は…」

やっと口を開いた未来の言葉はとても遅くて、迷っている感じが見て取れる。

「私は、好きになっていないと…思っ」

「……」

その言葉に俺は、何も言い返せなくなっていた。さっきまで考えていたことが、完全に否定されたのだ。

言うか、そのまま去るか。

前者は完全に、未来の理論の前で否定された。

「教師という職に私は誇りを持っているから…」

言葉に詰まりながらも、未来は俺にそう言ってきた。今、未来の顔はどうなっているのだろう？ 未来のことだから、俺を好きにならないといって、とても悲しんだ顔をしているにちがいない。

「…っすが」

「え？」

「さすが未来だよな！ 俺はそういう未来大好きだ」

ニシシと笑いを混じりながらさういうと、未来の声にも元気が戻ってきた。俺のこの悲しみの感情は抑え切れていないかもしれない。だけど、未来が悲しい顔を見ると、俺の心はもっと痛んでいく。

なら、俺が我慢すればいい。

それから俺と未来は他愛もない話をして、電話を切った。すると、無性に悲しみがこみ上げてきて、また泣きそうになった。

「駄目だ。我慢、我慢」

俺はそういいながらベッドを降りて、キヨ爺の下へと向かった。

「遅れてごめん」

リビングに着くと、キヨ爺が用意してくれたご飯が準備されていた。そこには、母親の姿も、父親の姿も無い。

キヨ爺と、少々のお手伝いさんだけ。

「ご飯の準備が出来ております」

キヨ爺はそう言って、俺のために椅子を引いてくれた。

「ありがとう」

俺はそういうと、その椅子に腰をかける。

「あのさ、キヨ爺…」

俺は思いきって口を開いた。しかし、その言葉はキヨ爺のせいで途切れることになる。

「野原さん、天野さん、少し席を外してくれますか？」

キヨ爺がそういうと、二人そろって肯定の返事をした。

「キヨ爺…」

キヨ爺は、これから俺が大事な話をするのを分かっているようだ。さすがは、年の功というべきか。

「どうしました？」

いつもの笑顔で俺の顔を覗き込んでくる。

「あの…さ、俺に彼女居ることってもう、親父に聞いたよな？」

「はい」

やっぱりか。

「私は、応援していますよ」

思ってもいなかった言葉だった。だって、恋愛を応援する〃勉強が疎かになるかもしれない。という考えを誰だって持っているはずだ。現に、恋は盲目という言葉もあるのだし。

「応援、してくれるの？」

だけど、その現実的な発想を覆すように、キヨ爺が応援してくれたことがとてもうれしくて、俺の右目は涙をこぼした。

「もちろんでございます」

ニコツと笑うキヨ爺の胸に、俺は恥ずかしながらも飛び込んだ。

正直、不安だったんだ。

キヨ爺に『許しません』といわれたら、俺の居場所：いや、全てを失ってしまいそうだったから。

「キヨ爺…」

これ以上泣くところは、もうキヨ爺には見せられない。俺は顔をあげて、にっこりと笑みを見せた。

恋愛話を含めながらも、食事を終えた俺は部屋へと戻った。

キヨ爺と少し話してわかったことが一つ。

今を楽しめ、過去を見るな、未来みらいを確かめるな。

キヨ爺いわく未来は、多少“予測”しなくてはいけないが、それに捕らわれてはいけならしい。

確か、恋愛完全マスターにも似たようなことが書いてあったはずだ。さすがはキヨ爺。全国出版の本と同じことを思っているなんて。

俺は机の中から恋愛完全マスターを取り出し、ベッドに寝転びながら読み始めた。

「女性が喜ぶこと…」

いつも悲しい思いをさせている未来を楽しませてあげようと俺は思ったのだ。少しの罪滅ぼしと思ってもらってもかまわない。

ただ、未来の笑顔をもっと見たいのだ。

「えっと、女性に『何がしたい?』と聞くのはあまりよろしくない。大体の女性は男にエスコートされるのがいいらしい」

らしい。かよって突っ込みを入れたくなっただ、まあここはよしとしよう。

「俺が…エスコートか」

そういえば、今まであまりエスコートの的なものをしたことが無かった気がする。いつも遊びに誘ってくれるのは向こうからだし、俺から誘ったとしても、特に計画性がないため、最終的には未来に頼ってしまっている。

「俺って、男として駄目なんじゃないのか?」

元々、計画を立てることが苦手な俺にとって、エスコートというのは非常に難しいことだと思った。その日に何々をするとか、全部自分で決めるなんて不可能に近い。

だって、もし未来が嫌がったら？ いや、未来は優しいから『嫌』とは言わないが、内心好きじゃないことを未来にさせてしまったらどうする？

やっぱりここは、二人で決めるのが無難じゃないのか？

そう思っただけページを一枚めくると、俺の心を全て読みすかしたかのような言葉が書いてあった。

相手が嫌と思うことをさせてしまうのではないか、と思う輩も居るかもしれないが、それは勘違いだ。女性は好きな男性にエスコートされて嫌だと思っことは無い。一緒に居ることが全てなのだから。

…はい、分かりましたよ。

俺はひとつ大きなため息をついた。

そして、悪魔の時間であるテストは終わっていた。今日、この日までに、一番最後に遊んだ先週の土曜日からは悠の姿で未来とは会わずにいた。

確かに、未来と会うのは大事なことのだが、それよりもこの日本に残ることが何よりも先決なのだ。正直、何度会いに行こうかと思っただけ、毎日電話をやり取りして、その気持ちを落ち着かせていた。

未来も、テストの準備などで忙しくて、あまり会えないらしい。教師って、見た目はあまり忙しそうに見えないのだが、本当は彼氏にかまっている時間が限られているようだ。

それにしても、最終日に行った現代文のテストの内容が、俺に罪悪感を再び沸かせたのであった。

「大将」

少し落ち込んでいる俺の前の席で、龍之介は心配そうに俺の顔を見た。

テストの時期だけは、席の場所が出席番号順に戻ってしまう。

ということは、俺は龍之介の後ろになって、学校内で唯一の幸せだった先生姿の未来を間近で見る時間も少なくなった。

「何？」

「テスト……」

どうだった？ と聞きたいのだろう。俺はニツコリ笑って「いつも……と同じかな」と答えた。

本当はそれどころじゃない。

全問と言っていいほど、答えがスラスラと頭の中に出てきた。なんて、未来の家で見たパソコンの内容と、ほぼ変わらない問題がそのまま出てきたのだから。あの時映し出されていた内容は、この問題用紙ほどの完成度は無かったが、問題の出る場所、出す記号などが全て記されていた。

それを写真でとって、ノートに書き写した俺が、いい点数をとれないわけが無い。

…そう、取れないわけが無いのだ。

「大将？」

「ん？ どうした？」

「…なんでもな、い」

難しい顔をしていた俺を心配してくれたのだろうか。龍之介は俺をじっと見た後、そっぽを向いてしまった。

学校も放課後となり、帰る準備に取り掛かる人を俺はずっと眺めていた。今日は、龍之介と一緒に帰ろうという約束はしていない。

だから、俺は少しここで心を落ち着かせようと思ったのだ。

それが、裏目に出るとも知らずに。

昼ごろに終わった学校も、午後3時になると誰もいなくなっている。家に帰る気にもなれなかった俺は、何も考えようとはせずに、ずっと座っていた。

「帰ろう…」

そう言っつて、鞆に手をかけたとき、ドアの開く音が、教室に響き渡った。

「だい、すけ君？」

その声の持ち主は俺が一番愛している人のものだ。

「どうしたの？」

そして、今は会いたくなかった人物でもある。

「もう、誰も居ないかと思ったよお。大将君がいて先生ビックリしちゃった」

その純粋な笑顔を俺はまともに見ることが出来なかった。

「未来、先生…」

俺は少し離れた場所にいる、彼女の名前を呼んだ。

「未来、先生」

「テストは、どうだったのお？」

戸惑っている俺に構わず、未来は教室の黒板の前に立った。どうやら、黒板消しやチョークなどの掃除をしにきたらしい。

「まあ、いつもどおりです」

俺はさっきまで座っていた椅子の前で立ちながら、未来の言葉に返事をする。

「確か大将君って、いつも成績とってもよかったわよね？　すごいよねえ。先生尊敬しちゃう」

あはは、と笑いながら未来は俺に背中を向けながらそう言った。

「…今年、」

そこまで言ってしまったって、自分の失態に気付いた。未来に成績のことを言ってみる。あの生徒を大事にする未来のことだ。もしかしたら、俺の家にやってくるかもしれない。

それだけはどうしても避けたかった。

「今年、どうしたの？」

案の定、俺の途切れた話を続けようと未来は質問を投げかけてきた。

「いえ、何も。現代文のテストは難しかったですよ」

あはは、と軽く笑いながら俺はその場に座った。

「今回はちょっと難しかったかもね。けど、大将君なら大丈夫よ。一生懸命勉強していること、先生は知っているんだから」

「あ、ありがとうございます」

それから数分間、俺と未来の間に沈黙が流れる。この沈黙を俺はどうしても好きになれない。かといって、俺から何か話題を振るか？ そんなことを考えていると、未来は口を開いた。

「それにしても、今回も龍之介君が、学年一位かしらねえ」

チョークの粉を掃除し終わったのか、未来はこつちを振り向いた。

「そ、そうですね」

振り向いた未来の顔を、俺は見ることが出来ず俯いてしまう。あの純粹な笑顔を今の俺は見ることが出来ない。

「大将君」

未来が教壇を降りて、近づいてくるのが分かる。俺の心はもうバクバクで、今傍に寄られたら正直抱きしめる衝動を抑えることは出来ないと思う。今、俺の体未来の温もり、優しさ、そして安心感を求めているから。

「いつも…」

また、一歩近づいてくる。

「ありがとうね」

未来…俺に“ありがとう”は言っちゃいけないんだ。そんなこと言われる筋合いが無いのだ。

「いえ、そんな、こと、は」

だめだ！ 目を、あわしちゃいけない。

「そんなこと無いこと無いの！ 大将君は、いつも先生を助けてくれているんだから」

ね？ つと言いながら未来は俯いている俺の顔を覗き込んできた。

「み…く、先生」

しちゃいけない。分かっている。だけど、俺の理性はどこかへ吹っ飛んで行った。

俺の右手は、未来のほうへ少しずつ伸びていく。それに気付いてないのか、どうなのかは分からないが、未来はまだニツコリと笑ったままだった。

止まれ、止まれ！

そのとき、俺を助けるかのように学校中に響く放送音が流れた。

『諸戸先生、諸戸先生、職員室にお戻りください』

その放送を聞いて、未来は俺から少し離れていく。

「じゃあ、私職員室に戻るからね。あまり学校に残っていると、他の先生に怒られちゃうぞ！」

じゃあね、と言って未来は教室から出て行った。その間、俺は何も発することは出来ずに、ただその場に突っ立っているだけ。

未来が出て行って数十秒後、俺の理性が全て戻ってきた。

「俺……」

自分の行動に嫌気が差し、右手で思いっきり太ももを殴る。

「何、やってんだよ」

鞆に手をかけて、出口へと足を進ませる。悲しみを堪えながら、自分の最悪さを感じながら。

後日のテスト返し、俺の成績が確実に上がるだろう点数を全てのテストで取っていた。現代文に関しては、トップ成績といえる満点だ。

龍之介におめでとう、と言われたが全く嬉しくない。むしろ、悲しくなった。

『100』

その数字を見ると、俺の心はきしむ音をする。俺が未来を裏切った、証なのだから。

そして、そのテストが終わると、皆が待ち望んでいる夏のビッグイベントが待っている。

「明日から、夏休みだから、交通事故などには十分と気をつけてください」

教壇の前、つまり席が一番前である俺の前で未来は、夏休みでの注意事項を述べていた。

「あと、九月初めのほうに実力テストも…」

その後も色々と話している未来の顔を、いまだに俺は見ることはできなかった。

あのテスト以来、俺は未来に会うことが出来なかった。未来はテストが終わってやっと遊べる時期だというのに！ と叫んでいたが、

俺は家の用事ということで会わないようにしていた。

しかし昨日、恭平さんからのメールがきた内容は、実に今の俺には残酷なものだった。

『夏休み暇やるお？ またいつもの6人で遊びに行こうや！』

いつもの6人というのは、龍之介と未来も含まれているらしい。ということとは、絶対に未来は反対するだろう。

『未来は、反対すると思いますよ？』

と俺が返信すると、数秒で恭平さんから返ってきた。

『そんなへまを俺らがやれると思うかあ？』

ニシシ、と笑い声が聞こえてきそうなこのメール。まさかとは思うが、いや、そんなことはないだろう。

俺は考えながらメールを打っていると、俺の返信を待たずに恭平さんから再びメールが。

『まあ、拒否権はないからな！　つちゅうか、もう行く場所も日時も決まってるねん。その日だけあけといってくれたらいいわ』

…は？　としか言いようが無かった。

その後に続く文章によると、どうやら泊まりらしい。生徒と一緒に遊びに行くのさえ、未来にとっては駄目なことなのに、それ＋泊まりだなんて。あの未来が許すはずが無い。

とりあえず、未来にメールしてみるか。

『未来う？　恭平さんたちと夏休み遊ぶって聞いた？』

未来とは会ってはいないが、電話やメールは毎日のようにしている。そうじゃないと、学校での俺の精神が耐えられなくなるからな。

数分後、未来からメールが返ってきた。

『うん！　楽しみだねえ。ちょっとドキドキしてきちゃった！　早く水着買いに行かなくちゃ』

どうやら、遊びに行くことは知っているみたいだ。もう美智子と果歩の強引さに、未来もとうとう諦めたのか。

『楽しみだな。じゃあ、今日は寝るね。おやすみ』

とメールを送って俺は、ベッドに倒れこんだ。

「大将」

はっと、意識を現実に戻す。

「大将」

いつの間にか、学校は終わっていて教室には目の前の人物以外、誰も居なくなっていた。

「あ、れ…龍之介？」

俺の傍に立っていたのは龍之介だった。まあ、学校で話しかけてくるのは、龍之介か未来だけ。

「帰ろう」

今日は、一緒に帰る約束をしていなかったはず。何かあるのだろうか？

俺は声には出さず、肯定の意味を表した。

#28 100（後書き）

また、一日空けての更新申し訳ございません。
ハイペース更新が、私の売りなのに…？

言い訳をしますと、今作者はテスト勉強という悪魔と戦っておりまして、さほど頭がいいわけでもないのに
IT系の学校へ進んでしまったわけですよ。

一回、試験で50点以下を取れば、2000円支払いをして再試験という設定になっておりまして、金の無い作者は一生懸命勉強をしている”つもり”です。

ということで、小説の更新ペースがガクツと落ちちゃいましたが、
一応二日一回の更新を最低ペースにしたいと思います。

夏休みに入れば、優雅な休息が待っている。それまで、しばしお待ち…。

感想などいただけたら嬉しいです。

#29 そして、事件は起きる

「わりい、わりい！ 直接色々と言いたくてなあ！」

俺の目の前には、私服の恭平さん。

あの後、龍之介に付いてきて欲しいと言われ、付いてきた先がこのカフェだったのだ。俺達が着いたときには、もう恭平さんは席でくつろいでいた。

「はあ、なんででしょう？」

学校帰りの俺はもちろん、学生服。俺の隣には、来て早々頼んだジュースを飲んでいる。

「それにしても、その姿の大将と、この姿の大将の変わりっぷりは面白いなあ」

ニシシと笑いながら、肘をついて俺の顔を覗き込んできた。その笑顔は俺はじつとにらみ返して、本題へと入る。

「それで、言いたいことは？」

恭平さんは面白くなさそうに、背もたれに背中を預けて、手を上に伸ばす。

「えゝあゝ！ あんなあ、5、6、7日と空けといってくれへん？」

上を向きながら俺の顔を見ようとしなない。

「え、いきなりですか!？」

「まあ、大将に拒否権はないんやけどな。大将がその日空いてることも知ってるし」

「な、なんで!？」

俺が軽く叫ぶと、小さな声でうるさいなあと言いながら、再び恭平さんは机に肘をつく。

「大将の側近の人に聞いたねん。家庭教師や塾とかいつてへんのやろ? 夏期講習みたいなんも無いみたいやし。な? いこおや! ってか決まってるから、変更は受付へんけど!」

拒否権が無いのなら、何のためにここに呼んだんだと叫びたい。

「まあ、今から本題にはいるんやけど…」

「今からかい!！」

って、思わず関西弁でツツコミを入れてしまった。なんという不覚。

「おお、いいノリやん! でも、まだまだやな。そこはな…」

と、ツツコミに対する説明をしようとしている恭平さんを止め、本題へと入らせた。

「そんな焦るなやあ。えっとな、この事未来ちゃんには言ったか?」

今の俺にはその質問の意図が全く理解できなかった。数日後、その言葉に意図があることを思い知らされることに鳴るのだけでも。

「え？ はい。そりやもちろん。何故かウキウキでしたが。もう、龍之介のこととかも諦めたんですかね？」

そう言うと、恭平さんは頬を軽く膨らませ、空気を噴出した。

「ちょ、笑わせるなや！」

「はあ…？」

「まあ、うん。諦めたらしいのお、らしいのお」

といいながら、笑うことをやめない恭平さん。何で笑っているのかは俺にはさっぱりだ。助けを求めるために龍之介のほうを見るが、ジューズをずるずる吸っているだけだった。

「それだけですか？」

「あ、いやいや！ そんな訳ないやろ」

じゃあ、とつとと本題に入れよと言いたかったが、何かとお世話になっっている恭平さんだ。そんなことは口が裂けてもいえない。

いきなり真剣な顔になった恭平さん。もう、何を言われるのか分かった。

「…テスト、どうやった？」

やっぱり。

「よか、った…です」

罪悪感が再び降り注いできた。テストという言葉を聞くと、どうしても最初に浮かんでくるのがあの事件。

未来を裏切った、あの事件。

「そつか…。まあ、夏やかな。テストのこととか忘れて、ぱっと遊ぼうや！」

ぱあぁっとな！　と言いながら、恭平さんは手を大きく広げた。多分、この旅行も、俺に対する優しさから来ているのかもしれない。

未来とこのまま気まずい関係のままにならないようにとの、恭平さんの心から。

そして、事件は起きる。

8月5日火曜日。

未来は、俺達が泊まる宿谷の前で叫んだ。

「な、な、な、なんでー！！！」

未来の叫び声で、周りの人から俺達が注目されている。そんなことも気にせずに、未来は大声で果歩に怒鳴りつける。どうやら未来は龍之介が来ることを知らされていなかったらしい。

「なんで、なんで…」

そう、俺達の会話全てが…

「小泉君が居るの!？」

…噛み合っていなかったのだ。

「え、言っていなかったっけ？」

エヘッって顔をして、未来にそういう果歩。未来はもうやりきれない顔をして、俺を睨みつけてきた。

「悠は知っていたの!？」

「いや、その…龍之介が来るってことは…」

俺はあたふたしながらそう返答をすると、未来は俺の胸をポスポス音を立てるように殴ってきた。

「なんで、教えてくれなかったの!？」

「いや、知っていると思って…」

そういうと、未来はうつむいてしまった。どうやら、俺達の会話全てが噛み合っていなかったことを理解したらしい。

「…帰る」

まあ、そうなるよな。

未来は鞆を手に持ち、駅の中へと入っていきこうとした。

「ちょ、待って！ 未来！」

果歩は未来の腕を掴むと、その場に留まるように説得し始めた。

おかしいとは思ったんだ。

今日の集合場所、時間と共に未来たちとは別だった。恭平さんいわく、女の人たちには色々と準備があるから、と言われその場は納得したが、よく考えてみるとおかしいことばかりじゃないか。

「ごめんな、未来」

果歩の説得を受けながら、呆然としている未来に俺は近づいていった。俺は知っていたのに、気付いてあげられなかった。

「ごめん」

俺がもう一度謝ると、未来は首を両サイドに振った。

「悠は悪くないもん」

「いや、でも…」

未来は大きくため息をついて、果歩の顔を再び睨みつけた。

「今回は許す。だけど、もし次こんなことがあったら、私帰るからね！」

ぶいっとそっぽを向いて、宿谷へと入っていった。未来は何よりもこの旅行を楽しみにしていた。この雰囲気을これ以上壊したくなかったのだらう。

未来の後についていき、格部屋に分かれて荷物を置いた。どうやらこの宿谷は二人部屋が最高らしく、三人同じ部屋に泊まることはできないらしい。

ということ、俺は龍之介と同じ部屋になると聞かされ、部屋へ案内された。

405と書かれた部屋のドアのぶをまわす。鍵はかかっていなかった。龍之介は先に到着しているのだらうか？

玄関の奥にある襖を開けると、そこには思わぬ光景が待っていた。

「「え」」

二人の男女の声が重なり合う。

「「なんで」」

目の前にはいつも見ている、あの人が座っていた。

「未来!?!」

「悠!?!」

まさか、俺達…はめられたのか!?!

恭平さんがいると思われる部屋へと俺は迷わず走った。こんな事があっていいわけが無い。正直、一緒の部屋なのはすごく嬉しいのだが、俺が大将だって知られそうで怖いのだ。

「恭平さん!」

俺は声をあげて、恭平さんの名前を呼んだ。

「おゝだい…、悠かぁ!」

一応気を使ってくれているのだろうが、そんなことお構い無しだ。俺は恭平さんの傍まで一直線に足を運び両手で肩を掴んだ。

「な、何を…してくれているんですかぁ!?!」

俺は、旅館中に響き渡るのではないかと思うぐらい、大きい声を張り上げた。

#29 そして、事件は起きる（後書き）

テストも無事終わり、本日から夏休み生活となります。

怠けず、作者がしっかり生きていけば、しっかりと執筆をさせていただきたいと思います。

作者にとって、読者様の声は何よりも嬉しいです。

感想等、お待ちしております。

#30 悠の…馬鹿あ！！

あの俺の叫び声を聞きつけて、恭平さんと龍之介以外の3人もこの部屋に集まってきた。

「ど、どうしたの!？」

一番に声をあげて部屋に入ってきたのは果歩だった。未来はというと、一番後ろでモジモジしている。そりゃ、俺達は一緒に夜を過ごしたこと…はあるけれども！ あれは、事情が違う。あの時は抱きしめていたら、知らぬ間に時間がたってしまつて、一緒に夜を過ごしたという感覚にはなれなかった。今回は、そのときと違って心構えをしなきゃいけない。故意で一緒に部屋で夜を過ごすのだ。

「いやあ、悠がいきなり怒鳴り込んできただけや」

ニシシと笑つ、反省する色を見せない恭平さんに俺は少しだけ呆れた。

果歩は、未来の顔をじつと見て「あゝ」と呟く。

「そついうことねえ」

「そついうことや」

果歩と恭平さんには何か通じるものがあるらしい。あの会話だけで全てがわかったようだ。

「そついうこと…じゃないですよ」

「まあ、別にいいじゃない！ 付き合っているんだから」

果歩も恭平さんのようにニシシと笑いながら、俺の肩をポンポンと二回叩いた。もう、この人たちに何を言っても無駄だ。

「…わかりましたよ」

俺は諦めてそう呟くと、自分の部屋の玄関に放置してある鞆を整頓するために戻った。そのとき、恭平さんと果歩に何か言われていたが気にしない。

「まあ、うん。俺は大丈夫だから」

一緒に部屋へと戻った未来に俺は呟く。恋愛完全マスターによると、好きな男性と過ごす初めての夜は怖い。なので、男性の方は焦らずゆっくり相手を見ながら、事を進めましょう。と書かれていた。

未来は天然だから、正直怖がっているのかはどうかは知らないが、とりあえず何もしなければ大丈夫だろう。

「う、うん」

鞆に目をむけながら、未来はそう返事をした。それにしても、未来は何故かさつきからこつちを向こうとしない。どうしたものだろうか。

「み〜く！」

俺はぴょんつと跳ねて、未来の隣へとつく。

「どうした？」

少し頬が赤い気がする。もしかして風邪か？ 旅行前になると、かならず風邪を引く人とかよく聞くからな。

「熱？」

俺はそう言つて、未来の額へと手を伸ばしたが、なぜか未来はそれさえも避けてしまう。もしかして、本当に風邪なんかじゃないのか？

「未来」

俺は名前を呼ぶと、未来の顔を両手で無理やり俺のほうを向かせ、俺の額と未来の額を合わせるように、顔を近づけた。

「ちょ、悠……」

そして、額をあわせる。

「別に、熱ないじゃん」

「…へ？」

俺はそつと額を離すと、未来の顔をそつと覗いた。

「大丈夫か？」

「え、あ…う…」

未来が俯いてしまった。どうしたんだよ。

「悠の…馬鹿あ…！」

そう言ったまま、未来は部屋を飛び出してしまった。って、俺は何か悪いことをしたか？　ただ風邪か心配になっただけなのに。

「おい、未来！」

俺はすぐさま立ち上がって、未来の後を追った。

その後、未来に追いついた俺は理由を問いただした。まあ、結果から言つと何も教えてくれなかったわけだ。

「なんだ、痴話喧嘩あ？」

俺達が廊下で話し合っていると、そこに美智子がやってきた。美智子に告白されて以来、俺は美智子を正直避けてきた。未来だってそうだろう。出来るだけ、俺と未来と一緒に居るところを見られないように気をつけてきたはずだ。その証拠に、今未来の顔はどこか悪そうな顔をしている。

「私のおかげで付き合えたんだから、そんなすぐに別れないでよね
！」

でも、どうやら美智子はそのことなんて全く気にしていないようだ。

「え、あ、うん」

未来は作った笑顔を美智子に向けた。正直、別れるつもりは微塵も無い。

「じゃあ、先に行っているからね」

美智子が手をフリフリしながら、俺達に背を向けた。って、え？先に行くって…どこに？

俺達は意味も分からず、その場に立ち尽くしているだけだった。

「お前等遅いねん！！」

「す、すみません・・・」

そして、あの美智子の発言から、ここまでたどり着くまでに30分かかった。

あれから部屋に戻った俺達は、美智子がどこに発言の意味を二人で考えていた。俺達はこれからのスケジュールを一切聞かされていない。

数分後、恭平さんから思わぬメールが届く。

『お前等今どこにいるねん？ 早く浜辺こんかあ！！』

…浜辺？

俺は疑問に思い、未来にメールの内容を伝えてみると、俺と同じ反応を見せた。

とりあえず、恭平さんに言われたとおり、俺達二人は浜辺に向かったのだ。

それからが大変だった。

浜辺についたら、上半身裸の龍之介と恭平さんがいるし、ビキニ姿の果歩や美智子もいる。つまり、泳ぎにきているのだと、俺達はこのとき気付いたのだ。

恭平さんに軽く怒鳴られ、水着を取りに戻って、もう一度浜辺に戻ってきたらこの有様だ。

「はあ、まあいいや。それよりも早くみんなで遊んでハッスルしようや！！」

そう言っつて、子供みたいに恭平さんは海へ向かって走り出した。それに続いて、果歩と美智子も走り出す。俺と未来と龍之介はというと、近くにあの人たちが立てたであろうパラソルの下で腰を下ろし

た。

「…眩しいねえ」

俺がそう呟くと、未来は何も言わず首を縦に振るだけだった。

「まだ、怒ってる?」

何で怒られたのかはさっぱり分からないが、あの状況からすると俺が悪いのだろう。

「べ、別に…怒ってないし」

そう言いながらも、俺の顔を見ようとはしない。やっぱり、怒っているじゃないか。

「みくっ!」

俺は未来との距離を縮めた。未来は驚いた顔をしているけど、気にしない。

「俺、未来のこと好きだよ」

そつと耳元で呟くと、未来は顔を真っ赤にして俯いてしまった。本当に可愛いんだから。

俺がニコニコしていると、向こうのほうから果歩の声が聞こえてきた。何を言っているかは分からないが、手を振っているところを見ると、来いということだろう。

俺と未来は顔を見合した。何故かそのとき笑みがこぼれてきて、二人で声を出して少し笑う。

俺は龍之介を呼び、果歩の下へと足を運ばせようとした。

「悠、待ってよ！」

日焼け止めを急いで塗っている未来を見て、俺はもう一度微笑む。そんな俺を見て未来は頬を膨らませた。

「もう、ちよっとは手伝ってよぉ」

涙目になりながら俺に訴えてくる未来の表情は、愛おしすぎた。龍之介に先に行つてと言うと、龍之介は無言でうなずき、果歩達の下へと向かっていく。

俺は龍之介とは反対の方向に足を運び、未来のところへと歩み寄った。

「ほれ」

俺は未来が手に持っている日焼け止めを手に取り、背中を向けさせた。それからはご想像にお任せするでしょう。

俺の頬がにやけていたのは、言うまでもなさそうだ。

#31 どこまでいったねん？

「なあ、悠」

「はい？」

「未来ちゃんどこまでいったねん？」

「はあ！？」

俺は思わず砂場へと寝かしていた体を起き上がらせる。

今、俺と恭平さんは泳ぎ疲れたこの体を、パラソルの下で癒していたところだ。龍之介は最初から泳ぎに行っていないため、俺達の横で本をずっと読んでいて、海辺にいる元気な女子三人組は、ビーチボールでバレーらしきものをしている。

「だ・か・ら、最後までいったんかって聞いているんや」

悪魔の笑みを浮かべながら俺にそう聞いてきた。

「ど、どこまでも進んでいませんよ」

キスさえも、あの付き合い始めた時が最後なのだ。それ以上が俺達にあるわけがない。

「まあ、未来ちゃんも、悠もシャイそうやでな」

はあ、とため息をつかれても、俺は今のままでいいと思っている。

これ以上先に進んではいけない気がするからだ。

「そういう事にしておいてください」

俺は起き上がっている体を、再び砂場へと寝かせた。

「恭平さんは…」

どこまでいったんですか？ と反撃してやろうと思ったのに、この人は俺がいい終わる前に答えた。

「最後まで行つたで。シャイな君達とは違つからなあ！」

…そんな恥ずかしいことを堂々といえる恭平さんに拍手を送つてあげたい。

「まあ、別に人それぞれペースがあるからな。気にすることはあらへん。むしろ急ぎすぎると、未来ちゃんも困つちゃうかもしれないからな」

いつに無く真剣な顔で恭平さんは恋愛を語り始めた。

「は、い」

俺達のことを少しは考えてくれているみたいで、ちょっと嬉しかったりする。だけど…俺達のこの関係は、恋愛といえるのだろうか。未来は俺のことを何も知らない。騙されていることさえも気づいていない。

それを恋愛といえるのだろうか。

「恭平！」

海辺のほうから、果歩の声が聞こえた。恭平さんと俺は、少し体を起き上がらせて、そっちへと目をむける。

「ほら、悠君もおいでよ！」

果歩の声は透き通るような声は、50mは離れているであろう俺達の耳まで届いた。

「ほな、行くか」

恭平さんはその場に立ち、砂を払い落とすと果歩たちの元へと走っていった。もちろん、俺はそんな事が出来るわけもなく、砂を払い落とすとゆっくりと歩いていく。

それから俺達は、一緒に泳いだり、ビーチバレーをしたり、笑い合っていた。本当に楽しかった。自分が未来を騙していることさえ、少し忘れそうになるぐらい。

そんな遊びは日が暮れると、する気力も無くなって、俺達は宿谷へと戻っていた。その後はお風呂、ご飯を済ませ、各自自分達の部屋へと足を運ばせた。当然のごとく、俺と未来は同じ部屋。ぐったり地面に倒れた俺のそばで、未来は今日あったこと、楽しかったことを喋ってくれていた。

「未来う」

うつ伏せになりながら、少し背をそって言葉を発したからだろうか、

少し甘い声になってしまった。

「なあに？」

未来はそんな俺に合わせるかのような口調になっている。

「づがれだあ……」

濁音つきでそういうと、未来は、あははと笑っておつかれさまと言ってくれた。もう一度未来の名前を呼び、俺は未来に触れるぐらいの距離まで寄った。

「未来？」

こういう所に来ているからだと思う。俺は自然と未来に好きだと呟いた。

「わ、私も好きだよ」

未来はいつも言わないその言葉を、照れながら言ってくれた。久しぶりにその言葉を聞いた俺は、心の底から何かは分からない物がこみ上げてきた。

「み、く」

俺は未来の手をとると、体を少し起き上がらせた。未来はそんな俺の顔をしっかりと見ている。自然と、俺達の顔は近寄っていった。

ドンッ！

凄まじい音を出して、俺達がいる部屋のドアが開いた。

「な、何！？」

俺と未来は驚いて、ぱつと距離をとる。

「未来う！ 悠君！」

そう言ってきたのは少し酔っ払った様子の果歩だった。

「ど、どうしたの果歩！？」

未来はあたふたしながら、果歩のそばへと近寄っていく。

「もしかしてお邪魔だったあ？ よかったら皆で何か怖い話でもしようかなあって思ったんだけどお、お邪魔なら仕方ないねえ」

ニシシ、と恭平さんの笑い方を真似するかのような笑い方で俺達にそう言い放った。もちろん、俺達は二人揃って思いつきり否定したのだけれども。

「じゃあ、おいで！」

果歩はそう言って、自分の部屋へと戻っていった。話に聞くとそころだと、果歩達の部屋がこの三部屋の中で一番大きいらしい。

俺達は少し身なりを整えなおすと、果歩たちが待つ部屋へと向かった。

「やっと来たかあ！」

部屋へ踏み入れると、恭平さんや龍之介たちも居た。部屋の中心部分に口ウソクを置いて、それを囲むように円になって皆座っている。

「なんで、こんな座り方なんですか？」

俺は苦笑いしながらも、果歩たちに聞くと、どうやらこの座り方が定番らしい。俺に過去経験は無いから、そういうことさえも知らなかった。

「こんな風に怖い話をしようとか言い出すのって、どれぐらい久しぶりだろうね？」

美智子はワクワクした表情で、果歩と話していた。俺達は空いている場所に座ったのだが、いまだに始まる気配は無い。

俺は隣に座っている未来に、これからすることの大体の内容を教えてもらった。部屋の明かりを消し、口ウソクに火を灯したら、一人ずつ怖い話をするらしい。

怖い話を出来るような体験は俺には無い。だから話す内容も無いのだ。どうしよう、と未来に相談しようとしたとき、美智子が今まで明るかった部屋を闇へとかえた。その電気が消えると、さっきまで少しはしゃいでいた恭平さんまでもが静かになった。

果歩が口ウソクに火をつけると、じゃあ私から行くね。と言って果歩は話し始めた。

その話は、ある県の実山奥での話らしい。4人家族が老婆ちゃんの住んでいる山小屋を訪ねてみると、そこには誰もいないのだそうだ。夜も遅いということで、仕方なくその小屋で一夜を過ごすとしたある家族は、ある異変に気付く。少しずつ物の位置が変わっていつているというのだ。包丁を使っていないのに、いつの間にか流し台の中にあるとか、おばあちゃんの寝床だった部屋に電気がいつの間にか点いていたとか。

そんな内容の怖い話を果歩は話していた。それにしても、果歩の話し方は上手い。あまり怖いものとかには怖気つかない俺も、少し背中に冷や汗を流してしまった。隣に座っている未来と言ったら、もう泣きそうな顔で俺の服の袖を引っ張っている。

時計回りに回るらしく、次は美智子の順番らしい。未来は果歩の右隣に座っているということは、結果的に最後ということだ。

美智子の話も終わって、龍之介、恭平さんと回ってきた。次は俺の番だ。

ドキドキしながら、俺は少し前にキヨ爺から聞いた話を思い出す。確か夜の道路での話だった気がする。

「次は、悠君の番ね」

もはや司会役となった果歩にそういわれ、俺はゆっくりと口を開いた。

「俺の知り合いから聞いた話なんですけど…」

そついい始めると、みんなは俺のほうを注目し始めた。隣の未来は

ずっと俺の裾を引っ張っている。

「 県の夜の道路には、必ずヒッチハイクのお化けが出るらしいんです」

「ヒ、ヒッチハイク？」

恭平さんのその言葉に俺は相槌を打つと、話を進めた。

「俺の知り合いの男性が、その道路を走っていると、後ろのほうに何かいる気配がしたらしいんです。そして恐る恐るバックミラーで確認してみると、誰も乗っていないはずの後部座席に、顔を伏せてびしょ濡れの女の人が座っていたそうなんですよ」

俺がそういうと、恭平さんはびくつと体を動かした。

「その男性は、後ろを振り返るのが怖くて、そのまま運転していたらしいんです。だけど、そのままじゃ駄目だと思った男性は、もう一度バックミラーで後部座席を確認すると、誰も座っていなかったんです」

俺がそこまで言うのと、みんなほっと息を吐いたのが分かった。しかし、話はここから始まる。

「だけど！ ですけどすね、よく気配をたどってみると、なんと…助手席へと移動していたというんです」

そういうと、俺の左に座っている未来の俺の服を掴む力が強くなった。

「そして言われるんですよ。『地獄山までお願いします……』って……」

静かにそういうと、周りの空気が凍るような感じを俺は味わった。

「それに答えてしまったら最後。その地元の人のお話では、もう向こうの世界へと連れられていくらしいんです。そして、その知り合いは答えちゃったんですよ。その質問に……」

みんなの俺を見る視線がよりいっそう強くなった。

「『そんな地名ありましたっけ？』と……」

俺は軽くそう言い放った。

「は？」

恭平さんは意表を疲れたのか、軽く裏返った声で俺の顔を見てそう言った。

「まあ、何も無かったらしいですよ。何かあったら、この話は聞けていなかったですしね。そのまま無事に家に帰ったそうです」

俺は軽く微笑みながらそういうと、軽く笑い声が聞こえてきた。隣の未来は笑ってはいなかったが。多分、自分のことで精一杯なのであろう。

この後聞ける、未来の話に俺は胸を高鳴らせ、闇に乗じて未来の手をそつと握った。

#31 どこまでいったねん？（後書き）

誤字脱字の多さ、本当に申し訳ございません。
ただいま、推敲、修正のため少しずつですが、小説を読み返しております。

もしかすると、更新時間も遅くなってしまつ可能性が出てきますので、そのへんはご了承ください。

本当に申し訳ございません。

#32 俺を信じて

「あはは！！」

笑い止ることを知らない恭平さんは、大声をあげて笑っていた。

「も、やめて…」

俺の隣に座っている未来は、恥ずかしさのあまり俯いて顔をあげようとしなない。

未来の怖い話を聞いていた俺達は、正直本当に恐怖を感じた。俺もここまで冷や汗を流したのは初めてかもしれないというほどに。

だけど、今恭平さんは笑っている。それもそのはず、未来が一番盛り上がるところでかんでしまったのだ。その後も、カミカミ状態。

途中で恭平さんが笑い出して話は終わってしまった。

「ほ、ほんまごめんな！ わ…笑いが…」

そして、また恭平さんは笑い出す。

「もう、恭平さん。笑うのやめてあげてくださいよ」

俺は恭平さんに頼み込んだが、了承したのは口だけで笑うのをやめようとはしない。恭平さんいわく、止まらないそうだ。どこがそんなに面白いのか俺には分からないが、恭平さんのツボにはまったらいい。

「未来、気にすることないからな？」

俺がそういうと、未来は俯きながら少しだけ首を縦にふった。

それから数分、恭平さんもやつと落ち着いたのか、笑うことも無くなった。そのころには未来も元氣を取り戻していて、果歩たちと一緒に話していた。俺は龍之介とのんびりその光景を見ているだけ。これじゃあ、学校にいるときと何も変わらない気がするが。

そして時間が経ち、魔の時間は俺の元へとやってきた。

就寝時間だ。

恭平さんは、このままこの部屋で泊まればいいじゃんかあ！　と言っていたが、そこは果歩が却下。

そして、自然とみんなの足並みは各自の部屋へと向かっていく。

「…まあ、ベタっちゃあベタだよな」

俺はそう呟いた。部屋につくと、二つの布団が引っ付いて置かれているのだもの。いつの間に、宿谷の人が俺達の寢所をセットしてくれたのかは分からないが、この状況は昔からドラマや漫画でよくあるパターンだ。

「ほ、ほら！　こうすれば大丈夫だよ！」

未来は俺に氣をつかってか、引っ付いている布団をズリズリと離した。正直、俺は引っ付いていたほうが嬉しいのだが、理性が持つかどうか怪しい。そこが欠点だ。

「あ、うん」

俺は戸惑いつつも、布団のほうへと足を運ぶ。

「今日はもう寝ようか」

そう言うと、未来は軽くうなずき布団の中へと入っていった。俺もそれに続いて、自分の布団の中へと入っていく。それにしても、同じ部屋で好きな人が隣に寝ていると思うと、男の性なのか少し興奮してしまうところがあった。

「な、なあ！」

俺はこの緊張をほぐすために、未来へと話しかける。

「なにい？」

未来はもう何も気にしていないような声で俺に返事をした。

「今日、楽しかったな」

「うん」

そして、その会話も二言で終わり、俺達の間には再び沈黙が流れた。昔から話す事得意としない俺は、長話というものが苦手なのだ。特に話題を考えることについては。

何かしなくてはいけない、何か話さなくちゃいけない。

俺は理性を抑えるため、未来のほうに背を向けていた体を、そつと反転させた。

「未来」

俺がそつと名前を呼ぶと、向こう側を向いていた未来も恐る恐るこつちを見てくる。

「なにに？」

さつきとは少し違った上ずった声。

「一緒に寝ようか」

俺は冗談交じりでそういうと、未来は黙ってしまった。やつちまっただかと思つた時、俺の耳が、小さい未来の声を捉えた。

うん。

まさかそんな返答が来るとは思つていなかった俺は少し動転しながらも、未来のほうへと布団を寄せていく。何もしない。何もしないと自分に言い聞かせながら、俺は未来の隣へとついた。

「大丈夫、大丈夫」

俺は自分に言い聞かせるように、小さく呟いた。それが未来に聞こえていたのか、ぷつと笑う声が聞こえてくる。

「そんなに気にしなくてもいいよ」

笑い声交じりの未来の声。俺はその声で少し、ドキドキしていた心を少し落ち着かせることに成功した。

そんな安堵もつかの間、未来の温かい手が俺の手にそっと触れた。

「手、つなごつか？」

子供に言うかのように言われた俺は恥ずかしくなって顔を背ける。今の未来は小悪魔に見えてきた。

「悠？」

一方的に話す未来の声は、どこか優しい音を奏でている。その声は俺の心を安らかにしてくれた。

「私ね、悠の優しいところ大好きなんだよお」

ギュツと手を握るのが強くなった。

「ほら、怖い話をするとき、私の緊張をほぐすために、手を握ってくれたでしょ？ 本当に嬉しかったんだよ。まあ、最後は失敗しちゃったんだけどね」

あはは、と笑いながら未来は俺の顔を見てくれた。それと同時に、俺の中にひとつの疑問が浮かんできた。

俺は、こんな幸せを味わっていい人なのだろうか？

未来を騙しているのに、この笑顔を俺のものにしてもいいのだろうか？

「未来」

俺はそつと未来の背中に手を回した。未来の体が少し硬くなったのが分かる。

「何もしないから大丈夫だよ」

俺はニツコリと笑うと、未来も安心したのか体の力は抜けていった。

「聞いて」

俺は未来の耳元に口を持っていくと、小さな声で話し始めた。

「…俺を信じて」

不思議に思ったのか、未来は何かあったの？ と問いを投げ返してきた。

「何があっても俺は未来が好きだから」

俺はその問いを無視するかのように、言葉を放った。

「俺、未来が居ないと生きていけない」

けど、これ以上は何も言うてはいけない。今は、まだ早い。

「未来」

涙を堪えるかのように、俺は未来の名前を呼んだ。

「大好きだから」

未来を抱きしめる力が、知らぬ間に強くなっていた。

「ごめん、ごめんな…」

今まで言えなかった…いや、言ってはならないその言葉をそつと呟くと、未来は俺に何も聞かず、分かったと言って俺の背中に手を回し、そつと撫でてくれた。

「いいよ、無理しないで」

未来の優しい声は、俺の心の底まで届いて、再び安らぎが俺の元へとやってきた。

「私も大好きだからね」

そして未来は、少し俺の体を押しつけ、見つめてきた。

「ね？」

にこつと笑った未来の顔を、俺はもう忘れることは出来ないだろう。

俺は自然と未来の口元へ、手が伸びた。

「んっ」

親指で未来の唇を触った。未来の漏れる声、未来の笑顔、未来の全てが愛おしい。俺は手を頬へとずらし、顔を近づけた。

「未来」

俺は名前を呼び、キスをした。

罪悪感であふれるこの日々を、俺は耐え抜くことが出来るだろうか。

何もかも未来が知ったとき、俺は耐え抜くことが出来るだろうか。

そして、未来が居なくなったとき、

俺は生きることが耐え抜くことが…出来るだろうか。

#33 恭平さんは大丈夫

「悠」

俺は君を泣かさぬ事は出来ないのだろう。

「悠、起きてえ！」

君の笑顔を見たいのに

「起きてつてばあ！」

僕はまた君を泣かしてしまうのだろう。

「起きなきゃ、放っていくぞお！」

何故、俺はこんな事をしているのだろう？ ただ、笑顔を見たいだけなのに。

ここに居たいだけなのに。

「悠！」

さつきから、俺の体をグイングイン揺らしている彼女は、笑いながら俺の名前を呼んでいる。

「はあい」

俺はその幸せな時間を味わいながら、体をゆっくりと起こした。

「おはようのチューは？」

そういうと、未来は照れながら馬鹿つと声を張った。いつまでも、この時間が続けばいいのに。そう願うようになってしまった。

俺はゆっくり未来の顔へと近づけていくと、未来も観念したのか目を閉じた。

ドンッ！

「ほえあああ！！」

未来は驚いて、俺とは反対方向に飛びのく。また、この展開か。

「未来、悠君起きてるう！？」

元気よく俺達の部屋へと入ってきたのは、再び果歩だった。この前にも似たような展開があった気がする。俺はもう慣れたのだが、未来はそうでもないようだ。この前同様、未来は焦って果歩のもとへと近づいていった。

「また、お邪魔だったかな？」

ニシシと悪魔の笑みを見せながら、果歩は未来を無視して俺に聞いてきた。俺は丁寧に否定の言葉を放つ。

2日目の朝。俺達は慌しくも、楽しくなるはずの一日が始まった。

「今日は、何するんだろうね？」

果歩騒動で、少し時間は掛かったが、俺達は服を着替え終わり、廊下を歩いていた。果歩の話によると、宿谷の玄関付近に集合らしい。

「お、悠！」

俺達の前方、つまり宿谷の入り口からは、恭平さんの声が聞こえてきた。

「すみません」

俺と未来は、みんなの姿が見えると少し小走りになる。

「また、お前等が最後やないか！ イチャイチャしとんなよお。俺も果歩とイ」

そこまで言つと、果歩のパンチをお腹に食らったのか、喋らなくなつた。

「それじゃあ、行こうか！」

殴られて、喋れなくなっている恭平さんに代わって果歩が先頭を歩き出した。本日も昨日と同じ、何をするかを聞いていない。龍之介に聞いても、分からないという話だ。

「よし、着いたよ！」

歩くこと15分。俺達は目的地に着いたようだ。

「男共は用具一式借りてきて！ 私達は、食料の調達に行っているから」

果歩はそう言うと、女達を連れて何処かへと歩いて行ってしまった。

周りを見る限り、ここはキャンプをするところのようだ。用具一式をもってこいとは、どういうことなのだろうか？ 聞きたいにも、恭平さんは腹を押さえて喋りたくなさそうにしている。いつまで、そうしているんだと問いたいほどに。

「よ、よし行こうやないか…」

苦しそうな声が、俺と龍之介の背後から聞こえてきた。どうやら、もう喋れるようにはなっただらしい。

ゆつくりと歩く恭平さんの後ろを俺達はついていった。

「すみません…」

ある施設に入ると、恭平さんは受付のおじさんに話しかけた。すると、どんだん話は進んでいき、あつという間に誓約書まで持ち込んでいく。さすがは苦しんでいるとはいえ、龍之介の執事だ。

「よ、よし…悠はこれ、龍之介はこっちを頼む」

少し、さっきよりはマシな話し方になっている恭平さんの言つことを、キャンプに何も知らない俺は従うだけだった。

全てを運び終わり、ベンチで30分ほど待っていると、未来たちが姿を現した。

「おつまつたせー!」

そう言ったのは、もちろん果歩。恭平さんはその声で、すっかりと元気になったのか、ベンチに寝かせていた体をすくつと起き上がった。

愛の力は絶大と恋愛マスターに書いてあったが、本当にそのようなのだ。まあ、恭平さんがこうなったのは、果歩のせいなのだが。

「よっしゃ、準備に取り掛かるか!」

恭平さんはそう言って、タオルを頭にグルツと巻きつけた。

「悠、龍之介! 薪を持ってきてくれへんか? 俺は鉄板の準備とかしとくから」

「薪って…薪ですよな?」

「は? 他に何かあるっちゅうねん!」

盛大なツツコミを恭平さんから受けたが、薪というのは俺の知識によると、燃料になるものだ。たとえば、木を電動ノコギリで切り落とし、その丸太をさらに細かくしたものだ。

…その作業を、俺と龍之介にしろと言うのか!?

俺は困惑しながらも、龍之介の後についていった。どうやら、龍之

介はこういう行事を少なくとも一度はしたことあるようだ。だって、俺の知らないことを知っているから。

「これ」

そう言つて俺に渡したのは、小さくなつた丸太…というか木だ。

「これ？」

「そう」

そこは、少し離れた場所にある、前後ろに壁がない木を置く場所のようだ。どうやら、ここから火につけるための燃料を持っていって、もいいらしい。

「泥棒…じゃないよな？」

俺の問いに、龍之介は間髪をいれず頷いた。そして、俺達は薪を一人5本ずつぐらい持つて恭平さんの下へと戻る。

「これでいいですか？」

「おお、十分や！」

ニシシと笑いながら、ありがとなと恭平さんは呟いた。その後の恭平さんの動きに、俺達一同驚きを隠せなかった。食材をきるところから、全てを焼くところまで、何もかもを恭平さんがしたのだ。

女達には手伝わんくてもいいで！ と言つて席に座らせ、俺達にはもう用無いから、お姉さん達と楽しく喋つて来いやと言つてきた。

「よし、食べるか!!」

恭平さんが作った焼きそばが、そこには美味しそうに並べられていた。

「きよ、恭平すごいんだね…」

果歩は驚きのあまり、目を見開いていた。

「何や、ずっと一緒に居たのに、今更気付いたんか？」

軽く笑いながら、恭平さんはいただきますと言って、ご飯に手を伸ばした。

俺達もそれに続き、ご飯にありつく。そのご飯の味は、多分一生忘れることはないのだろう。美味しかった。ただ、それだけではない。本当に楽しかったのだ。

「どうや、美味しいやろ？」

恭平さんが皆に意見を求めると、皆はいっせいに頷いた。あのちゃらけた恭平さんに、こんな才能があるなんて考えられたのは俺と龍之介ぐらいだろう。だって、恭平さんが執事と知っているのは、俺達だけなのだから。

…そういえば、恭平さんは果歩に、職種は執事という事を言っているのだろうか？ それも、龍之介の側近ということを。

「恭平さん…」

果歩や、未来、美智子たちが洗い物をしているとき、俺は疑問に思ったこの質問を投げかけた。

「何や？」

「果歩さんは、恭平さんが執事だと言う事を知っているんですか？」

俺のその質問に、恭平さんは表情を固まらせた。

「え、何やいきなり…」

動揺を隠しきれていない。どうやら、果歩には言っていないようだ。

「ただ、知りたかっただけなんです」

俺は自分の好奇心を恭平さんにアピールすると、観念したのか真実を話し始めた。

「大学生って言ってるねん」

あはは、と笑いながら恭平さんの目は果歩の方へと行った。

「俺の職種は、ちよい特殊やろ？ あ、洒落と違うで？ 執事…なんて、ちよつと言えへんくてな…。別にやらしい仕事でもないのに、なんでやろ。昔から抵抗はあるねん」

恭平さんの悲しそうな目を俺は久しぶりに見た気がした。

「それに、あんまり都合の取れへん仕事やろ？ 余計に言いにくくて

な。しかも龍之介の。あ、これは変な意味とちゃうで？ …果歩にもいつかはいわなあかへんことは、知ってるんやけどな」

そついうと、恭平さんは俯いてしまった。

「恭平さん…」

そして、俺は恭平さんの言葉に胸を打たれた気がした。今の俺の状況と同じなのだから。いつかは言わなくてはいけないこの嘘を、抱え込んでいる辛さは俺もよく知っている。

「恭平さんは大丈夫です」

そう言うしか、今の俺には出来なかった。

#34 世界中の誰よりも

闇の中でバチバチと光を放つその火玉は、俺達にとって貴重な存在だ。夏の風物詩だと俺は思う。いや、世間一般的にもそうなのだろう。冬に店頭へと並んでいるのを見たことが無いから。

「うお、やつべえ！」

恭平さんの叫び声が、あたり一面に響き渡った。

今、俺達は花火をしている。恭平さんがどこから持ってきた大量の花火が俺達の傍に置いてあるのだ。

あのキャンプ場から少し歩いたところにある川。尖った石がゴロゴロとそこら中に落ちているが、靴を履いている俺達は怪我をする心配は無いだろう。

「悠もやろつよ！」

ちなみに、俺は花火さえも初体験だ。今までは学校の近くから、またはテレビで打ち上げ花火といわれるものしか見たことが無かった。

「おう」

俺は未来に呼ばれ、ニッコリ返事をする。と花火を手にとった。

恭平さんからライターを借りて、花火に火をつける…が

「あれ、つかねえ」

未来や恭平さんたちのように綺麗に火を放つことは無かった。

「え、悠…」

もしかして、の言葉が聞こえたとき、俺の周りは爆笑の嵐となった。

「は？ ちょっと教えてって！」

何で笑われている？ もしかして俺は希少価値なのか？

「悠、それ…反対！」

どうやらこの花火は、あまり目立たないほうに火をつけるらしい。俺のこの失敗は今日だけで3回目だ。丸い筒型の花火も、俺がつけようとしたら、恭平さんにあわてて止められた。あの花火は横から線が出ていて、そこに火を点けるらしい。俺は真上から紙を破ってつけるものだと思っていたのだ。

「もう…」

未来は軽く笑いながらも俺に近づいてきて、丁寧に花火の点ける場所などを教えてくれた。

「ね？ 点いたでしょ？」

未来のその言葉とともに、俺の持っている花火からは綺麗な赤色と黄色が混ざった光を解き放っていた。

「うおっ」

初めて味わった手荷物タイプの花火を俺はびっくりして手を離してしまいそうになる。

「ほら、見て！」

未来の聲がするほうに俺は目をむけた。

「こうやってすると、面白いんだよぉ！」

満面の笑みを浮かべながら、未来は花火を円を描くように振り回していた。

「未来」

俺がポツリとこぼした言葉は、周りに聞こえていないことを祈る。

「綺麗すぎ」

こんな言葉、未来以外の誰にも聞かれないから。

「ばかつ、悠！」

未来はあわてて、花火を回すのをやめてしまった。俺は未来の真似をしてまわそうとするが、俺が持っていた花火の光はいつの間にか消えていた。

「ほら、もう一本！」

未来から貰った花火に、今度は間違えないよう火を点ける。

「すげえ！」

俺は花火を振り回していると未来は、あははと楽しそうに笑ってくれた。どうやら、こうやってすると一瞬だが、俺達の目の網膜に光が焼き付いて残像が残るらしい。俺はそれを利用してハート型を描くと、またもや未来に馬鹿つと言われてしまった。

「次はこれね！」

俺の花火が消えるころに未来が持ってきた物は、ひも状のものを小さく平らに丸めたもののようなのだ。

「何これ？」

俺の不思議そうな質問を無視して、未来はそれに火をつけ地面に置く。

「え？」

俺の不思議な声とともに、その地面に置かれた花火は…俺を襲ってきた。

「未来！ たす…！」

地面を暴れまわっているその花火から逃げるように、俺は少し走ると、遠いところから未来の笑い声が聞こえてきた。その姿を見て、果歩や美智子も笑ってきた。

それから時間が経つにつれ、どんどん大量にあった花火は少なくな

つていき、残り数束となってしまった。

「これが最後か」

そう呟く恭平さんから、俺はひとつ小さな玉が点いた花火を貰った。それを皆に一つずつ配る。全員に配り終わると、花火はもうなくなってしまった。俺は未来の傍に行き一つの質問をする。

「何これ？ どこにつけるの？」

俺のその言葉に、皆は絶句。

「線香花火も知らへんのか！？ まじ、悠はどんな生活を送ってたねん！ これは花火の最後と決まっててな…」

と、そこから数分にわたって恭平さんの花火への愛情を聞かされた。

「あ、そうや」

その話が終わると、ぼそつと恭平さんは呟いた。

「これが最後の花火や。どうせなら賭けせんか？」

「賭け…ですか？」

「うん、賭けや。誰が最後までこの火玉を落とさずに残つとれるか
つちゅうな」

ニシシと笑うと、恭平さんは皆に一つライターを渡した。

「最初に落とした人が、最後まで残っていた人のことをどう思っているか川に向かって叫んでもらおうやないか」

「それは、男同士でも？」

果歩の小さな疑問に、恭平さんは当たり前やと答える。

「さあ、始めようや」

俺達は円になるように屈み、ライターに火を灯した。

「いつせえの！」

恭平さんが合図を送ると、皆は一斉に花火へ火を近づけた。

バチッと音を出して、俺の花火は火を放つ。周りを見てみると、ほとんどの人が俺と同じタイミングで火が点いたようだ。

「誰だろうねえ」

果歩がワクワクしながら、そう呟くと一人の男が早くも脱落をした。

「あ」

そう、俺だ。

どうやったら、長持ちをするか全く検討の点かない俺は花火を結構揺らしていた。まさか、こんな終わり方があるなんて。

「悠、ドベな」

いたって真剣な恭平さんは俺の顔を見ずに、そう言った。皆は自分の火玉に夢中になっている。

そして、一人ひとりと脱落して行き、残り二人となった。

「よし、じゃあ叫んでもらおうか」

恭平さんが俺の後ろでそう促すと、俺は大きく息を吸った。

まさか、こんな展開があるかよ。

そう心の中で呟いたが、現状は何も変わりはない。

「俺も一位になりたかったなあ」

恭平さんがそう呟くと、笑いながら果歩は、悠君に何か言われたか
ったの？ と呟いた。

龍之介は、少し大きめな石に腰掛けて、俺のほうを見ている。美智
子は残念そうな顔をして、悠さん頑張れ！ と叫んでくれた。

よし、行くぞ。

心の中で俺は覚悟を決めた。とっても恥ずかしいが、これは仕方が無い。賭けは絶対だからな。

「ほら、未来ちゃん後ろ向いて」

恭平さんの声に何も反応をしない未来。未来も相当緊張しているのだろう。言われたくなければ、わざと負ければよかったのに。

そう、一位になったのは未来だった。美智子とコンマ何秒差での勝利。負けた後の、美智子の叫び声は、本当にビックリした。相当一位になりたかったらしい。

「未来」

小さな声で川に向かって言うと、恭平さんからの怒鳴り声が入る。もっと大きい声を出せ、と。

それにしても、美智子じゃなくて良かった。

美智子だったら、何て言えばいいかわからない。それに、何も気にしていない振りをしているが、未来だって本当は美智子に少しなりと気を使っているのだ。

「いきます！」

俺は大声を張ってそういうと、あたりはしーんと静まった。

「俺は…俺は！ 未来のことが大好きだ！ 世界中の誰よりも愛しています！」

しばらく沈黙が続く。

俺のその言葉に涙した愛しい恋人は、小さくありがとうと呟いた。

#35 なあ、キヨ爺

「キヨ爺、お願いがあるんだけど…」

俺が唯一頼ることが出来る、キヨ爺に俺はしぶしぶ言葉を放った。
俺の真剣な面持ちに気がついたのか、キヨ爺は優しく接してくれる。

「どうしました？」

ニツコリと笑うキヨ爺を見ると、本当に俺の居場所だ、と実感してしまう。

「部屋…」

俺はボソツと呟くと、その次の言葉を放った。

「部屋をひとつ、借りてくれないか？」

「へ、部屋って…マンションの部屋ですか？」

キヨ爺の問いに、俺は頷く。少し悩む様子を見せるキヨ爺は、ふうと息を吐き分かりました、と答えてくれた。

「ありがとう！」

俺はその言葉がとても嬉しくて、キヨ爺に抱きついた。

俺が部屋を借りたいと思ったのは、未来が放ったあの一言のせいなのだ。

「悠、今度悠の家に行きたいなあ」

あの楽しかったキャンプが終わった数日後、未来の家で俺がゆったりしながら、ソファーに腰掛けているときだった。

「…は？」

思ってもいなかったその言葉に、俺は思わず言葉を漏らす。

「だって、悠のことあまり私知らないよね？ 悠は私の家に来てゆっくりしているけど、私だって悠の家で笑ったりしたいなあ…なんて」

あはは、と笑いながら未来は話しているが、俺は正直笑える状況ではなかった。

「で、でも！ 無理ならいいんだよ？ その…私に言えないこともあるもんね」

笑っていた声が、どんどん小さくなっていく。そんな未来を見て俺の家に来ることを拒むことが出来るわけない。このときは、何も案が浮かんでいないのに、肯定の意を示してしまった。

「え、本当！？ やった！」

「あ、ああ…」

そして、その日はここで帰宅という形になった。

まあ、今となって考えてみれば、完全に俺の失態だった。もちろん、今俺が住んでいる家を見せるわけにはいかない。そんなことをしたら、全てがバレるから。

かといって、今更未来に断りの電話を入れる勇気も俺には無い。

結局、何も出来ない俺が頼ったのは、キヨ爺だった。

「ところで、お坊ちゃま」

抱きついていていた俺に、キヨ爺は話しかける。そっと離れて、キヨ爺の顔を覗くと俺は何？ と答えた。

「お部屋の大きさはどうでしょうか？」

「ん、2LDKより小さいのがいいな」

未来の部屋が2LDK。それよりも小さく言ったのは、未来より部屋が大きかったら、俺の親について色々聞かれると思ったからだ。

「かしこまりました」

そう言っただけニッコリ笑うと、キヨ爺は何かへ行こうとする。そんなキヨ爺を俺は呼び止めた。

「どうなされました？」

「親父には…」

そこまで言っただけ、キヨ爺はニッコリ笑い、かしこまりましたと答えてくれた。

「あ、あと！」

何度もキヨ爺を呼び止める俺。

「北区内にしてくれないか？」

俺のその言葉にニッコリ微笑んで、キヨ爺は何かへと行ってしまった。

北区を選んだのもちゃんと理由がある。初めて未来に会ったとき、未来は西区と言い、俺は北区と言った。そこに矛盾をしてみれば、何かと聞かれるかも知れない。とりあえず、俺の家柄について質問をされることは極力避けたいのだ。なんと答えるか、何を答えれば

いいのか俺にはさっぱり検討がつかないから。

次の日、キヨ爺の思い切った行動は俺を驚かせた。

「お坊ちやま、起きてください」

夏休み、キヨ爺に起こされることは、あまり無いのだが、今日はどうやら違うようだ。

「ん…どうした？」

「出かけますので、準備をよろしくおねがいします」

キヨ爺のその言葉に、何かいつもと違う物を感じた。ずっと体を起き上がらせると、俺は服を着替える。

「よし、どうした？」

俺がキヨ爺に質問をすると、辺りを一度見てからキヨ爺は俺の耳元で「引越しの準備が出来ました」と言ったのだ。

まさか、昨日の今日でそれを行動に移すと思っていたいなかった俺は、驚いてしまった。恭平さんも、キヨ爺も、どうして執事というものは、全てにおいて行動が早いのだろうか。

「行きましょう」

俺が黙ってキヨ爺を見ていると、キヨ爺はニッコリ笑ってそう言う

た。俺は軽く頷く。キヨ爺が運転する車に乗ると、目的地へと向かった。

「で、どんな所？」

聞くところによると、2DKらしい。まあ、それぐらいが妥当かな。さすがはキヨ爺。俺の思い通りに全てを運んでくれる。

キヨ爺と他愛もない話をしていると、目的地に着いた。

「いい所じゃん」

マンション7階建ての6階にある俺の部屋は、周りに高い建物が無いため眺めがとてもよかった。

「ありがとう、キヨ爺」

そして、驚くことにその部屋には冷蔵庫からテレビまで、一人が普通に生活できるほどの生活用品が並べられていた。

冷蔵庫を開けてみた。まあ、うん。ここまで想像はしていなかった。そこには、いかにもここに住んでいますよ、と言わんばかりの食材が置いてあった。

「すげえ、キヨ爺」

思わずキヨ爺の名前を呼んだ。キヨ爺は謙虚にいえいえと返事をしたが、並大抵の人間にはここまで再現できない。長年生きてきたキヨ爺だからこそ出来る業だ。

「本当に、ありがとう！」

「いえ、お坊ちゃまのためならなんなりと」

これなら、未来を呼んでも大丈夫だ。キヨ爺のことだから、もっと細かい部分まで偽装してくれているのだろう。

ここまでは、俺の心は喜びに満ちていた。この後、あんな出来事が起こると思わなかったから。

俺はキヨ爺にお礼を何度も言いながら、マンションを出た。

車の中、ふと思い出す。確か、ノートがもう無かったと。俺はキヨ爺をお願いをして、駅前のデパートへと向かった。キヨ爺は、私が買ってきますと言ったが、全てをキヨ爺に任せるわけにはいかない、と俺は言い放った。

そして、俺は後悔する。

自分のこの行動の過ちを。

何故、気付けなかった。

今日は土曜日。

夏休みのせいで曜日感覚が狂っていたせいか、俺は気付けなかった。
土曜日の駅前のデパートには、ほぼ毎週未来が来るってことを忘れていたのだ。

「キヨ爺、これ…」

そして俺がノートを選び、振り返ったときだった。

キヨ爺の「はい」という声。その後ろには、俺が今は見てはいけない人物の姿。

俺の愛しい未来の姿があった。

「悠？」

驚きの表情を隠しきれない未来の表情を俺の瞳は捉えた。

「未来…じゃん」

俺はニッコリと固くなりながらも笑うことが出来た。

「なんで、ここに…？」

未来のその問いに、俺はすぐ答えることは出来なかった。

少しの沈黙の後俺はゆっくりと口を開く。

「えっと…ノートが欲しくて」

嘘を言える場合じゃなかった。別に、ノートを書くことについて嘘をつく必要はない。

「この人は…？」

やばい。

この質問は、今の俺に強烈な焦りをもたらした。キヨ爺は多分、未来のことを書類上でしか知らない。なんと言いつてもいいのだ。

俺の回転はフル回転しながらも、今の状況に追いついてはいなかった。そんな時、キヨ爺は口を開く。

「私は…」

キヨ爺、早とちりしないでくれ！

「悠の祖父です。貴方が、未来さんですか。よく悠からお話を聞かしてもらっているんですよ。とってもいい方だって、私に自慢して

くるほどに」

あはは、と笑いながらキヨ爺は俺のほうを向き、なあ悠？　と言ってきた。

「ああ」

何かを考えるよりも先に、キヨ爺の言葉に合わせるかのように口が動いた。

「そうなんですか！　お恥ずかしい限りです。私、諸戸未来と申します。悠のお爺さんでしたか。いつも悠さんにお世話になっております」

未来は丁寧に頭を下げた。

しかし、俺の頭は今の状況にさっきよりも追いついていない。何かなんだか分からなくなっていた。

なあ、キヨ爺。

何で悠の名前を知っている？ 何で誤魔化した。

俺と未来の関係…俺が嘘をついていることを親父は…知っているのか？

もはや、頭の中はパンク寸前だった。

#36 俺を裏切らない

未来とデパートでさよならの挨拶をした後、俺とキヨ爺は車へと足を向けた。パニックになりながらも、しっかりとノートは手に入れることは出来た。

だけど…

キヨ爺への疑問が、俺の中から拭えない。

いつ知ったのだ？

どうして、知っていることを俺に教えなかったのか？

よく考えてみれば分かることだった。何でキヨ爺は冷蔵庫にまで、あんな細かい工夫をしてくれたのか。

知っていたからだろ。俺のことを、悠のことを。

最近未来の温もりに浸りすぎていた俺の頭脳は、少し麻痺にかかっていたようだ。前までの俺なら気付いていたはずだ。

駐車場へつき、車の前まで行くとキヨ爺が後部座席のドアを開けた。俺は何も言わず乗り込む。

車を走らせること数分、重苦しい空気の中俺は思い切って口を開いた。

「キヨ爺」

なあ、キヨ爺？

「何で“悠”のこと…知っているの？ 未来との関係を何で知っているの？」

俺のその問いに、キヨ爺は何の迷いも無く答えた。俺が今日のご飯は何？ と聞いているかのように。

「書類上で確認いたしました。私は、今回未来さんを見るのは初めてです。お坊ちゃんへの反応、そして“未来”と呼んだことにより、私は彼女を“悠”の彼女と確認したわけです」

その言葉を聞く限り、俺の近辺を調べたのはキヨ爺ではなさそうだ。それよりも問題がある。

親父だ。

「“悠”のことは…親父知っているのか？ 俺の…その…目的も知っているのか？」

その問いに、キヨ爺の顔が一瞬曇ったのを俺は確認することが出来た。

「……」

黙っているキヨ爺に俺は苛立ちが増した。

「書類で見たって言ったろ！ ということは、親父は知っているんだろ！？」

「…いいえ」

まさかの答えだった。

「お、親父は、本当に知らないんだな？」

俺は最後の確認をとった。ここまでして、キヨ爺が嘘をつくわけがない。俺は、キヨ爺を…信じているから。

「はい」

本当に親父が知らないなら、ここで疑問がいくつか浮き上がる。何故キヨ爺は知っていて、親父は知らないんだ？ 親父は、俺が未来と付き合っていることを知っていることは確認済みだ。

…親父は、書類をしっかりと見ていなかったのか？

俺が悩んでいるとき、キヨ爺はお坊ちゃまと呟いた。

「何？」

「お坊ちゃまの周囲の状況を調べるように言ったのは、私でございます」

その言葉を聞いた俺の心は時が止まったかのようにだった。

「え…なんで…」

キヨ爺は知っているはずだ、俺について調べられることを俺が嫌っ

ているというところを。それなのにどうして？ どうして、キヨ爺は俺を調べた？

「私も仕事でございます。申し訳ございません」

「仕事…」

キヨ爺が、俺を…。

「なあ、キヨ爺」

泣きそうな心を抑えながら、俺は言葉を放つ。

「俺が嫌いなのを知っていたよな…？」

キヨ爺ははっきりと『はい』と答えた。

「仕事だから、俺を裏切って…いいのかよ！」

その言葉を吐いた後、俺の目からは涙が一つ、二つとこぼれた。

本当に悲しかった、心が痛かった。キヨ爺は、俺のことを一番に考えてくれていると思ったのに、大事にしてくれていると思ったのに、

キヨ爺だけは俺を裏切らないって…思っていたのに。

「お坊ちゃま」

俺の声が震えているのを知っているのに、キヨ爺は俺に話しかけてくる。

「何だよ！」

俺は声を張って、返事をした。そして、キヨ爺は言葉を発する。思わぬ言葉、そして、俺の心を動かすようなことを。

「お坊ちゃまは、未来さんに同じことをしているのではないですか？」

「え？」

「未来さんは自分を一番大切にしてくれていると思っている貴方に、名前も、住所も、年齢も、近づいた目的も…全て嘘をついているのではないですか？」

「な、にが言いたいんだよ」

そこまで言われて、気付かない俺ではなかった。だけど、見たくなかった。自分に良くない方向に向いていつているから。

向き合いたくなかった。

「しっかりと、考えた上で行動してみてはいかがでしょうか？」

さつきまでの威勢はどこに行ったのか。それほどまでに、俺の心はどん底へと落ちて行っていた。

車を降りるとき、一言キヨ爺に謝ると、ニッコリとキヨ爺は笑ってくれた。

キヨ爺の言うとおりだ。俺は今、キヨ爺がしたことと同じことをしようとしている。

いや、している。

未来を裏切っている。一番大切な人物を。

だけど、だけど……止まることはできない、もう戻れない。選択肢は進むしかないんだ。ここまでできてしまった。

部屋に戻ると、俺は何故かまっさきに未来へ電話をした。今、動揺しているのに、俺としては冷静ではない判断だ。

「未来」

ぷっと言っ音と共に、むこうからは未来の声が聞こえてきた。

「今日、びっくりしたよな」

あはは、と笑いながら俺は未来に話しかけた。未来はいつもと変わらない声で答えてくれている。

「なあ、未来」

「なにい？」

「未来は俺のこと信じているんだよね」

何を聞いているんだ俺は。

「当たり前じゃない！ この前だって、信じてって言っていたよね？ 悠、何かあったの？」

「俺も未来のこと信じているよ」

未来の問いには答えずに、俺はそう言った。ありがとう、と電話の向こう側から聞こえてくる。

「いつ、家に来る？」

俺は軽く明るい声でそう言った。そうでもしなきゃ、俺の声はどんな音を上げていつてしまう気がするから。

「明日がいい！」

未来の元気な声が聞こえると、俺は笑って分かった、と答えた。

そして、それから未来が今日デパートであつたことを淡々と話してくれた。どうやら、俺達と分かれた後、果歩たちに会ったらしい。

俺はそんな話を聞きながら、涙が零れ落ちてきた。さっきの言葉、俺を信じているというものを思い出していたから。

「悠、泣いているの？」

不意に話を止め、俺に聞いてくる。やべ、声が泣いているように聞こえたのか。

「泣くわけねえだろ」

未来に心配されると、余計涙があふれ出てくる。止まることを知らないこの涙は、俺の頬を伝って下へと落ちていった。

「どうした…の？」

何の予兆もなしに泣いている俺を聞いている未来は不思議に思うだろうな。

「いや、未来に会いたくて」

本当のような嘘のような言葉を俺が言くと、恥ずかしそうな未来の声が返ってきた。

「あ、明日会えるんだから！ ちょっと我慢しよつ。私も、悠に会いたいんだから」

「うん、分かった」

その後、少し喋って電話は終わった。電話からはプープーと言う悲しいメロディが流れてくる。

そして、俺は切れた電話に話しかける。未来、俺は謝っても許されないことをしているんだ。ごめん、俺を嫌いにならないでくれ。俺は未来を愛しているから、と。

俺のその届かない言葉は、
苦しみを増やすだけだった。

#37 今のみの幸せ

「ここが、悠の家かぁ」

未来は、俺の部屋に一步足を踏み入れた。

「狭いだろ？」

俺が軽く笑いながらそういうと、あまり私の家と変わらない大きさだよ、という言葉が返ってきた。

昨日、俺はちゃんとキヨ爺の所へ謝りに行った。キヨ爺は快く許してくれたが、俺はこの一番愛おしい人には許されないのだろう。

まだ、俺の正体を明かすつもりはない。出来れば、最後までこのままでありたい。けど、多分そう上手くはいかない。俺が“悠”であり続けることは、不可能だろう。

お金はある。戸籍や保険証、パスポート、その他全てのものは、お金を使えばなんとかなると思う。だけど、一番の問題は俺の心だ。

未来に嘘をつき続ける。

不可能に近い。ようは慣れだ、という言葉をよく聞くけど、これは慣れない、慣れてはいけない。大好きな人に嘘をつき続けること。このままでは俺の心が壊れてしまう。

「どうしたの？」

玄関で俺はぼんやり考え込んでしまっていたようだ。

「ごめん、ごめん！　ちょっと、何か買い忘れたものが無かったか考えていたんだ」

「大丈夫だよ！　悠は心配性だなあ。もしかしてA型？」

「正解だよ」

「私はO型なんだよ」

そんな他愛もない話を俺達は少し続けた。今日の夕飯は、ここで未来と一緒にご飯を食べることになっている。しかも、未来の手作りだ。

「楽しみだなあ」

俺の家のキッチンで、トントンと音を立てながら包丁を扱っている未来を見ながら俺は声を漏らした。

「ちょっと、あまり見ないでよ！」

ぷうっと頬を膨らましてこっちを振り向いた未来。

「沸騰してる」

俺はそんな未来にそう言っつて、鍋のほうを指差した。あわてて未来は火を消して、あぶなかつたあと呟いている。そんな未来を見ると俺は笑みがこぼれた。幸せだ。こんな、

「こんな日が続けばな…」

つい、思ったことが言葉に出てしまった。

未来は沸騰事件に慌てていて、俺のこの言葉に気付いた素振りはない。

俺はそつと立ち上がって、料理をしている未来のほうへと近づいていった。未来に気付かれないように、後ろから何をしているか覗くと、キャベツを切っているようだ。

そして、俺はゆっくり未来を抱きしめる。

「きゃっ」

びっくりしたのか、未来の声が漏れた。

「な、なななな何!？」

俺の突然の行動に驚きを隠せていない。そんなところがまた可愛いのだけれども。

「ん、未来ってあつたけえ」

夏休みというこの時期に、こんなこと言うのもおかしいと俺も思う。だけど、俺はこの未来の温もりが大好きなのだ。

「もう」

未来は大きく息をはくと、優しい声で俺の名前を呼んだ。

「ん〜？」

俺は未来の肩に顔を擦り付けるようにしている。すると、未来のお腹辺りに置いた俺の手には手の柔らかな感触を感じた。

「私、こうしているのも幸せ。悠と一緒に居るの幸せだよ」

「俺も幸せえ」

泣きそうになった。声が少し震えていたのかもしれない。甘えるように言っただが、うまく言えてなかったかもしれない。

「悠っ」

名前を呼ばれたと思ったら、未来は振り返って俺を抱きしめた。

「み、未来？」

普段なら考えられない未来の行動に俺は驚いてしまった。そんな彼女は、俺の心拍音を上げるかのような、天使の笑みを俺に見せた。

そして自然と、俺の口は未来の唇を捕らえる。

「もう一回！」

未来の要望に答え、俺はもう一度キスをした。今度は少し長い。

「ふはぁ」

キスが終わると、未来のよく分からない息の漏らし方を聞いた。そんな未来が愛おしくて、俺は頭を軽く撫でる。

「それじゃあ、ご飯作ってくるからそっちで待っててね！」

未来の言葉に俺は軽く頷き、元の場所へと戻っていった。

料理をしている未来の後姿を見る。多分、俺は夫として、家族としてこの後姿を見ることは無いのだろう。

今だけ、今のみの幸せだ。

本当はそうじゃないと願いたい。今だけだなんて考えたくない。

「未来」

俺は小さな声で未来の名前を呼んだ。

「はいっ！」

未来は大きな皿に盛ったサラダ、そしてご飯と味噌汁、その他のおかずを俺の前に置いた。

「上手そう……」

それはお世辞ではなく、心の底から漏れた言葉。目の前には未来と一緒に、お箸を持って、食べる準備をしている。

「ありがとう！」

未来はニツコリと笑うと、いただきますと呟いた。それに続き俺もいただきますと呟く。

一口、おかずを口の中へと運んだ。

「美味しい。未来、本当に美味しいぞ！」

ニシシと、声に出しながら笑っている未来を見て、俺は箸が進んだ。いつも一人で食べている夕食とは違い、未来と一緒に食べているからかもしれない。本当に美味しかった。幸せを感じた。未来の温かさをこの料理に感じた。

何もかもが俺には幸せに感じて、気付くころには目の前にあったはずのご飯全てがなくなっていた。

「早っ！」

「美味しかったからなあ」

俺は未来に笑ってそういうと、未来も一緒になって笑顔になってくれた。

「未来、おいで」

ご飯を食べ終えた俺は、未来の温もりが欲しくなって未来を呼んだ。未来はご飯中だからと言ったけれども、お構い無しに俺から未来へと近寄った。

もう、と未来は言っていたが、なんだかんだ嬉しそうだ。未来の後ろに回ると、俺はぎゅっと未来を抱きしめた。

「食べるにくいでしょ！」

「気にしない、気にしない」

俺はそう言って、未来の肩へと顔を下ろし目を瞑った。

「未来」

「何い？」

「…大好きだよ」

その後、未来は何を言ったのかは分からなかった。俺は、未来の温

もりに負け、
昨晩あまり眠れなかつた体を睡眠というものに預けた
から。

#37 今のみの幸せ（後書き）

更新遅れてしまい申し訳ございません。

#38 信じていいんだよね？

終わることがなければと祈るほど、その時間は短く感じる。

笑顔で満たせばいいと

幸せで満たせばいいと

「大将君」

そう、思っていた夏は終わった。

「はい」

学校が始まって早3日が経った。一日目から授業が始まるというこの学校、これからはテスト三昧の日々になるだろう。

「それじゃあ、授業始めるから教科書開いて」

未来はいつものように元気な声で、生徒達に向かって言った。

夏休み、俺と未来は充実すぎる生活を送った。これからはあまり会えないね、なんて夏休み最終日に未来が言っていたのをふと思い出す。

この学校は生徒はもちろん、それに合うように生活をしている先生達も大変なのだ。テストがいっぱいあるということは、その分テストを作らなきゃいけないということ。

ちなみに、昨日もテストがあつた。

もちろん、夏休み中にそのテストを作っていたから、俺はいつものように罪悪感と戦いながら、テストの内容を覗いた。

なあ、未来。

もし、現実を…真実を知ったとき、お前は俺を恨むのか？

笑つてはくらないよな？

俺のそばに…居ては…

「あと一カ月後には、二学期の中間テストがあるから、勉強するんだよお！」

授業の終わり間際に、未来は壇上の上でそう言った。

誰も返事はしないが、その代わりに教科書を閉める音が教室内に響く。

「じゃあ、授業終わり！」

いつものように元気な声で未来が言った後、委員長が起立と声をかけた。

休憩時間、いつもポケットに入れている携帯の振動が足へと伝わってきた。

「ん？」

こんな時間に電話が来るなんて、めったに無いことだ。そんなことを思いながら俺は携帯のディスプレイを見ると、諸戸 未来と表示されている。

「もしもし？」

何があつたのだろうか？ いきなりの電話だったので、教室で通話ボタンを押して廊下へと出た。

「悠っ！」

ハキハキしている声が、俺の耳の中へ届いてきた。

「どうした？」

「あのね、来週の土日は学校から休みを貰えたから、遊びに行かない？」

「お、本当か？ よかったじゃん。遊びに行くかあ」

俺は嬉しくて、つい頬が緩んでしまった。

「うん！」

未来も相当嬉しいのか、いつもよりテンションが高い気がする。

「じゃあ、私授業あるからまた後でね！」

「おう」

俺は携帯から耳を離すと、教室の中へと足を進ませた。

このとき

俺達は

幸せだった

…かもしれない。

金曜日、何も知らない未来にある一通のメールが届くまでは。

そのとき俺は来週の土日、未来と一緒に居られる喜びを表に出さないように押さえるので必死だった。

そして、今週の土曜日。

「どうしたんだ？」

昨晚、俺の家がいいと、いきなり言い出した未来を俺は快く受け入れた。

だけでも、さっきから未来の様子がおかしい。

「え、えへへ！ なんとなく悠の家でゆっくりしたかったの」

ニシシといつもより少し元気が無いようなきがする未来はそう言った。

「そ、そっか」

何も聞かないほうがいい、何かショックなことがあったに違いない。

「ゲームする？」

俺の問いに、未来は首を横に振る。

「ゆっくりしたいな」

あはは、と笑いながら未来は俺の顔を見て言った。俺はそんな未来を心配に思い、少し近寄る。

「みく」

俺はできるだけ笑顔を作り、未来の頭に手を乗せた。そして、ただ無言で頭を撫でる。

「むう」

未来がそう言つて、拗ねた格好をするが、こうやってすることを未来が望んでいることを俺は知っている。

何か悲しいこと、辛いこと、大変なことがあったとき、未来にこうやってするといつも笑ってくれるからだ。

そして、今回も未来は…

「み、」

俺はそこで言葉を発するのを止めた。いや、発せなくなった。未来が俺の口を口で塞いだから。しかも、いつもより長いキス。

「ふぁ」

キスが終わると同時に、未来の吐息が漏れる。

「どうしたんだよ？」

あまりの出来事に、俺は慌てて未来にそう言った。

「びつくりした？」

ニシシと小悪魔のような笑みを浮かべている未来は、少し悲しそうな表情をしていた。そして、俺は次の言葉に冷や汗をかくこととな

る。

「私、悠の事信じていいんだよね？」

「え」

「だよね？」

「あ、ああ」

いきなりどうしたんだ。

「……」

未来は黙って俺に抱きついて、覆いかぶさってきた。

「未来？」

何を言っても、無言を突き通す未来。

それからもう何分経っただろうか？

「温かい」

未来は俺の胸の上でそう呟いた。

「未来」

俺はそっと抱きしめる、何があったのかは知らない。ただ、抱きしめたくなった。

だって、未来が泣いているんだから。

「落ち着いた？」

少し時間が経ち、俺は無言だったこの部屋で呟く。

声は聞こえなかったが、首をカクンと縦に一度振ったのが分かった。

「何かあったの？」

もう一度聞いてみる。未来は俺の顔を見上げて、軽く微笑みながら首を横に振った。無理しているのが見え見えである。

しかし、そんな未来に何をしてあげられるわけでもなく、俺はただ抱きしめるだけだった。

深く深く考えればわかるこの涙の真相を俺は数時間後知ることになる。気付いていれば、深く考えていればと今までも何回も思ったのに、何一つ学べていなかった俺自身を後悔することになった。

「じゃあな」

日が暮れると、未来は自分の車に乗って帰っていった。俺はその姿を見送ると、自分も帰る準備に取り掛かる。

荷物を全て持った後、俺はキヨ爺に連絡をし、迎えにきてもらうようにいった。電話から数分後、キヨ爺の車に乗って俺は実家へと向かう。

俺の家の庭は龍之介の家ほどでかくないから、門の前で車から降りる。そのとき、俺の背中に電気が走った。

「な、んで？」

その声の持ち主は俺ではない。

「信じて…いいんだよね？」

紛れも無くその声は未来のものだった。

#38 信じていいんだよね？（後書き）

更新遅れてしまい、申し訳ございません。

19日がテストなのと、一ヶ月ほど前から家が少し大変になったせいで、小説にあまり手をかけられませんでした。

これからは少しでもペースがあがるかと思っています。

そういえば、知らぬ間に10話をきっていました。
完結まであと少し。最後まで付き合っていただけと盗鬼は感動しています。

#39 ナゼ、彼女ガココニ

「未来…？」

ナゼ、彼女ガココニ？

俺の頭はもう、パニック状態だった。

「ここって…」

「え、いや」

何を答えて言いのかわからない。今は“紺野 大将”の家なのだから。

「昨日…私のところにメールが来て」

未来はそれだけ言うと、ぱかっとう携帯を開き俺に見せてくる。そこには、堂本 悠のことが事細かく書かれていた。俺が偽名を使っていること、ここに住んでいること。確信である、俺が大将ということとは書いていないことが、唯一の救いだ。

しかし、今日ここに来れば全てがわかると記入されていた。誰が、送ったんだ？

「しかも…ここ…」

俺がパニックになっていて黙っていると、未来はそつと口を開いて家を見渡した。

「確か…大将君の」

家だったようなまで言ったとき、俺の背中には冷や汗が流れた。しかし、俺が冷や汗を流したのは、未来の言葉のせいだけではない。

自宅から親父が出てきたからだ。

「おや…」

その姿を見て、ボソツと口が動いてしまった。

「先生ではございませんか！」

俺の動揺を知っているのか知らないのか、俺の親父は家の者には決して見せないような笑顔で先生を出迎えた。

「いつも、こいつがお世話になっています」

親父は俺の横まで来て、俺の頭をくしゃくしゃとしながらそう言った。その言葉に、俺と未来はもちろん、キヨ爺までもが凍りついたように固まっていた。

未来は口をパクパクとしながら、俺の顔を見たり親父の顔を見たりしている。

「え、それは…」

「“大将”は学校でどのような子でしょうか？」

親父は何も変わらないように、悪魔の姿を隠したその笑顔で決定的な一言を言い放つ。気がついたときには未来の瞳からは涙がこぼれていて、俺は未来の名前を叫んだ。

「え、どういうこと…え？ や、やだ…やだ！」

未来は一步一步俺から離れていく。俺は未来を追いかけるかのように、小走りで近寄った。

「み、未来、違うんだ…」

「来ないで！」

未来の張り上げる声。その声は、周りの家までに聞こえていたのか、ざわざわと人が小さい声で話す音が聞こえてくる。その雰囲気になんて耐えられなかったのか、俺と一緒に居なくなかったのか、未来は走って行ってしまった。

追いかけようとする俺。

しかし、その行動をとめたのは、親父だった。

「大将」

未来と話するときとは違う、親父の渋い声。

「どうだ？ アメリカに行く気になったか？」

俺の顔を一切見ようとはせずに、家へと戻ろうとした親父。そこでかなりの違和感を覚えた。

今、未来は泣きながら走っていった。

その行動に対して、どうして親父は不思議と思わない？

「まさか…」

そういえば未来は言っていた、昨日届いた不審なメール。内容は、俺の近辺にいる人物しか知りえないことだった。

それに、あのタイミングで親父がここに出てきたこと。

最後に…俺に向けたあの言葉。

気付けば俺は振り返って、『親父』と叫んでいた。

「何だ？」

振り返るその顔には、何も悪気の無い表情。

「お前、お前！」

もはや感情が抑えられる領域ではなかった。未来は俺の心の支えだった。誰よりも好きだった。好きなのに

「どうして、こんなこと！」

涙声になりながら俺は親父に問いかける。こんなことは初めてだろ
う。

「…勉強する気になったか？」

俺のこんな乱れた態度を見るのを親父は初めてのはずだ。なのに、そんな冷静に対処できるものなのか？

「お前、ぶっこ」

そこまで言って、今まで黙っていたキヨ爺が止めに入った。

「離せ！ 俺は、俺は！」

親父の下へ行こうとする俺を、必死に押さえつけているキヨ爺。さすがは、執事といったところか、抑えられた俺は何も出来なかった。

「離せよ…俺は……くそっ！」

涙は絶えなかった。親父の前では泣くまいと決めたのに。こんな悔しいとは思ってなかった。

「お坊ちゃま」

「離せよ、離せ！」

一度乱れた俺の心は、静寂を取り戻そうとはしていなかった。

「いつかはこうなっていたんです！」

キヨ爺の叫ぶ声。

その声で、俺の力は一気に抜け、死体のようにその場で横になって

いた。そんな俺を、数秒間見つめたキヨ爺は、いつもの笑顔に戻り、俺を背負って部屋へと運んでくれたのだ。

「どうしょ…」

部屋に着くと、何度も携帯が鳴り響いた。

ディスプレイすら見る気すらないが、多分恭平さんだろう。

動転した未来が、果歩に言って、果歩から恭平さんに渡ったところだ。

未来…。

心の中で、俺はその名前を呼び続けた。

全てが、終わったのだ。

全てが。

「はは…」

自分のこの状況がおかしく思い、俺は何故かベッドの上で笑っている。

「あははははは！…！」

おかしかった、本当に…。

自業自得だ。

「はは…」

数分間笑っていた俺も、無性に悲しくなってきた、その声はいつしか泣き声と変わっていた。

「未来…未来…」

涙を堪えることを知らない、赤ちゃんのように俺は泣き続けた。

月曜日。

学校が再び始まる。

俺は行きたくなかった、未来の顔を絶対に見るから。それは避けて

通れない道だった。

だけどキヨ爺は無理やり俺を起こし、無理やり学校へと向かわせた。家を出るとき、一瞬親父の顔が見えたが、もはや怒鳴る気力もなくなっていた。

何も言わず、俺は家を出てキヨ爺に学校まで送って行ってもらった。

校門前で降ろされ、キヨ爺は去っていった。そのとき帰ろうかと迷ったが、ここまで来て帰るほど俺も馬鹿ではない。

仕方なく、足を校舎へと運ばせた。

校内に入ると、俺を待っていたのか、そこには龍之介が立っていた。

「大将」

いつもと変わらない声で俺の名前を呼ぶ。そんな龍之介には悪いが、俺は笑う気力さえ失っていた。

「大将」

「どうした？」

俺は比較的いつもと同じように言っただけだったのだが、やっぱり上手く言えていなかった見たいだ。

「ごめん、龍之介」

なんだが悲しくなり、突っ立っている龍之介の横を通って、先に教室へと向かった。

教室に着き、いつもと変わらぬ生徒の雰囲気の中を通り抜け、俺はいつもの場所へと足を運んだ。

そこは、教壇の前、一番未来と近い場所。

ゆっくり腰を下ろすと同時に、非常なほどまでに俺の心を焦らす、一番聞きたくない学校の始まりの音、チャイムが学校中に鳴り響いた。

#39 ナゼ、彼女ガココニ（後書き）

#40 衝撃的な映像

俺は、どうすればいい？

恋愛完全マスターにはどう書いてあった？

確か原因を対処しろと書いてあったはずだ。

原因？ 俺の行動だろう。

それを対処したところでどうなる？ 今更…。

俺はもう取り返しのつかない事をしてしまった。愛する人を裏切ってしまった。

裏切った相手に対する対処方法、恋愛完全マスターにはどうすればいいと書いてあった…？

ガラッと、ドアは開いた。

龍之介はいつの間にか俺の後ろにいる。俺が気付かなかっただけで、ずっと俺の隣に居たのかもしれない。

「はい、皆さん…」

一瞬、俺と未来は目が合った。

「席について…ください」

未来が言い終わるころには、皆自分の席に戻っていた。そこで『あら、皆もう座ってるね！ さすが優等生だ！』と元気よく言うのがいつもの未来なのだが、さすがにそんな気分では無いようだ。

「出席を取ります」

いつもの元気はどこへ行ったのか、騒がしく始まるこの教室の朝は、静かに始まった。

「……」

俺の名前を呼ぶとき、未来が言葉に詰まる。

「紺野…大将君」

「はい」

俺は小さな声で、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で返事をした。

そして、詰まることなく未来は次の人の名前を呼ぶ。

教室に入ってきて以来、未来は一度も俺を見ようとはしなかった。名前を呼ぶときに、普段の未来なら生徒の顔を見て確認するのだが、今日は違う。

ずっと出席簿に目を通したままだ。

「ごめん…」

それに気付いた俺は、そう声を出してしまった。

その言葉に、未来はぴくつと体を反応させる。聞こえてしまったみたいだ。

「じゃ、じゃあ…朝のホームルーム終わります」

それだけを言っ、未来は教室を出て行ってしまった。

未来先生の変な感じに気付くものは、この教室に俺ともう一人を除いていなかった。

「大将」

そう、俺以外のもう一人とは龍之介である。

「ごめん、何も…その…」

「大丈夫。大丈夫」

龍之介は俺がパニックに陥っているのを見て、いつも俺が龍之介にしているように、龍之介が俺の頭をナデナデとしてきた。

「りゅ、龍之介?」

女子どもの視線が痛い。

「大丈夫。大丈夫」

「ありがとう…」

俺はニツコリ笑って、龍之介の手を取った。

「ありがとな」

そう言うしかなかった。龍之介が、少し悲しそうな目をしたから。

それから、ほんの少し時間が流れる。今は、悪魔と言える現代文の時間だ。生徒達へ必死に語っている。目の前の彼女は朝のあの違和感をなくしていた。

俺は必死に授業を受けている振りをしている。未来だって本当は、この教室に居づらいはず。

…俺と同じ気持ちのはず。

それはただ俺の願いだった。あるはずのない想いだ。分かっている。

未来が、俺のことを嫌いになったこと。

知っている。理解している。

悲しみが一気に心の奥底から噴出してきて、俺は目を瞑った。心を落着かせようと、俺は大きく息を吸う。

こんなところで泣けるものか。

泣け…

ゆつくりと目を開いて、偶然未来の姿を捉えたそのとき、衝撃的な映像が俺の視界が捕らえた。

「み、く」

俺達に背を向けている未来の体が、足元から崩れていく。その光景がスローモーションに見えた。

「未来！」

俺は誰よりも声を張り上げる。そして、誰よりも先に駆け寄った。

「おい、未来！」

ざわざわとしているはずの教室の音は、俺の耳には届かない。

「未来！」

俺は叫び続ける。だけど、未来は一向に動こうとはしなかった。こいううときは体を揺らさない方がいいと、何かの本で書いてあった気がする。

「龍之介、救急車！ 委員長、先生を呼んできてくれ！」

俺は悲鳴と、ざわめきの中、ずっと未来から離れなかった。

そして、いつの間にか眼鏡は外れ、髪の毛は捲くりあがっていた。

「未来、未来！」

そのことに気付かずに、俺はずっと叫び続けていた。

「紺野、病院までは行かなくていい」

「何で！」

「授業があるだろう？ 教室に戻りなさい」

未来が救急車で運ばれていった後、追いかけてようとしていたとき、俺は体育の先生に呼び止められていた。

そいつは前から未来のことが好きなのではないか？ と噂されていた先生。聞くところによると、こいつが未来の行った病院にいくつとしていたらしい。

そんなことは許せない。許すことは出来ない。

「…わかりました」

俺はしぶしぶ承諾した…ように見せた。

やっぱり俺は未来に恋している。学校をさぼってまで、何かをしよ
うと思ったのは今日が始めてだ。

俺は先生の姿が見えなくなると、保健室に足を運んだ。

「すみませ…」

保健室のドアを開けると、いつも見かけることのない保健の先生が
そこに居た。

会いに来たのだから、居なくては困る。だけど、何度かここに足を
運んでいるにも関わらず、一度もその姿を見かけたことが無かった
から少し驚いたのだ。

とにかく、俺は急ぐ。

「先生！」

俺は勢いよく先生を呼んだ。先生は何もかもが分かっているかのよ
うな笑みを浮かべる。

「早退かしら？ 未来のために」

「え、あ、いあ、その…風邪っぽくて？」

「本当に病気の人はそんな大声をあげないし、疑問文にしません。
とりあえず、ここにクラスと名前と体調不良とだけ書いて。あとは
しておいてあげる」

「あ、ありがとうございます」

何かなんだか分からないまま、先生の言うとおりにして俺は教室に戻った。先生の昼寝騒動といい、今回といい、あの先生はどこまで適当なのだろうか？

そんな事を思いながら、先生に感謝をしつつ、俺は教室に入る。

「龍之介、俺帰るから」

鞆に手をかけて、俺はそれだけ言つと教室を飛び出した。小さな声で頑張れと龍之介の声が聞こえた。

時間が経つにつれて、未来を心配する気持ちが膨らんでいく。

俺は、家に寄らず病院へと向かった。もちろん、タクシーで。

キヨ爺や、親父には今は正直言つて会いたくない。キヨ爺に仮病で早退したなんて言つたら、怒鳴られてしまう。親父は論外だ。顔なんて見たくない。

「未来、未来」

俺は足を揺らしながら、必死にタクシーの中で病院に着くのを待った。

#41 愛を語らないで…

病院に着き、受付で未来の名前を言うと、看護婦さんが病室へと案内してくれた。話を聞くとところによると、軽い貧血だそうだ。

しかし精神的ストレス、睡眠不足が重なったの貧血らしい。

そこまで無理をさせたのは、俺のせいだ。俺が未来と出会って、未来を裏切る真似をしたからだ。

病室に着くと、そこには仰向けで目を瞑っている未来の姿があった。隣には、あの体育の先生が座っている。

未来が寝ているのをいいことに、その体育教師は未来の手を握っていた。その光景を見た俺は頭で考えるよりも、口が先に動いていた。

「おい、五十嵐！」

五十嵐とは、体育の先生の苗字。俺は怒りのあまり、呼び捨てをしてしまった。いくらム力つく教師とはいえ、こんな言葉遣いをしてから成績が下がってしまうだろう。

「え、あ、紺野！」

五十嵐は驚きの表情を見せ、未来からすっと離れた。

「未来に触れるな」

興奮は冷めず、俺は言っではいけない言葉を放つ。その言葉に、五十嵐は驚きながらも聞き返してきた。

「お前は未来先生の恋人気分か？ お前こそ何している。授業はどうした？ さぼりか？」

開き直ったような態度で、五十嵐は俺に突っかかってきた。

「どけよ。お前が寝込んでいる未来先生の手を握っていたって、言いふらすぞ？ 俺と未来先生はただの生徒と先生の関係。他に何か用事ある？」

俺が軽く脅しをかけると、五十嵐は悔しそうな顔をして病室から出て行った。

五十嵐が居なくなるのを確認すると、俺は椅子へと腰をおろす。

そして、布団から出ている未来の手を握ろうとしたとき、俺は行動を止め考えた。

俺が未来の手を握っても、未来は喜ばないだろう。と思ったのだ。

「未来……」

寝顔を見るだけと決めた俺は、そっと覗きこんだ。

たまに、顔をしかめる未来を見ると心が痛くなった。

「ごめんな」

この言葉を、俺は何度呟いたことだろうか。許されないことは分かっている。

「ごめんな」

何度もいえる。言って許してくれるなら、俺は何度だって言おう。

「ごめん…」

だけど、それは叶わない夢だ。それが分かっているのに、他の言葉が出てこなかった。かわりに俺の瞳からは涙が零れ落ちる。

俯きながら泣いていると、背後から声が聞こえてきた。

「え、どうして…」

聞き覚えがある。

「果歩さん」

未来の親友である、果歩だった。隣には絶句している恭平さん、そして美智子が立っていた。

時計を見ると、昼を過ぎたころだった。この時間だから、仕事を放り投げてきたのだろう。

しかし、ここで俺は気付く。

自分が着ている服を、姿を。

中途半端なこの変装は、俺が悠だと断定するには十分だった。服は学生服。それを果歩たちに見られたのだ。もう、言い訳も効かない。この反応を見る限り、未来は果歩と美智子には俺のことを言っていなかったようだ。

「ごめんな…さい」

一番に出てきた言葉は、さっきから何度も言っているものだった。

「悠…さん？」

信じられないような顔をしている果歩に俺は近づくため、立ち上がる。

何度もシミュレーションしてきた。俺の正体がバレた場合の対処を一番恐れていたこと、一番想像したくないことを、毎日のようにシミュレーションしていたのだ。

「果歩さん、美智子さん、そして…恭平さん」

俺はひとつ間をおき、言葉を放った。髪をかき上げ、俺は髪の手で少し隠れている自分の顔を覗かせた。

「俺、高校生なんです。分からないように容姿を変えて、未来に近寄ったんです」

そして、これまでの経緯を軽く語る。

肝心な部分、恭平さんが知っていたこと、成績のことは話さずに。

龍之介に関しては、申し訳ないが知っていたと本当のことを言った。ここで分かりやすい嘘をつく、恭平さんまで疑われてしまうから。

「あ、あんた…最低！」

美智子は泣きながら、俺の頬を思いっきりビンタする。病室に一つ大きな音が鳴り響いた。

「それで…未来は知っているんだよね？」

俺は頷く。そして、一昨日に知ったことも言った。

「悠、おま」

恭平さんが何か言おうとしたとき、俺は止めに入った。恭平さんと果歩には幸せになって欲しい。

その願いのために、俺はこの嘘をついた。恭平さんの性格からすると、俺をかばうだろう。本当に優しい人だから。

「本当にごめんなさい、だけど俺の気持ちには嘘はなかった。本当に、未来が大好きです」

その衝撃の告白に、三人は固まる。

俺は真剣な目をしたまま、言い続けた。

「愛しているんです」

その言葉の後、果歩が震えるのが分かる。そして、病室には再び頬

をビンタする音が鳴った。

「簡単に人を裏切れるお前が、愛を語らないで…」

果歩の目からは大粒の涙が流れていた。果歩のその乱れた姿を俺はただ、黙って見ていた。

いや、何も言えなかったのだ。果歩の言うとおりだから。

「もう、帰って」

果歩は俺の横を通り過ぎて、未来の隣へと向かう。

「帰ってよ。未来をこれ以上悲しませないで」

「でも…」

それだけは嫌だった。

未来と今、離れたらもう駄目な気がしたから。

「でも？ 今のお前に拒否権は無いのよ…」

俺に背を向けたまま未来を見下ろして立ち尽くしている果歩。

何も言い返せない俺が悔しくて、病室を出ようとしたときだった。

「ねえ」

静まっているこの病室では、果歩の小さく呟いた声でさえしっかり

と俺の耳に入ってくる。

「何で、未来に…近寄ったの？」

果歩の声は震えていた。

「……」

俺は振り返ることも出来ずに、ドアに手をかけたところで止まっていた。

「好きだったの？ 好きだったから…付き合ったの？ あの時、合コンに来たの？ それとも…面白半分で、未来を騙していたの？ 美智子まで…。私達、本当に、本当に！！」

果歩の言葉は、泣き声へと変わっていった。その続きを、何と言おうとしていたか分かっていた。

本当に友達と思っていたのに。

「俺は…試験に悩まされていたんです」

俺は振り返ることをせずに、果歩たちに背を向け話し始めた。

「果歩さんと会う少し前、親父に条件を出されてしまって。それが、簡単に言えば成績アップさせること。いつも、頑張っているんだ！頑張っているんだけど…現代文だけが点数が上がらなかった。そんな時、たまたま果歩さんたち、そして未来に会ったんです。未来の担当科目は現代文。最初はズルをしようと思って近づきました。だけど、時間が経つにつれて…好きになっただんです」

振り返れば、多分この人たちは絶句しているのだろう。

勇気を振り絞って、振り返ってみると、そこにはベッドに寝ているはずの未来は、起き上がっていた。

逃げ出したくなった。

だけど、逃げられない。覚悟を決めた俺は未来の瞳をそっと捕らえた。

#42 未来“先生”だろ

「許されないことだと、思っている」

未来が起きていることに、果歩は気付いたから俺にあんな質問を投げかけたのだろう。

いつから起きていたのかは知らないが、さっきの話は聞いていたに違いない。

「な、んで」

未来は驚きの表情を変えないまま、涙を流していた。

「理由があるとすれば、未来が現代文の担当だったから。あの時、俺は運命だと思った。神様からのプレゼントだと思った。こんな機会滅多にないのだから。だけど、俺は…」

そこまで言うと、俺の言葉は閉ざされた。喉に何かが詰まるような感覚に陥ったからだ。今、ここで泣いてはいけない。泣いては馬鹿にされる。泣くならするなといわれる。

「お前がどう思っているなんて、私達に関係ないの。もちろん未来にもよ。今日はもう帰って。お願い…これ以上未来を悲しませないで」

「み、く」

果歩に言われた俺は涙を堪えながら下を向いた。

俺の呼びかけに何も反応しない未来は、今何を思っているのだろうか？俺を許せないと？それは当たり前だろう。

「ごめん」

俺はその一言を残し、その場を去った。

家に帰ると、キヨ爺が玄関で俺を待っていた。

「お坊ちやま」

「何」

俺はこの家が嫌いだ。好きになることは一生無いだろう。

「お父様が書斎で待っていると」

それだけ言っと、キヨ爺は頭を下げて立ち去ろうとした。

「キヨ爺」

そんなキヨ爺を俺は呼び止める。聞けなかったことを、今聞こうと

思ったから。

「はい」

「キヨ爺は、未来が家に来ること…親父のことを知っていたのか？」

キヨ爺は俺がこのことを聞くのを覚悟していたのか、顔色一つ変えずに一言だけ「はい」と答えた。

「なんで、何で!？」

「私はこの家の雇われ者です。お父様にたてつくことは出来ません。そして、そのこの前にも申したはずです。未来様のことをよく考えてくださいと。いつかはこうなっていた。今、こうなっている、先の未来にみらいこうなっている、結果は同じだったはずですよ」

「俺は、未来が好きだったのを、9位以内に成績を収めないとアメリカに飛ばされてしまうことも、キヨ爺は知っているだろう!？どれだけ勉強を頑張ったって、9位以内なんかに入れるはずが無いだろ…。俺は龍之介と…未来と一緒にいたかっただけなのに!」

「…やってもいないのに決め付けてしまうのは、お坊ちゃんが悪い癖ですよ」

「なっ!」

「お父様が書斎でお待ちしております」

キヨ爺は深々と頭を下げ、リビングへと向かった。

「な、何だっって言っんだよ…」

俺は仕方なく、あの親父の下へと向かった。

トントン、とドアを二回ノックする。中からは親父の声が聞こえてきた。

「失礼します」

俺はドアをゆっくりと押した。

「大将か」

パソコンで仕事をしていたのか、俺の顔を見ると手を止めた。

「どうだ、学校生活は？」

「ど、どうだ…だと？」

「成績は、取れなさそうだな」

お前が図ったんだろう！？俺がこうなるように…。

怒りに満ちた気持ちを、俺は自分の拳に押し当てた。

こんなときにまで、親父刃向かう事が出来ないなんて。

「は…話はそれだけか？」

俺は悔しくて親父の顔を見ずに、地面に顔を向けた。

「未来という…女」

親父が言ったその言葉は、俺の耳にしっかり届いていた。

「未来には何もするな！」

反応的に、声を張り上げた。

「…未来“先生”だろ？」

余裕の笑みを浮かべる親父への憎悪は膨らむばかり。

「く…未来先生は関係ないだろ」

その場にもう居たくなって、俺は親父の部屋から飛び出した。

自分の部屋へと走っていく。

ごめん、未来。

俺のせいで、俺のせいで…。

部屋に着きドアを開けベッドに飛び込むと、俺は泣き崩れた。

今、未来に何かあったら俺は耐えられない。それを承知であの親父はあんな言葉を吐きやがった。

「くそ…」

涙は止まるということをしらなかった。

次の日、学校へと足を運ぶと、注目を浴びているのはすぐに分かった。

女達が俺のほうを指差しながらコソコソ何かを話している。

それもそうだ、昨日未来を呼び捨てにした上に、早退までしたのだ。噂が経つても仕方がない。このことで、未来が何か問われないといいが。

…しかし、俺のそんな考えは外れていた。

そのことに気付くのは、下駄箱を開けたときだった。

「…は？」

そこには数十枚のラブレターが入っていた。

「な、んで？」

困惑している俺の後ろには女が。

「あ、あの！」

スツと目の前に差し出されたのは、やはりラブレターらしきもの。

「う、受け取ってください！」

「……」

俺は押し付けられたラブレターを手にとると、女は顔を真っ赤にして立ち去っていった。

「大将」

女を見送った俺の隣には、無表情の龍之介が。

「へ、あ…お、おはよう」

「おはよう」

龍之介はそれだけ言うと、俺の服をちょんちょんと引っ張って、歩き始めた。

付いて来いということなのだろうか？ 不思議に思いながらも、俺

は龍之介の後ろを付いていった。

歩くこと数分、武道場の裏といういつも人気の無い場所だ。

「大将聞いて」

無表情なのは変わらないが、どこか真剣な雰囲気をかもし出している。

「大将、隠してた姿ばれた」

「あ、ああ……」

それはさっきのラブレター事件で、薄々とは気付いていたことだ。

「それと」

と、まだあるらしい。

「今日家来て」

「わかった」

俺は出来るだけニツコリ笑うと、教室へ行こうと促した。これ以上龍之介とこの雰囲気で話したくなかったから。

二人で教室に入ると、みんなが一斉にこっちを向く。龍之介の格好良さでいつも注目を浴びていたが、今日はそれとはちょっと違う注目の浴び方。

「な、なあ大将」

「なに？」

あまり話したことの無い男子生徒が俺に話しかけてきた。

「えっと、その…未来先生とどういう関係なんだ？」

男子にとっては、俺の容姿よりもそっちの方が気になるらしい。男子生徒にかなりの人気があつた未来だ。聞かれて当然だろう。

「別に。ただの生徒と先生だけど？」

俺は当たり前のように返事をする、男子生徒は「変なこと聞いてごめんな」と謝って去っていった。

教室の椅子に座る。タイミングよく、チャイムも鳴った。

「席について」

そう言いながら、教室のドアは開かれた。

そこに居たのは、未来ではなく保健の先生だった。

「諸戸先生は、少し体調が悪いようなので休暇を取っています。かわりに私が出席を取るので返事してね。じゃあ、まず…」

俺は頼杖を着いて前を見た。

いつもの風景ではない。何か物足りない。

担任じゃないから？

未来じゃないから？

愛しの人ではないから…。

そして留まることのない後悔が俺の心の中に降り注がれていた。

#42 未来“先生”だろ（後書き）

残り、本当に数話となつてしまいました。

展開が速くなっていますが、最後までお付き合いのほどお願いします。

#43 けじめのつけ方

あれから数日後、未来は体調が回復したのか学校に戻ってきた。

そして、少し前の生活に戻る。

俺は目をあわすことなく、学校へ通い続けていた。

そして思う。

こんなこととしていいのか？　ただ、未来を苦しめるだけじゃないのか？

俺は何を求めて、学校に来ているのだ？

成績なんてもの、今の俺にはもう関係ないことだろうか？

何をしても無駄なのに、俺は今日も学校に来ている。

「おっはよお！」

「あ、先生！！　もう大丈夫なお！？」

そんな生徒の声が教室の中で巻き起こっている中、俺は未来に一言も声を掛けることはできなかった。

見ることさえ、許されなかった。

声だけが聞こえてくる。

「大丈夫だよ！ 心配かけちゃってゴメンね。なんだか睡眠不足だったみたいで」

そう言う未来の声がすると、女性徒の笑い声が聞こえてきた。

みんなを不安にさせないために、無理にでも笑顔を作っているのだと思う。

そんな声だ。

この数日間、俺に何も無かったわけではない。

未来が倒れた次の日の放課後、恭平さんに呼ばれた俺は、帰宅する龍之介に付いて行った。

門の前で人が立っている。よくよく見ると、それは驚くことに果歩だった。

「果歩さん？」

「え、あ…」

俺の姿を見ると、罰の悪そうな顔をした。

「どうして、ここに？」

「恭平に言われたから」

俺のほうを見ようとはしない果歩。じつと屋敷の中を覗き込んでいる。それもそうだな、なんたつて親友を裏切った男なのだから。

「きよ、恭平？」

門の奥を見ていた果歩が、ある存在に気付いた。

「遅れてしまい申し訳ございません。龍之介様、大將様、…果歩様こちらへどうぞ」

すつと近寄ってきたのは、仕事モードの恭平さんだった。

「え、え？ 恭平どういこと？」

戸惑っている果歩を見て、恭平はニツコリ笑い俺達を案内するかのようには先頭を歩き出した。龍之介は何も言わず、恭平の後ろを歩いている。俺と果歩はそれに遅れを取らないよう歩き始めた。

三人は龍之介の部屋へと案内された。案内役の恭平さんは、一旦部

屋を出ていく。

龍之介の部屋に取り残された果歩は、大嫌いな俺に質問を投げかけてきた。

「ど、どういうこと？ どうして…恭平が？」

未知の世界に取り残されて、心配なのだろう。果歩は泣きそうな顔になっている。

「そ、それは…」

俺が執事だと言おうとしたとき、龍之介に名前を呼ばれた。

多分それは、言わないほうがいいということなのだろう。

そつだ、恭平さんはなぜ果歩をここに連れてきたのか？ 果歩に打ち明けるためじゃないのか？

龍之介の言葉が最後に、この部屋の中には沈黙がのしかかってきた。

何か話そうと思うが、言葉が出てこない。

数分経ったと思ったとき、恭平さんが部屋へと入ってきた。

もちろん、執事姿で。

「お待ちせしました」

そついつて持ってきたのは、お茶だった。四つあるということは、

恭平さんもここで話をするつもりなのだろう。

真ん中に置いてある机にお茶を置くと、恭平さんはゆっくりと腰を下ろした。

「果歩」

「な、何!？」

果歩は驚いて、声が裏返っていた。

「すまん、本当はここで執事をしていたんや」

いつもとは違う恭平さんの雰囲気。ふざけた言葉は一切使っていなかった。

「執事…なんてこと言えへんくて。この仕事、あまり自由がきかないねん。果歩に言ったら心配されるやろうし、その…軽蔑されるというか、なんかちょっと嫌やったん」

恭平さんはそう言って頭を下げた。

「すまん！ 騙すつもりはなかったんや」

床まで頭を下げている恭平さんに、果歩は少し近寄った。

「大丈夫なのに。私、そんなこと全然気にしないよ?」

ニツコリと笑って、果歩は恭平さんに頭を上げるように言った。

しかし、恭平さんは上げようとしなない。

「それだけやないんや…」

さつきよりも声が低くなった。

“それだけじゃない…？”

もしかして…恭平さんは、

「きよ、恭平さん！」

俺はその言葉をとめようと恭平さんの名前を叫んだが、言うのをやめようとはしなかった。

「俺、大将のこと知ってたねん。悠って知ってたんや」

「え？」

「ほんますまん」

恭平さんのその声は、少し震えていた。

「裏切ってもうた。俺も…お前達を」

「昨日、何も言っていなかったじゃない！嘘でしょ？嘘だよね？病院で悠さんが『恭平は知らない』って言っていたじゃない！助けなくてもいいんだよ？悠さんに同情して嘘なんていわないですよ」

果歩は眞実を受け止めていなかった。

「すまん…」

その光景が、全てを物語っていた。さすがの果歩もそこまで行くと思ひつたのか、その場に泣き崩れた。

「恭平さん…」

「大将、これが俺なりのけじめのつけ方なんや」

果歩は泣いたまま、その場で座って、龍之介はその光景を少し悲しそうに目で見つめている。

俺は啞然としていた。

なんで？　俺が嘘までついて恭平さんは知らなかったと嘘を言ったのに。

ここで告白するなら、執事のことだけでよかったじゃないか。

なのに、何で知っていたことまで話す？

何で…。

俺には理解できなかった。

それは、俺の知らない世界。今まで人と深く関わってきていなかった俺が入ることのできない場所だった。

数分経ったそのとき、そつと恭平さんは言葉を放つ。

「最悪なことをしたのは分かってる。取り返しがつかないことを俺達はしてしまった。未来ちゃんを騙して、果歩たちまで俺達は騙し続けた。謝って許してもらえんなら、俺は謝り続ける。死ぬまで、謝り続ける。でも、これだけは言っておきたい。俺も大将…悠も、本気だったんや。俺は果歩、大将は未来ちゃんにベタ惚れだったのは、近くに居た果歩にも分かってるやろ？ 果歩たちがものすごく傷ついているのは知ってる。知ってるけど、こいつだって夜な夜な泣いているんや。未来ちゃんのことを思って、泣いている。傷ついている。傷つけたこと後悔してるんや。俺達に比べてまだ若い。これ以上苦しませるのは酷すぎると思わんか？ どうか、こいつだけでも許してくれ。罰は俺が受ける。果歩が嫌なら、俺はもう近づかへんし、一生果歩たちの視界にはいらへん。だけど…悠、いや大将は未来ちゃんのこと諦められるほど心も、体もできてないんや」

恭平さんはそこまで言って、もう一度頼むと叫んだ。

「そんなの…あんだ達の勝手でしたことでしょ！？ それを許せ？ 無理に決まっているじゃない！ 私は恭平のこと好きなのに、大好きなのに、これは何なのよ！」

泣き叫びながらそう言った果歩の瞳からは涙が零れ落ちていた。

「俺も果歩のこと好きや。結婚まで考えていた。俺達もいい年やし。だから…今日言ったんや。後悔はしたくないから」

ずっと恭平さんは下げていた頭を上げると、果歩へと一歩近づく。

「なあ果歩、もう一度だけ大将にチャンスをあけてくれないか…？」

「だ、駄目よ、駄目よ！ 未来が今、どれだけ不安定なのか、恭平も知っているでしょ！？ 昨日、悠さんが帰った後の未来の取り乱し方…」

そこまで言つと、果歩の言葉が止まった。

「昨日、私あんなこと聞かなきゃよかった」

そこまで言つと、果歩は俯いた。

「大将君」

いきなり“悠”ではなく“大将”と果歩に呼ばれた俺は反応が遅れた。

「大将君」

「は、はい」

「今度の土曜日、私達いつものデパートに買い物に行くの」

「え」

「それだけ」

そう言つて、果歩はその場を立った。

「恭平、また二人で話がしたい。明日、時間とってくれない？」

恭平さんが肯定の返事をする、果歩は部屋から出て行った。それに付いてく恭平さん。

取り残された俺と龍之介は会話を交わすことは無かった。

土曜日。果歩から貰ったチャンス。

チャイムが鳴る。

俺の意識は、現在へと戻ってきた。

「はい、教科書開いて」

未来の無理やり出している元気な声が俺の耳へと届く。

今日は金曜日だ。明日がチャンスの日。

俺はいまだに、何一つ計画を立てることはできなかった。

#43 けじめのつけ方（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます。

最終話まで、残り3話になりました。

あとほんの少し、最後までお付き合いのほどよろしくおねがいします。

#44 大将の馬鹿

金曜日、学校が終わり家に着くと、珍しく親父が庭でのんびりお茶を飲んでいた。

門を通った俺は、親父と会話をしないよう、一切そつちを見ずに歩いていったのだが、案の定親父に捕まってしまった。

「大将」

名前を呼ばれたら最後、俺はもう一步も前に進むことは出来ない。

「なんです？」

意を決して親父のほうを向くと、いつものように余裕の笑みで俺を見ていた。

憎たらしい。

「どうだ、これ以上未来という女の近くに居るのは辛くないか？」

親父の放ったその言葉。

たった一言なのに、俺が挫けてしまうには十分だった。

「……」

「お前がここにいる以上、未来という女が苦しむとは思わないのか

？」

決定的な一言だった。

「な、んで：そんなこと言うんだよ！」

一度くじけた心は、立て直すのが難しい。それは、昔に一度経験していたからよく分かっていたことだった。

「お前のためだ」

そう言つて、親父はお茶へと口を運ぶ。

その行動が、どうしても許せなかった。俺がこんなに苦しんでいるのに、あの男はなんでそんなにも余裕でいられるのかと。

しかし、親父に言われたことは的確であった。

そのことが余計に俺の心の音を狂わせる。ここに居たいという気持ちが揺らぐ。

「アメリカに行けつてことか」

ハッと笑つてそういうと、親父はそうだと呟いた。

考えていたことだ。このまま、ここに居たところで俺のアメリカ行きは防ぐことは出来ないだろう。

しかも、現状では未来を苦しませるだけだった。

「もう準備は済ませてある」

その親父の言葉に俺は反応する。

「え？」

「部屋に行っても、ベッドしかないぞ？ 明日、出発するからな」

何をいきなり。

心でその言葉は言い飽きた。

親父のすることは、何でも唐突なのだ。家族に何も言わず引越しを始めた、家庭教師を雇ったり、部屋の模様替えをしたり。

だけど、今回の唐突振りには俺の心は付いていけなかった。

「明日…？」

明日は果歩がくれたチャンスの日だったから。

「そうだ。キヨ爺も一緒だから安心しろ」

ここで反抗できれば、俺の人生が少しは変わっていたのかもしれない。

縄。

俺の縛る縄は、どこまで行っても解けることはなかった。

「何時…？」

聞き返した言葉は、行くことを示すものだった。

「15時出発だ」

それは日本に居られる期限。

今の時間は17時。あと24時間さえ、日本に居ることを許されない。

「全て手続きをしているから安心しろ。俺は仕事だから送ってやることは出来ないけどな」

「…はい」

未来。

残り24時間もないと聞いて、俺の頭に浮かんだのはその名前を顔だった。

「失礼します」

俺はそう言つて、家の中へと入っていく。玄関で俺を待っていたのか、キヨ爺が立っていた。

「承諾、されたようですね」

「ああ」

キヨ爺は全て分かっている。俺なんかより、俺のことをよく知っている。

「明日、14時には家を出ます、よろしいですか？」

「…ああ」

俺はそういうと、キヨ爺の横を通り抜け部屋へと足を進ませた。

親友の龍之介には伝えたほうがいいだろう。

世話になった恭平さんにも。

…未来には、伝えられない。伝えることは許されない。

部屋に荷物を置くと、俺はキヨ爺に声をかけて車で龍之介宅へと乗せてもらった。

インターフォンを鳴らすと、俺の知っている声が聞こえてくる。

「あ、恭平さん？　ちよつと今いいですか？」

「あ、大將様ですか。今、門を開けますのでお待ちください」

その言葉の通り、門が自動的に開く。

「どうぞ」

俺の知らない執事の人が、案内してくれるようだ。

玄関では恭平さんが俺を待っていてくれた。

「恭平さん、ちょっと龍之介と三人で話したいんですけど」

申し訳ない気持ちでいっぱいだった。仕事中でもあろう恭平さんを連れ出すことになるのだから。

「分かりました。少々お待ちください」

そう言つて、恭平さんは胸元にあるマイクで何か話している。多分、許可をとっているのだろう。

「では、こちらへどうぞ」

話し終わると、恭平さんは龍之介の部屋へと俺を案内する。ドアの前まで行くと、恭平さんは二回ノックをした。

「龍之介様、大将様がいらっしゃいました」

「入って」

俺達はドアを開け、部屋の中へと入っていく。そこに居たのは、いつもどおり無表情で本を読んでいる龍之介だった。

龍之介と居られるのも、もうこの時間だけだろう。

「で、どうしたんや？」

やっぱり恭平さんは、ドアが閉じると素に戻る。

「龍之介、恭平さん、えつと…その…」

ここまで、一つのものに定着したことの無かった俺は自分の気持ちに戸惑った。

親友になった龍之介との別れ。

お世話になった、お兄さんの存在の恭平さんとの別れ。

今までにあまり体験したことのない現実。

それに戸惑っていた。

「だい…すけ？」

異変に気付いたのか、龍之介はボタンと本を閉める。

「ごめん、ごめん…俺、もうここに居れない。アメリカに行くことになった」

その言葉に驚きを隠せていなかったのは恭平さんだけではなかった。あの表情を変えない龍之介でさえ、驚いていた。

「い…っ？」

恭平さんの問いに俺は答える。

「明日、14時にはもうこの町に居ない」

「なんの、冗談やねん。大将は逃げるんか!？」

「にげ…るわけじゃないです」

逃げているのかもしれない。

「未来ちゃんは？ このこと知ってるんか？」

「知らないと思います」

親父が手を回していなかったら。

「って、ちょっと待て。明日は果歩から貰ったチャンスの日やろ？
せつかくのチャンスを棒に振っていいんか？」

「……」

その問いだけには答えられなかった。

未来ともう顔を合わすことは無い。

親父が決めたあの言葉。そのとき既に俺は、心に決めていた。

「未来ちゃん、お前のこと待ってるかもしれないで？」

それは無い。…無い。

「なあ、大将。お前は逃げてるんや、この現状から逃げてるんや！
時間が全て解決してくれると思うとんなよ！ 甘ったれてんなや
！ おい、大将きいとんのか！」

「恭平!!!」

恭平を遮ったその言葉は、龍之介のものだった。

「恭平、もういい」

「だけどな!」

「いいんだ」

龍之介の鋭い目が、恭平さんに突き刺さる。

「大将、それでいいの?」

「…ああ。俺がここに居ても、未来を悲しませるだけだから」

「本当に決めたんだね?」

いつもと口調の違う龍之介。そういうとき、龍之介は怒っているのだ。

これは最近気付いたこと。

「もう、決めたことなんだ」

「大将の馬鹿」

龍之介のその言葉を聞いた直後、俺の左の頬には大きな衝撃が来た。

「それで許す」

龍之介の悲しそうな声、俺に手をあげたのは初めてだった。

「龍之介、ごめんな…」

分かっている。これぐらいのことはされて当たり前だった。

「何時の飛行機？」

「15時」

「見送る」

それだけ言つと、龍之介は本に目を通した。

「なあ、大将…いや、なんでもない。俺も向かいに行くから待って
けや」

「ありがとう…」

夜になると、キヨ爺が俺を迎えにきてくれて家へと帰る。

日本、最後の夜をその日涙を流しながら過ごした。

次の日の土曜日。

俺はキヨ爺と一緒に空港へと向かう。

日本にありがとうと、心の中で呟いて。

未来にごめんなと、言葉に出して。

#44 大将の馬鹿（後書き）

残り二話となりました。

最後までお付き合いのほどお願いします。

#45 恋愛完全マスター

未来。

あの時、俺は未来と出会って救われたと思った。

こんな偶然…いや、奇跡があるのかと思った。

もしかしたら、“悠”と“未来”が初めて会った時から恋をしていたのかもしれない。

その後、未来の笑顔を全て俺のものにしたいとまで考えたんだ。

なあ、未来。

俺は今日、ここを離れるよ？

それを未来は感じ取ってくれているのかな。

未来に好きだといわれて、心が跳ねた瞬間を俺は忘れることは無いだろう。

あのときの幸福感は俺の人生で多分、ぶっちぎりの一位を守りきるに違いない。

「お坊ちゃま」

過去を振り返っていた俺を、現実世界に戻したのはキヨ爺の声だった。

「どうした？」

後部座席で、俺は窓の外を見ている。

「少し、トイレに行ってきますが、どうしますか？」

そこは見慣れた風景。

俺が何度も行ったことのある、場所だった。

「キヨ爺……？」

キヨ爺は何も言わず車を出る。それは多分、キヨ爺が最後にくれたチャンス。

そこは今日行くはずだった、果歩がくれたチャンス場所。
デパートだった。

キヨ爺、ありがとう。

そう呟いて俺は車を飛び出した。

何も考えずに。

さっきまで未来との出会いを思い返していたからだろうか。無性に
未来が恋しくなっていた。

会いたい気持ちだが、一段と膨らんだ。

何を言う？

このチャンスに何を言おうか？

そんなものは今、関係なかった。

昨日までは人目だけでも、未来の姿が見られればいいと思った。

日本で最後の思い出。

あの時、未来に出会わなかったら、俺はもしかしたら日本に居続けられたのかも知れない。

だけど後悔なんてしてない。

未来と出会ったことに関しては。

好きになってしまったのが、間違いだった。

大好きになってしまったせいで、俺はどんどん闇へと嵌っていつてしまった。

離れることの恐怖感。

心が痛むことへの恐怖感。

未来を好きにならなければ。

そう考えた時もあった。だけどそれはもう後の祭り。

今更何を言っても無駄だ。

俺は今走っている。

それが答えだろう？

何を迷っていたんだ俺は。

未来が好き。

それは変わることの無い事実だろ？ 未来が苦しんでいるかもしれない、俺のせいで苦しんでいるのかもしれない。

時間が経てば、もしかすると傷が癒えていくかもしれない。けど、完全に拭える事はないんじゃないか？

それを治せるのは、原因になった俺だろ？

未来を助けられるのは、俺しか居ないってことだろ！

未来に信じていいんだよね？ って言われたとき、俺はどう思った？

信じて欲しいって思ったんじゃないのか。

俺が裏切ったことは変わらない。もし過去が変えられるのなら、全てを打ち明けてもう一度未来と出会いなおしたい。

学生と先生だからなんだっていうんだ？ そんなものが恋愛の壁になるのならば、俺がぶち壊してやる。

俺は未来と一緒に居たい。未来だって、一瞬でもそう思った時期があったはずだ。

悠も大将も俺は俺だ。

どっちも俺なんだ。

未来を悲しませたのは俺なんだ。

受け止めて欲しい、俺のこの気持ちを。

勝手かも知れない、だけどそれは純粹に俺の願う気持ち。

未来はどう思っている？

ただ、俺に会いたくないと思っただけ？ それとも他に何かある？

もう一度だけ、俺の顔が見たいとか。…そんな図々しいこと考えちゃ駄目だよな。

もし、俺を許してくれるというならば、俺はきつとなんだってする。

未来のために全てをささげる。

この気持ちが全てなんだ。

今の俺の全てなんだ。

分かってくれないかもしれない、もしかしたら拒絶されるかもしれないというのに俺は…

どうしても未来に会いたい。

今、未来に会って言葉を交わしたい。

未来と出会って買った本。

恋愛完全マスター。

俺はあれに助けられてきたと思っていた。だけど、違う。結局は俺が決めたことだったんだ。

俺がしたことだったんだ。

恋愛を完全にマスターできる奴なんて居るわけがない。

恋愛ってものは不安定で、何が起きるか分からない。

結局は二人が何をするか、二人がどう思うか。

恋も愛も、全て共通するのはそのこと。

相手のことをどれだけ尊重できるかって事だ。

俺は未来を尊重できなかった、だから失敗した。

本なんて関係ない、もう今からは俺がぶつかる、そのままの俺が。

受け止めてくれ、お願いだから。

未来。

笑ってほしい、もう一度。

俺の前で、お前の笑みを見たい。一緒に語り合いたい。

なんたつて俺は…

「未来！」

なんたつて俺は未来のことが…

「未来！！」

なんたつて俺は未来のことをこの世で一番…

「ゆ、、、う?」

「未来、大好きだ!!!」

離れることはもう逃れられないのかもしれない。

「俺、お前を裏切ったこと後悔してる！ 本当に後悔してる！」

それでも俺は未来を愛し続ける。

「許して欲しい…」

「え、な…んでここに…?」

「考えた、色々考えた。未来と出会ってからのこと、これまでのこと。だけど、もう後ろは振り向かない。後悔はするだけした」

「ゆ…う」

「大好きだから、それは変わらない！ 未来のこともう裏切らない、こんな辛い思いさせない」

「悠」

「好きだから！ 大好きだから！」

「悠！」

「だから、みく…」

言葉を遮ったのは、未来の温もりだった。未来が俺に抱きついてきたのだ。

「もう一度会いに来る、今度は大将として」

俺の手はそつと未来を包んだ。

「お前を幸せにしてみせる」

涙を流している未来の声が、俺の耳に届いた。

「大好きだよ」

俺はそつと未来にキスをした。

#45 恋愛完全マスター（後書き）

次回が最終話となります。

ここまでお付き合いくださって、ありがとうございます。
感謝の気持ちでいっぱいです。

#46 じゃあな（前書き）

これが最終話となっております。
最後は、大将視点ではありません。
どうか楽しんでもらえたら嬉しいです。

4 6 じゃあな

じゃあな。

最後にその一言を残して、彼は去って行ってしまった。

彼が日本から居なくなったと知ったのは、月曜日のこと。

それは職員会議で、学年担任が放った言葉で知った。

「紺野大将君は、家庭の事情によりアメリカの医師学校へ転校されました。担任は……えっと、諸戸先生でしたよね。変更した出席簿を渡しますので、取りに来てもらえますか？」

私は拒絶した。

彼がこの日本にいなかったという事実を。

土曜日、彼は私を大好きだと、もう裏切らないと叫んでくれた。

本当は彼に会うまで私は、絶対に裏切ったことを許さないと決めていたんだけど、顔を見てしまったら一発でひっくり返ってしまっていた。

気持ちだが、全てが。

やっぱり愛おしい、あの生活は嘘だと思いたくない。

その気持ちが勝ってしまった。

そう決めた直後の出来事。

こんな事態は考えられなかった。

「諸戸先生…？」

いつの間にか涙を流していた私は、学年主任の先生に心配されてしまった。

「う、ごめんなさい！」

私は職員室の先生に頭を下げると、新しい出席簿を取りに向かった。中を覗くと、やっぱり彼の名前は見つからない。

「だ、いすけ…」

そう呟いたのは、初めてだった。

今まで、私の中での彼は“悠”だったから。

「大丈夫よ」

職員会議が終わって、机の前で啞然としている私に話しかけてくれたのは、保健の先生である日向 沙羅だった。

沙羅は学校生活に慣れられなかった私を支えてくれた人物でもある。何より、恋の相談相手だった。

大親友とはいっても、果歩や美智子にはあまり彼のことを相談することはできなかった。

美智子は、彼のことが大好きだったから。

「彼ならきつと戻ってくる。だって貴方のことあんなに愛していたもの」

にこつと笑って、肩をポンポンとしてくれただけで、私はどれだけ救われただろうか。

だけど、その言葉さえ全ての不安を拭うことは出来なかった。

朝のHRが始まるまで残り5分。

いつものように、私は職員室を教室に向かって出て歩き出した。

「はい、みんな席について！」

この学校の生徒達は、最近の子では珍しい優等生の集まりだ。どんな学校でも、先生の言うことを聞かない生徒が、数人は出てくるという話を聞くのに、この学校に限っては、そんな生徒を見かけたことがない。

私の声で、みんなは静かに席へ着いた。

ただ一つ…目の前の空白を残して。

「えっと…」

今日、一番に言わなければいけないことは決まっていた。

もちろん、目の前の空席についてだ。

彼はいつも学校に来ていた。どんなに辛くたって、学校に来ていたから、私は彼が休んだところを見たことが無い。

「紺野大将君ですが…」

説明するのは辛かった。

「家庭の事情で、アメリカの学校へ転校されました。いきなりだったので、お別れを言うことを…」

生徒達の前では涙は流さない。そう決めていたのに…。

「お別れをね、言うことができなくて…」

一粒、また一粒…涙があふれ出てきた。

「じ、ごめんなさい」

そう言っただけで私は生徒達に背を向ける。泣き顔は見られなくなかった。

涙を拭くと、私は根性で涙を止め、生徒達に笑みを送る。

「お別れを言うことができませんでした。何か伝えることがあるなら、私が親御さんに伝えてもらうように頼みますけど、何かある人は居ますか？」

その質問に手を上げるものはいなかった。

彼はクラスの中では孤立している存在だった。あの容姿を隠してまで学校に通っていたのだ。それは、彼が望んだことなのだろう。

しかし数日前、沙羅から聞いた話ではあの容姿が全校生徒へと広まったらしい。私が倒れたときに取り乱したせいだと言っていた。

あの彼が取り乱すというのを想像しづらいが、私のために取り乱してくれたことは素直に嬉しいと感じた。

「では、出席を取りますね」

名前を呼ぶ。

いつものように、一席の子から。

ただ、いつもと違ったのはやっぱり、彼の名前を呼ぶことがなかったことだろう。

「先生」

私はその日、彼のことを忘れようと、必死に仕事していた。全ての授業が終わり、教室を出ようとき、後ろからある人が話しかけてきた。

「な、何？」

私に話しかけてきたのは、あまりにも意外な人物。

「いいですか？」

「うん。じゃあ職員室に……」

「……」

「…保健室でいいかしら？」

私の言葉に目の前にいる龍之介君は頷いた。

「先生」

「何？」

「これ…」

私は沙羅に頭を下げ、放課後の保健室を借りたいと頼み込んだ。沙羅はあっさりOKの返事をくれた。

そして今、龍之介君は私に一通の封筒に入った手紙を差し出している。

「これ、何？」

「手紙」

それは見れば分かる。

そつと貰った封筒を裏返すと、そこには紺野 大将と書かれていた。

「だ…」

名前を口に出そうとしたが、私の理性があと一步のところでき止めてくれた。目の前には龍之介君。あまり醜態を晒すことはできない。

なんたつて、彼の名前を出してしまえば、たちまち私は涙を流してしまうからだ。

「どうしてこれを？」

私の問いに無表情で龍之介君は『頼まれた』と一言返した。

「先生」

手紙をじつと見ていた私は、龍之介君に名前を呼ばれて顔を上げる。

「本当にごめんなさい。大将のためとは言え、先生を騙していたのは俺も同じです。だけど、大将は先生のことが本当に好きでした。これだけは分かってもらって欲しいんです。彼は途中から、自分の気持ちが分からなくなっているみたいでした。それを止められなかったのも、俺のせいだと思います。先生、どうか大将を見捨てないであげてください」

いつも単調な口ぶりを見せている龍之介君が、こんな長文を、しかも…彼のために。

「ありがとう、龍之介君。私はもう大丈夫だよ。龍之介君は本当に友達思いなんだね」

私がニツコリ笑うと、龍之介君も少し安心したのか、少し笑顔になった気がした。

「じゃあ」

そう言つて、龍之介君は立ち上がって保健室を出て行った。

取り残された私は、右手に掴んでいる封筒に目を向ける。

「ここでなら泣いても…」

沙羅と龍之介君から頂いた、一人の時間。

「大将…」

私はそつと、愛しい彼の名前を呟いた。

数分間泣いた後、私は封筒へと手をかける。

手紙をその中から取り出すと、見覚えのある字で長々と私宛にメッセージが書かれていた。

突然手紙を出してごめん。

今、この手紙は空港で書いているんだ。俺の執事に頼んで、龍之介の下へ届くようにしたから、多分未来の手に行っていると思う。

手紙とか初めてで、何を書けばいいか分からないけど、自分の思ったことを書くよ。

まず、ごめんと言いたい。

何も言わず日本を出て行ってしまった。だけど、それは俺のけじめだと思ってもらいたい。

勘違いしないでくれ、未来を捨てるとかそついう意味じゃない。もつと立派な男になって、未来を迎えに行くけじめだ。

無責任なのは分かっている。

だけど分かって欲しい。俺のこの我儘を。

なあ、未来。

俺、立派になって戻ってくるから、それまで待っていて欲しい。

俺の居ない間に、未来がいい男を見つけて、そいつの所に行ってしまったら、俺はそこまでの人間だったってことだ。

こんなこと、俺が言っているのか分からないけど、俺は未来を信じ

ているから。

未来は俺をもう一度信じて欲しい。

滞在期間の予定は三年。そのときには俺はもう二十歳。未来は…もう、おばさんかな？

…冗談だよ。

アメリカでは、未来のことを思って頑張る。

心の中で応援してくれたら嬉しい。それだけで俺の励みになるから。

俺が立派になって、未来を迎えに行くその日がくるまで。

未来の事を世界で一番愛している 大將 より

そう書かれた手紙は、私の涙腺を崩壊させるのには十分すぎた。

私の泣き声は、保健室の外にまで漏れているだろう。

それでもいい、この幸せを表現できるのは涙しかないのだ。

「だい…すけ」

愛おしかった。

誰よりも彼のことが愛おしかった。

あの裏切りが、とてつもなく小さなことに思える。それほどまでに、私の心の中は幸せで満たされていた。

「大将」

今度ははっきりと発音できた、私の大好きで、大好きで仕方の無い彼の名前。

世界でただ一人、私を幸せに出来る人の名前。

初めて貰った彼からの手紙は、私の幸せの涙で濡れて行った。

時は経ち、桜の花びらが舞い散る季節。

「先生、今日はなんか嬉しそうだね？」

いつもお昼ご飯と一緒に食べている、女生徒が私の顔を見てそう言った。

「え、分かる？」

今日、にやけていると指摘されたのは、初めてではなかった。

「なんかいい事でもあったの？」

不思議そうな目で私の顔を覗く彼女を、私は興奮のあまり頭を撫でてあげた。

「今日はね、私の大好きな人が帰ってくるの」

あれから三年が経った今日。

彼が帰ってくるのだ。

「え〜！ 学校のマドンナ的存在の未来先生に彼氏がいたなんて…」

「えへへ…」

私のにやけた顔は、変わることは無いだろう。

待ちに待った日だから。

その日、学校が終わると、私は急いで駐車場に向かった。

もちろん、彼を迎えに行くため。

一秒でも早く、彼に会いたい。

その気持ちで、私を急がせた。

未来。

聞き覚えのある声が、私の耳を捉える。

「迎えに来たよ」

その言葉を聞いた私は、笑顔をその声の持ち主に向けた。

「待ってたよ！」

私は走る。彼のもとへ。

大好きな彼に一生私を離さないと、約束させよう。

「大将！！」

そして私は彼の胸元へ飛び込んだ。

F
i
n

#46 じゃあな（後書き）

このあと、あとがきとなっております。
よろしければ、見て行ってやってください。

あとがき

まず最初に、この小説を読んでもくださった皆様。
本当にありがとうございます。

恋愛完全マスター

全48話…完結いたしました。

途中、一ヶ月ぐらい更新を怠ってしまって申し訳ございません。

とりあえず、完結させることが目標だったので、何か心に安心感が
湧いてきています。

今回の話のテーマは”裏切り”についてでした。

大將は未来や美智子を裏切り、恭平は果歩を

間接的には龍之介も未来を裏切っていました。

最終話の龍之介の長台詞。

人は裏切りをいつかはしてしまうものです。

それは大切な人であったり、見知らぬ人であったり。

とにかくその間には深い傷が出来てしまいます。

今回はそれを愛という形で拭いました。

皆様はそれをどういう形で、拭ったり切り捨てたりしますか？

裏話ですが、恋愛完全マスターには色々なタイトル候補が小説が始まった後に出てきました。

まあ、始まってしまったものはしょうがないと思って、このままタイトルを突き通したんですが、今よく考えてみたら…

完全に成し遂げることをマスターって言つのでは…？

…。

とりあえず、恋愛完全マスターを読んで下さった皆様、本当にありがとうございました。

これから気の向くままに小説を書くつもりです。

文章の構成をよくし、誤字脱字をなくせたらな…と思いつつ

小説の勉強を試みようかな、なんて考えています。

本当に最後までお付き合いくださった方々、心から感謝しています。

ご感想など、お待ちしております。

作者でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5438e/>

恋愛完全マスター

2010年10月22日00時23分発行